

靈界物語 第六卷 山河草木 巳の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第六十六卷』天聲社

1971(昭和46)年04月18日 第二刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵

目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 月の高原 つき こうげん

第一章 曉の空 あかつき そら 一六八三

第二章 祖先の恵み そせん めぐ 一六八四

第三章 酒浮氣さけいけい（一六八五）

第四章 里庄りしやうの惱なやみ（一六八六）

第五章 愁雲しううん退散たいさん（一六八七）

第六章 神軍しんぐん義兵ぎへい（一六八八）

第二篇 容怪ようくわい變化へんげ

第七章 女白浪をんなしらなみ（一六八九）

第八章 神乎かみかま魔乎まか（一六九〇）

第九章 谷底たにぞこの宴えん（一六九一）

第一〇章 八百長やほちやうげき劇げき（一六九二）

第十一章 亞魔あまの河かは（一六九三）

第三篇 異燭いしよく獸じうきよ虚きよ

第一二章	戀 <small>こひ</small> の暗路 <small>やみぢ</small>	〔一六九四〕
第一三章	戀 <small>こひ</small> の懸嘴 <small>かけはし</small>	〔一六九五〕
第一四章	相生松風 <small>あひおひまつかぜ</small>	〔一六九六〕
第一五章	喰 <small>く</small> ひ違 <small>ちが</small> ひ	〔一六九七〕

第四篇 戀連愛曖れんれんあいあい

第一六章	戀 <small>こひ</small> の夢路 <small>ゆめぢ</small>	〔一六九八〕
第一七章	縁馬 <small>えんば</small> の別 <small>わかれ</small>	〔一六九九〕
第一八章	魔神 <small>まがみ</small> の囁 <small>ささや</small> き	〔一七〇〇〕
第一九章	女 <small>をんな</small> の度胸 <small>どきよう</small>	〔一七〇一〕
第二〇章	眞鬼 <small>まきじ</small> 姉妹 <small>まい</small>	〔一七〇二〕

あとがき

序文
じよぶん

靈界物語もいよいよ六十八巻となりました。昨年六月以來口述を中止し、エス
ペラントの輸入や、紅卍字會との提携などにて閑暇を得ず、とんで本年一月、靜
養のため、道後温泉に遊び、その際六十六巻（編者註・発行は六十九巻）を編述
したきり、本年十二月一日まで口述を中止してゐたのです。同一日より物語六十
七巻（編者註・発行は特別編）として蒙古人の真相を口述編纂し、次いで十五、
十六、十七の三日間を費やして、漸く六十八巻に當る山河草木未の巻を口述し了
へました。この十八日といふ日數は彌勒の證兆であつて、本物語口述最初の日
相當します。出來得べくんば、舊本年中に山河草木全部を完成したい考へであり
ます。

本巻よりは照國別のいよいよ活動となり、やや軍事的趣味を帶ぶることとなり

ました。無抵抗主義の三五教が軍事に關する行動を執るのは、少しく矛盾のやうに考へる人もあらうかと思ひますが、混沌たる社會においては、ある場合には武力を用ふるの止むなき場合もあります。三千世界の父母ともいふべき阿彌陀如來でさへも、慈悲を以て本體としながら、右の手にて折伏の劍を有ち、左手には攝受の玉を抱へて、衆生濟度の本願を達せむとしてゐるのです。回々教の教祖マホメツトも右手に劍を持ち、左手に經典を抱へて、アラビヤ廣原に精神的王國を建設した事を思へば、人智未開の時代においては、三五教の宣傳使といへども軍事に關係せないわけには行かないでせう。讀者はこの間の消息を推知して神の意の在るところを諒解せられむことを希望します。

大正十三年十二月十八日

於教主殿

本卷はフサの國葵の沼の畔にて、齋苑の館より派遣されたる、照國別の宣傳使
 一行が、黄金姫、清照姫の兩宣傳使と袂を左右に別つてから、照國別はバラモン
 軍の大足別將軍が後を追うて、地教山方面に向かふところの物語であります。
 特に本卷記載の事實を摘記すれば、照國別一行が、タライの村の老婆が家に至
 り、瀕死の状態にあるサンヨを救ひ、かつ二人の娘の家出せし消息を聞いて、從
 者なる梅公が義侠心を發露させ、次いで同じ村の里庄ジャンクの一人娘や、隣村
 のサンダーといふ美男子の行方を搜索し救ひ出さむとする一條から、國王の命に
 依りて、トルマン國の首府バルガン城を守るべく義勇軍を起し、ジャンク並びに
 照國別一行は馬に跨がり、大廣原を進み行く目ざましい場面や、梅公がただ一人
 列を放れてオーラ山に向かふ途中、ゆくりなくもサンヨの妹娘花香の危難を救ひ、
 二人同じ駿馬に跨がり、寶石を纏めたやうな星の空を、男女二人が誰憚らず甘い
 囁きを恣にしながら、オーラ山に進む齒のうくようなローマンスや、山賊の大頭

目ヨリコ姫の岩窟に突入し、詐術をもつて人を迷はせむたる大杉の上の怪しき光を吹消し、天狗の假聲を使つて、シーゴ、玄眞坊などの悪黨どもの肝を奪ひし所へ、大膽不敵なる女頭目ヨリコ姫がやつて来て、樹上に梅公や花香のゐることを看破し、繩梯子の結び目をといて、二人を地上に轉落させ、隙を窺つて二人を厳しく縛し、岩窟内に投げこむ一條や、サンダー、スガコの兩人と同岩窟内で思はず面會する奇縁から、つひにはヨリコ姫、花香姫姉妹の名乗りをなすなどの波瀾重疊たる面白き物語であります。その間には種々雑多の世情人情等が織りこまれ、處世上の羅針盤として、強ち無價値でないことを信じます。

大正十三年十二月十八日（舊十一月二十二日）

於教主殿

第一篇 月の高原

第一章 曉の空（一六八三）

三千世界の救世主

泥にまみれし現世を

洗ひ清むる瑞御靈

神素盞鳴の大神の

堅磐常磐に鎮まれる

ウブスナ山の大靈場

齋苑の館の神柱

八島の主の命を受け

此世の運命月の國

ハルナの都に蟠まる

醜の曲津を三五の

誠の道に言向けて

世界の平和と幸福を

來たさむ爲の宣傳使

常夜の暗も照國の

別命は國公や

梅公照公ともなひて
荒風すさぶ河鹿山

霜にふるへる冬木立
神の使命を畏みて

スタスタ登り下りつつ
數多の敵の屯せる

難所を漸く突破して
水底までも澄み渡る

葵の沼の月影も
清照姫や黄金姫の

教司に廻り會ひ
ここに袂を別ちつつ

神の依さしの宣傳歌
聲も涼しく唄ひつつ

東南を指して行く
月日重ねて漸くに

デカタン國の高原地
タライの村の棒鼻の

茶屋の表に着きにけり。

梅公「先生、葵の沼もずるぶん廣いものですな。清照姫様、黄金姫様にお別れし

てから、一瀉千里の勢ひで、人造テクシーに乗つて、ずるぶん驅け出したつもり

ですが、たうとう夜が明けたぢやありませんか。速力といひ、時間から考へて見

れば、まづ二十里は確かに突破したでせう。その間は一方は湖面の月、一方は茫茫たる原野、人家も無く、時々怪獣の逃げ出す音に驚かされ、ヤツと此處で人家を見つつけ、休息しやうとすれば、どの家もこの家も戸を締めて静まり返つてゐるぢやありませんか」

照國「ウン、旭のガンガンとお照り遊ばすのに、氣樂な所と見えるわい。茫漠たる原野に人口稀薄と來てゐるのだから、生存競争だとか、生活難だとかいふ忌まはしい騒ぎも起らず、太平の夢を貪つてゐるこの國人は、實に羨ましいぢやないか」

「しかし先生、私の考へでは各戸戸締めをして静まり返つてゐるのは、あなたの仰有る太平の夢ぢやありませんまい。コレ御覽なさい、ここには血汐が流れてをります。この血は決して犬や豚の血ぢやありませんまい。大足別の部下が人民を殺害したり、いろいろの兇惡な事を行つた記念ではありますまいか。私の考へでは、人民が恐れて戸をしめて、息を殺してゐるのだらうと思ひますがな」

「大足別將軍がどうやら此處を通過したらしいから、あるひは掠奪、強盜、強姦、

殺戮など、あらゆる悪業をやりよつたかも知れないなア。實にバラモン軍といふ奴は亂暴な代物だ、ともかく此の家を叩き起して様子を聞いてみようぢやないか」

「何だか私は体内の憤怒といふ怪物が頭をもたげ出し、胸中いささか不穩になつて來ました。ヒヨツとしたら、この家の中にはバラモンの頭株が潜伏してるのではありますまいか。里人は已にすでに家を捨てて逃げ去り、その後へバラモンの奴、ぬつけりこと住み込んで、吾々を騙し討ちする計畫かも知れませぬぜ」

「ともかく、戸を叩いて呼び起し、内部の祕密を調査してみようぢやないか」

「オイ、照さま、君は何をふさぎ込んであるのだ。こんな所でへこたれて何うするのだい。これからが千騎一騎の性念場だぞ。神軍の勇士が、その青ざめた面は何だい」

照公「別に鬱ぎ込んであるのぢやない」

梅公「そんなら何だ。心の戸締めをやつて、この家の主人のごとく、家の隅くたで慄うてゐるのだらう。何時も偉さうに云つてゐる刹那心はどこで紛失してしまつたのだ」

「まづこの家を開けて見給へ、誰も居ないだらう。人間の住んでゐる家は屋根の棟を見ても活々してゐる。ここはキツと空家だよ」

「馬鹿いふな、何ほど不景氣でも家賃が高くつても、かう五軒も六軒も空家が竝ぶ道理がない。また空家なれば、はずかいピシヤンがありさうなものだ。斜かい紙の貼つてないところを見れば、人がゐるに定つてゐるワ」

「斜かひピシヤンつて、何の事だい」

梅公「ハハハハ八世情に通じない坊んさまだなア。斜かいピシヤンといふことは、白い紙に貸家と書いて、戸をピシヤンと締め、それを斜交ひに貼ることだ。それのしてない所はキツと人がゐるのだ。ともかく戸を叩いてやらうかい。三千世界の救世主、その救世主のお使が門に立つてゐるのに、心の盲、心の聾は門を開いて迎へ入れ奉り平和と幸福とを味はふことを知らないものだ」

と言ひながら、ドンドンと拳を固めて、メツタやたらに、戸の破れるほど叩きつけた。幾ら打つても叩いても、鼠の聲一つ聞えてこない。

梅公「どうも不思議だなア。不在の中へ無理に這入れば空巢狙ひと誤解されるな

り、又たとへ人が居つてもお入りなさいと言はない限りは、家宅侵入罪となるなり、コリヤ断念して、どつか外の家へ行つて休息することにしよう。先生、さう願つたら何うでせうか」

照國「ウン、お前のいふのも一應尤もだが、思ひ切つて戸を叩き破つてでも這入らうぢやないか」

梅公「先生の御命令とあればやつつけませう」

と無理に戸を引き開け、屋内に三人は進み入つた。見ればあまり廣からぬ座敷の隅に、雁字がらめに縛られ、額口から血を出して、蟲の息になつた老婆が一人横たはつてゐる。

梅公「先生、ヤツパリ空家ではありませぬワ。可哀さうにこんな老人が、しかも眉間に傷をうけ、雁字搦めにくくられてゐるではありませぬか。この婆さまを助けて、事情を聞きませうか」

照國「アアともかく神様にお願ひしよう。サアお前達も私と一緒に神言を奏上しよう」

「ハイ畏まりました」と梅、照の兩人は音吐朗々として神言を奏上し、天の數歌を數回繰り返した。老婆は初めて氣のついたかの如く、秋の蟲の霜に惱みしごとき細き聲を張り上げて、

「何れの方かは知りませぬが、よくマアお助け下さいました。どうぞ、お慈悲にこの繩を解いて下さいませ」

梅公「お前が頼まなくても助けに来たのだ」

と言ひながら、短刀を取り出し繩目をプツと切つて、

「サアサアお婆さま、安心なさい。モウ吾々が現はれた以上は、虎でも狼でも獅子でも恐るるに足らない。ここにゐられる先生は照國別といつて、神力無雙の勇士だよ。これには何か深い理由があるだらう。一度話して下さいさらぬか」

老婆「ハイ有難うございます。喉が渴いてをりますから、恐れながら水一杯いただけますまいか」

梅公「ヨシヨシ水は無代だ。お前が青息吐息をついてる九死一生の場合を、葵の沼で無料で購入して来た水筒の水、サアサア遠慮はいらぬ、幾らなつと呑見なさ

い。一杯で足りなけりや、若い者の足だ、幾らでも汲んで来てやらう』

と水筒を老婆の口にあてた。老婆は飢え渴いた餓鬼のごとく、クツクツと喉を鳴らし、瞬く間に水筒を空にしてしまった。

梅公『これがいはゆる命の清水だ、瑞の靈の御利益だ。婆さま、しつかりしなさいや』

老婆『ハイ有難うございます。あなたに頂いたこの清水、五臓六腑に浸みわたり、體中が活々として参りました。そして俄かに温かくなつて参りました。有難うござ

います』

照公『時に梅公、このお婆さまの額口にはエライ傷が出来てるぢやないか。この傷をば直してやらなくちやならうまい』

梅公『オイ照さま、お土だ お土だ』

照公は「なるほど」とうなづきながら、表へ駆け出し、一握りの黄色い眞土を取つて来て、婆さまの疵口に塗り、繃帯で鉢巻をさせ、二三次回数歌を奏上し、

『サアお婆さま、これですぐ平癒するよ』

老婆「ハイ、おかげさまで最早痛みがとまりました。人を惱める神もあれば、人を助ける神もあるとは、よく言つたことでございます。あなたは本當に救世主でございませぬ。この御恩は決して忘れはいたしませぬ。私はサンヨと申す者で、若い時から夫に離れ、二人の娘と細い煙を立てて暮してをりましたが、姉の方は性質が悪く、十八の春、私の宅に泊つた修験者に拐かされ、行衛は知れず、あとに残つた一人の妹を力として、餘命をつないでをりましたところ、バラモン軍の大足別將軍の部下がやつて參りまして、私の娘を掠奪しようと思つたので、命に代へても渡されないと拒みましたところ、何といつても老人の非力、一方は血氣盛りの命知らずの軍人、五六人の奴に、あなたの御覽の通り、手足を雁字り巻に縛られ、刀の「むね」で額を打たれ、致死期の際に、あなたに助けられたのでございませぬ、どうか貴方がたの御神力によりまして、誠につけ上がりのした願ひなれど、モ一度娘に會はせて下さることは出来ませぬかなア」

と老の涙に膝をぬらしてゐる。照國別は氣の毒さに堪へず「ウン」と言つた切り、兩眼を塞いで、何事か祈願をこらしてゐる。照公も兩眼に涙を浮かべ、老婆の瘦

せこけた哀れな面を見つめてゐた。老婆は一行の面をうち仰ぎながら、宣傳使の返答いかにと待ち佗面である。少時は沈黙の幕が四人の間におりた。

梅公「婆アさま、そのさらはれた娘といふのは年頃は幾つだな」

サンヨ「數へ年十八歳でございます」

「年は二八か二九からぬ、花の荅の眞娘、人もあらうに、バラモン軍にさらはれるとは因果な母娘だなア。ヨーシ、私も人を救ふ宣傳使の卵だ。男子が一旦こんなことを聞いた以上、どうして見逃すことが出来よう。義侠心とかいふ奴、私の肚の中でソロソロ動員令を發布しさうだ。婆さま、安心なさい。キツと私が取り返してみよう、男子の言葉に二言はありませぬぞや」

「有難うございます。枯木に花の咲いたような気分になりました。私の生命は何うなつても惜しみませぬから、どうかあの娘をお救ひ下さいませ。そして私はもはや老齡、此世に少しも未練はございませぬが、姉といひ妹といひ、行衛が知れないのでございます。どうぞ貴方がどちらかにお會ひ下さらば、娘の身の上をお任せいたします」

「お婆さま、お前の娘とあらば随分別嬪だらうな。お前の面立ちも一しほ氣品が高く、昔は花にウソつく美人であつたらう。その倂がまだ残つてゐるよ」

「ホホホ御冗談ばかり仰有いまして……私はこの通り皺苦茶だらけの狸婆でございませうが、親の口から申すと何だか自慢のやうにございませうが、この里きつての美人だと、娘は言はれてをりました」

「さうだらう、美人と聞けばなほさら憐れを一層増すやうだ。お婆さま、心配なさいませうな。キツとこの梅公が助けて見せませう」

「何分よろしう願ひます」

照公「オイ梅公、美人と聞いて、にはかに貴様の顔色がよくなつたぢやないか、ハツハハハ」

梅公「一度に開く梅公の花嫁だ。キツと俺のムニヤムニヤムニヤ」

照公「ハハハハハ、たうとうあとをボカしてしまひよつたな。しかし先生、梅公が輕率にも、美人と聞いて安請合に請合しましたが、どうでせう、ここの娘も氣の毒だが、大足別の部下が行く先ざきであらゆる悪虐無道をやつてゐると思へば、

ここの娘の一人に全力を盡すわけにも行きますまい。あなたと私は一時も早くこの場を立ち去り、ここの娘の一件は梅公に一任しておこうぢやありませんか」
照國「いや、心配はいらぬ。何事も吾々の耳に入つた以上は、キツと神様のお引合せだから、娘さまの所在も分るだらう。またお婆さまもますます壯健になり、千歳の命を保つであらう。ともかく三人が肚を合せ、御神業のために進まうぢやないか。コレコレお婆さま、照國別が呑み込んだ、キツと二人の娘を助けて上げませう」

サンヨ「ハイ有難うございます。何分よろしくお慈悲を願ひます」
と、とめどもなく涙にひたつてゐる。

かかるところへ門口のあいたのを幸ひ、二人の男が慌ただしく入り來たり、
甲「オイ婆さま、お前の宅は別状ないかなア」

乙「實ア、婆さま一人、娘一人、バラモン軍の襲來で困つてゐるだらうから、助けに來たいと思つたが、なにぶん俺の女房まで取りさらへられて取返すことの出で來ないやうな場合で、残念だつた。どうぢや、花香さまは、御無事だつたかなア」

サンヨ「アアお前は、タクソン、エルソンのお二人さまか、ようマア親切に來て下さつた。残念ながら娘の花香はバラモン軍にかつさらはれました。オンオンオ

ン」
と村人の親切な言葉を聞いて恥も外聞も忘れて泣き倒れる。

タクソン「お婆さま、心配するな。キツと、バラモンの神様の御守護で、時節をまつてをれば、親子の對面をさして下さるだらう。私だつて女房を取られ、財産をボツたくられ、實に悲しい目に會うたけれど、日頃信仰のおかげで何事も神様に任せ、慰めてゐるのだ。ア—ア」
と吐息をつく。

サンヨ「私は娘を取られ、吾が身は雁字搦みにしばらく、劍の【むね】にて眉間を打たれ、蟲の息になつてゐたところを、この先生方が御親切にお尋ね下さつて、いろいろと介抱なし下さつたおかげで、甦つたのだよ。どうか、この方々にお禮を申して下さい」

タクソン「ヤ、あまりあわててゐるので、三人のお方に御挨拶も忘れてゐた。：

「コレハコレハお三人さま、誠に失禮をいたしました。そして貴師はバラモンの宣傳使でございますか」

梅公「イヤ、吾々はバラモンではない。齋苑の館の瑞の御靈大神の神勅を奉じ、天下を救済に廻つてゐる三五教の宣傳使だ」

タクソン、エルソンの二人は「ハツ」と驚き両手をついて、落涙しながら感謝の意を表してゐる。高原を吹きわたる名物の大風は窓の戸をガタつかせながら、ヒューヒューと怪しき聲を立てて北から南へ渡つて行く。

(大正一三・一二・一五 舊一一・一九 於祥雲閣 松村眞澄録)

第二章 祖先の恵み(一六八四)

デカタン高原の大暴風は岩石を飛ばし樹木を捻ぢ倒し、棟の低いこの家までもキクキクと梁を鳴らしてゐる。しかしながら老婆のサンヨは日課のごとく吹きく

る大風おほかぜに馴なれて少しも意いに介かいせず、前後ぜんご左右さいうに揺ゆれる家いへの中なかに平然へいぜんたるものであつた。照國てるくに別わけ、照公てるこう、梅公うめこう、タクソン、エルソンは車坐くるまざとなつて、バラモン軍ぐんの荒あらしたる跡あとの實況じつきやう談だんにつき問答もんたふを始はじめてゐた。

梅公うめこう「何なんとマア素敵すてきめつ滅法めつぱふ界かいに強烈きやうれつな風かぜが吹ふくぢやないか。お婆ばあさま、お前まへさまはこんな風かぜが吹ふいても平然へいぜんとしてゐるが、恐おそろしい事ことはないかい」

サンヨ「この風かぜはデカタン高原かうげんの名物めいぶつでございませう。年ねんに一度いちどや二度にどは家いへも空くう中に吹ふき上あげるやうな強風きやうふうが吹ふきます。それ故ゆゑ、いづれの家うちも地下室ちかしつを掘ほり避難ひなんすることになつてゐます。こんな風かぜはまだまだ宵よひの口くちです。それよりも恐おそろしいのはバラモンの風かぜでございませう」

梅公うめこう「フン、非常ひじやうな風かぜの荒あらい國くにだな。これがいはゆる風國ふうこく強塀きやうべいといふのだらう、アツハハハハ」

照公てるこう「バラモン風かぜといふのは、どんな風かぜが吹ふくのですかな」

サンヨ「ジフテリヤよりもインフルエンザよりもひどい風かぜでございませう。家いへを燒やき、財物ざいぶつを奪つばひ、人家じんかへ這入はいつて女房にやぼうや娘むすめの嫌きらひなく、みな何處どこかへ、攫さらつて行ゆ

く鬼風おにかぜでございますよ。何なによりも、かよりも、これくらゐ恐おそろしい風かぜはございませぬ〇

梅公うめこう「なるほど、弱味よわみにつけ込む風かぜの神かみといふ謎なぞだな。これこれタクソンさま、エルソンさま、バラモンの嵐あらしの跡あとの實況じつきやうを聞きかして下くださらないか。吾々われわれにも對抗たいかう策さくがあるからなア〇

タクソン「ハイ、お尋たづねなくとも逐ちくいちじやう一事情まをを申まし上げ、お助たすけを乞こひたいと思おもつてみたところでございます。私わたしの妻つまはミールと申まをしますが、まだ二十は才たちの花盛はなざかり、數日すうじつ以前いぜんにバラモン軍ぐんがこの里さとに駐屯ちゆうとんいたし、老若男女らうじやくなんにやを縛しばり上げ、一切いっさいの食料しよくれうや金銭きんせんなどを奪うばひ、私わたしの女房にようぼうなり、村中むらぢゆうの綺麗きれいな娘むすめと見みれば全部ぜんぶかつ攫さらへて参まゐりました。それのみならず、これから數里すうり隔へだてたオーラ山さんの山やまつづき、シノワ谷だにといふ所ところには馬賊ばぞくの團體だんたいが數千人すうせん割據かつきよして、時々遠近ときときゑんきんの村落そんらくに入り來きたり、金品きんぴんを徵發ちゆうはつし、女房娘にようぼうめの嫌きらひなく皆みなかつ攫さらへて参まゐりますので、われわれ人民じんみんは一日いちにちも枕まくらを高たかくして眠ねむることが出來でないののでございます。シノワ谷だにの馬賊ばぞくを退治たいぢして下くださるかと思おもへば、バラモン軍ぐんの大足別おほだるわけは馬賊ばぞくに勝まさる惡逆無道あくぎやくぶだう、吾々われわれバラモン信者しんじやは

最早生活の途もきれ、塗炭の苦しみを嘗め、不運に泣いてをります。どうか三五
教の御神徳によつて、この苦難を免れさして頂きたうございます」

梅公「先生、聞けば聞くほど氣の毒ぢやありませんか。現、幽、神の三界を救済
すべき吾々宣傳使として看過できないぢやありませんか。アア血は湧き腕は躍る。

いよいよ自分の活動舞臺が開かれたやうぢやございませんか」

照國「なるほど、お前のいふ通りだ。いよいよ眞劍に自分等の活動すべき舞臺を
與へられたのだな。しかしながら梅公、あまり事を輕率にやつては失敗するから、
ここは一切萬事を神様にお任せして、徐に神策を進めて行くのが萬全の策だらう

よ」

梅公「なるほど、ごもつとも千萬、水も漏らさぬ貴方のお考へ。しかしながらこ
の慘状を聞いては、あまり泰然自若と濟まし込んでるわけにも行かぬぢやありま
せぬか。オイ、タクソン君、君も掛替へのない一人の女房をバラモン軍に掠奪さ
れて、男らしくもない涙をこぼしてゐるよりも、どうだ、俺の家來となつて女房
奪回戦に参加する氣はないか。精神一到何事か成らざらむやだ。お前に信仰と熱

心と勇氣とさへあらば、キツとこの目的は達し得られるだらうよ』

タクソン『ハイ、有難うございます。しかしながら女房を取られたといつて男の目から涙を流してゐるのぢやありませんか。天下萬民のため涙を濺いでゐるのです』
『ハハハハハ、ヤア大きく出よつたな。さうなくては男子はかなはぬ、見上げた男だ、いよいよ氣に入つた。梅公別の弟子にしてやるから、吾輩のいふ事を忠實に守るのだよ』

『イヤ、有難うございます。しかしながら私は先生の家來にして頂きたいのです。あなたには先生があるでせう』

梅公『先生はあまり御神徳も高く智慧證覺の程度も、お前とは非常に距離があるから、直々のお弟子には勿體ない。罰が當るぞ。それより身魂相應の理によつて俺の弟子にしてやる。神は順序だからな。順序を離れて神もなく道もない。なア先生、暫く私の直接の弟子にしても宜いでせう』
照國『信仰は自由だ。とも角タクソンさまの意志に任すがよからう。相應の理によつてなア』

照公てるこう「ハハハハ、オイ梅さまうめ、どうですか、先生のお目せんせいから見れば君とタクソン君とは甲乙かふおつの區別くべつがつかないやうだよ。バラモン教けうでよほど魂みたまが研みがいてあると見えて、どこもなしに面貌めんぼうに光ひかりが輝かがやいてあるやうだ。さすが先生せんせいは偉えらいわい」

梅公うめこう「そんなら、タクソン君くん、君の意志いしに任まかす。オイ、エルソン君くん、君は相應さうおうの理りによつて僕ぼくの弟子でしにしてやる。満足まんぞくだらうなア」

エルソン「ハイ、御親切ごしんせつに有難ありがたうございます。しかしながら私は年としは若わかうても、神様かみさまのお道みちはいささか、學まなんでをります。たとへバラモン教けうでも誠まことの教をしへには二つはございますまい。私はタクソンと竹馬ちくばの友ともでございますから、行動かうどうを共にともする考かんがへです。何卒どうぞあなたは教をしへの道みちの兄弟きやうだいとなつて下くださいな」

梅公うめこう「ハハハハハ、偉えらい馬力ばりきだな」

照公てるこう「また梅公うめこう、凹へこまされたのか、それだから「吾われほどのものなきやうに思おもうて偉えらさうに申まをしてをると、スカタン喰くふぞよ」と御神諭ごしんゆにお示しめしになつてゐるのだ。梅うめえ事考ことかんがへてをつても、さう梅うめえ事ことには問屋とひやが卸おろさないよ。マアこのたびは御兩ごりやう人の兄弟分きやうだいぶんとなつて仲良なかよく神業しんげふに奉仕ほうしするがよからう。俺等おれたちは少すこしも乾兒こぶんは欲ほし

くない。兄弟分が欲しいのだ」

梅公「親分、乾兒の關係ならば、マサカの時には命令が行はれ秩序整然と、物事の埒があきよいが、兄弟といふものは水臭いものだよ。「兄弟は他人の初まり」といふからな」

照公「馬鹿いふな。「兄弟は他人が初まり」といふのだ。他人同士が寄つて兄弟の約束を結ぶのだ。それで特に義兄弟といふのだ。四海兄弟も、ここから始まるのだ。兄弟力を合せて弱小な團體も遂には強大となるのだ。アア強大なるかな強大なるかな。兄弟（「鏡臺」）はいはゆる鏡の臺だ。たがひに勇み交して短所を補ひ長所を採り、惡を去り善をとり、神業に奉仕するのが所謂四海兄弟、天下同胞の義務だよ」

梅公「イヤ、重々の御説法、豁然として白蓮華の咲き香ふがごとく、胸中の新天地が開けたやうだ。そんならこれから吾々四人は親友兼兄弟となつて、世界の善惡正邪を明らかに裁くところの鑑とならうぢやないか。國公は親子對面の嬉しさにアーメニヤに歸つてしまひ、三人の兄弟が二人になつて、やや寂寥の氣分にう

たれてゐたところだ。ここに天より二人の補充兄弟を與へられ、いよいよ四魂揃うて轡を竝べてハルナの都へ進軍と出掛けようかい」

婆さまは勝手覺へし家の中、眞黒氣に熏つた土瓶に白湯を沸かし、天然竹を切つたそのままの竹製の茶碗に湯をなみなみと注いで一行に響應し、裏の瀬戸口に枝もたわわに實つてゐた棗の實をむしり來たり、

折角おこし下さいまして、何のお愛想もございませぬ。これはこの里にて有名な棗でございしますが、この間バラモン軍がやつてきて大方筆りとりましたが、わづか残つてゐるのを、さらへて持つて參りました。何卒お食り下さいませ」

照國別一行は、

「美事な大きな棗だ。頂戴しませう」

と各自に舌鼓を打つて食ひはじめた。

梅公「何と、うまい果物だな。種は小さく實は大きく、まるつきり林檎を喰つてるやうだ。婆さま、この村にはこの棗は澤山あるだらうなア」

サンヨ「ハイ、この村の名物でございしますが、今年はやほど不作でございました。

しかしながら二人や三人の年中の食料は、どうなりかうなり続けるでございませう」

梅公「天然の恩恵だな。肥料もやらず世話もせず、神様から實らして下さる實を勝手に食はして貰つていいのか。それでは、あまり冥加がよくないだらう。人間が遊惰になるのも無理がないわい」

サンヨ「この棗はコーラン國から取り寄せたものでございまして、この村にも餘り澤山はございませぬ。さうして日々蟲取りに骨を折らねば、一日油断すればその蟲が繁殖して葉を一枚も残らず噛んでしまひます。葉が無くなれば木が枯れるのです。なかなか油断はできませぬよ。なかなか生活は樂ぢやありません」

梅公「さうかな、ヤツパリ天然に生える果物でも世話が要るものかいな。その代り肥料は要らないだらう。この邊は地が肥えてゐるから」

サンヨ「この棗を頂く家は祖先の恩恵によるのです。さうですから、あまり何處にも、澤山はありませぬ」

梅公「祖先の恩恵といふが、その祖先といふのは神様を指していふのか、或は此

の家の祖先をいふのか。世の中の人間はいづれも神祖、人祖の恩恵を受けないものはない筈だ。この棗に限つて先祖の恩恵とは、チツと受け取れぬぢやないか」

サンヨ「この棗を植ゑる時には犠牲が要ります。私の大祖先は子孫を愛するため

に自分の腹を切り、その血潮に根を染め、肉體は木の根に葬らせ、祖先の靈肉とも

にこの棗の肥料となり、萬古末代子孫安樂のために守つて下さるのです。それ

故、この棗は生命と申しまして、あまり澤山はございませぬ。今お食りに成つた

でせうが、この棗は酸ぱくて甘いでせう。これは人間の血液や肉の味でございま

す。吾々は祖先の血を啜り、肉を食べて安全に暮してゐるのですから、いはば、

あの棗は先祖の肉體も同様でございます」

梅公「何と先祖の恩といふものは尊いものだな。吾々の祖先も國を肇め徳を樹て、

道を開き、子孫を安住させむため苦勞をして下さつたのだ。三五の教も實のここ

ろは祖先崇拜だ。人類愛の神教だ。ああ惟神靈幸倍坐世」

と、さすが洒脱な梅公も思はず知らず感涙に咽んでゐる。

照國別てるくにわけ 遠津御祖神とほつみおやかみの恵みめぐみは雨あめとなり

土つちとなりてぞ子孫みこをば救すくふ

親々おやおやの恵みめぐみの露つゆに生いきながら

親おやを忘わする邪神まががみもあり

親おやの恩おん忘れし時ときは身みも魂たまも

亡ほろびに向むかふはじめなりけり

サンヨはるなつ 春夏わかの別わかちなくしてこの棗なつめ

實みのるも祖先おやの恵みめぐみなりけり

親々おやおやの恵みめぐみ忘れし酬むくいにや

今日けふの歎なげきの身みにふりかかる

今いまよりは心こころの柱はしら樹たて直なほし

祖先みおやの祭まつり厚あつく仕つかへむ

梅公うめこう 村肝むらきもの心こころ一度いちどに開ひらけゆく

白梅しろうめの花はな咲さき初そめてより

梅林うめりん檜ひ棗なつめの味あじも皆みな同おなじ

主スの大神おほかみの恵めぐみなりせば」

照公てるこう 此この家いへの祖おや先の恵めぐみを居ゐながらに

受うけし吾われ等はら神かみの賜たま物もの

親おや々の踏ふみてし道みちを辿たどりつつ

世よの犠いけ牲にへにならむとぞ思おもふ」

タクソン 吾わが家やにも祖おや先の恵めぐみの棗なつめあり

いざこれよりは詫わび言ことやせむ

御恵みを忘れ果てたる酬いにや
吾が戀妻は攫はれにけり」

エルソン「吾が戀ふる妹は枉靈に奪はれて

袖の涙の乾く間もなし

如何にして姫の所在を探らむと

ただ思ふより外なかりけり」

タクソン「御一同様に申し上げたうございますが、このタライの村の里庄ジャンク様の娘、スガコ姫は絶世の美人でございますが、バラモンの軍隊が出てくる數日以前に、何者にか搔つ攫はれ、今まで行衛が分りませぬので、ジャンク一家の歎きは一通りぢやございませぬ。私もジャンク様の家の子として、先祖代々仕へてゐますが、家の寶をとられ、嬢様の行衛を探す暇もなく、女房の行衛について

頭あたまを惱なやめてゐます。どうぞ貴方あなたのお伴ともとなつて、嬢様ぢやうさまや女房にようぼうの行衛ゆくゑを探さがしたうござ

ざいますが、どうか、お伴ともにお加くはへ下くださいませまいか」

照國てるくに「委細承知あさいしやうちしました。御心底ごしんていお察さつし申まをします。何事なにことも神かみにお任せまかなさいませ」

タクソン「ハイ、有難ありがたうございます。これで私わたしも甦よみがへつたやうな心持こころもちがいたしま

す」

エルソン「先生せんせい、私わたしも願ねがひいたします。何卒どうぞお伴ともにお引連ひきつれを、強たつてお許ゆるし

下くださいませ。私わたしは獨身者どくしんものでございますから、家いえに系累けいるゑもなく宣傳使せんでんしのお伴ともには最さい

適任者てきにんしやと存ぞんじます」

照國てるくに「よしよし、お前まへも一いっしよ緒じゆに来くるがよからう」

梅公うめこう「オイ、エルソン君くん、君きみは何なんだか心こころに祕密ひみつを抱いだいてゐるやうだな」

エルソン「ハイ、私わたしも相思さうしの女をんながございました。その女をんなの行衛ゆくゑを尋たづね、このお婆ばあ

さまに會あはして上あげねばなりません」

梅公うめこう「ハハハハハ、さうすると當家たうけの妹娘いもうとむすめと以心傳心いしんでんしんとか、相思さうしとか、の經緯いきさつが

あるのだな。これ、お婆ばあさま、あなたはこのエルソンに娘むすめを與やらうと言いつたので

すか。さい前、私に娘の身の上を依頼すると仰有つたでせう」

サンヨ「ホホホホ油断のならぬのは娘でございます。何時の間にかこのエルソンさまと親に秘密で約束をしたのかも知れませぬ。宅の娘は年をとつても子供だ子供だと思つてみました。油断のならぬのは娘でございます。これこれエルソンさま、お前は娘の花香と何か約束でもなさつたのかい」

エルソン「ハイ……イーエ……エー……まだ豫定でございます」

「お前さまの方で定めてゐるのだから。娘の花香はお前さまから一回の交渉も受けてゐないのだからなア」

「花香さまに對し、どうせう、こうせう（交渉）と胸を痛めてゐる最中、お行衛が分らなくなつたので、私も憤慨の極に達し、おのれバラモン軍、吾が愛人の仇だ、たとへ天をかけり地をくぐる妙術彼にありとも、戀愛至上の眞心は金鐵も熔かす勢ひ、あくまでも花香様を奪ひかへし、私の赤心を買つてもらふ考へでございます。どうかお婆さま、私が花香さまを無事に連れて歸りましたら、その御褒美として當家の養子にして下さるでせうな」

サンヨ 『ホホホホ何とマア抜目のない男だこと、仲々お前さまも隅には置けませぬわい』

梅公 『ハハハハ八八八それで一切事情が判然して来た。世の中には變則的戀愛に熱中する連中もあるものだな。オイ、エルソン君、それだけの熱心があればキツと成功するよ。實のところは俺がお婆さまの委託を受け、舐つて喰はうと焚いて喰はうと自由自在との事だつたが、それだけお前に執着心があるのを聞くと、何だか俺も君の心理状態が憐れになつてきた。僕は花香姫に對する一切の權利を君に譲渡するよ。なアお婆さま、それで宜いでせう。いはば生死不明の美人を托されたのだから、お婆さまだとてエルソンさまの女房にするのに不足はありますまい』

サンヨ 『エルソンさまも村中の褒めものなり、模範青年と言はれてゐるから、キツと娘も喜ぶでせう。この事については私は何も申しませぬ、梅公さまにお任せいたします』

梅公 『比較的開けたお婆さまだ、いや感心々々。これお婆さま、これから三五の神様の教も聞きなさい。しかしバラモンの神様を捨てよとは言はないからなア』

サンヨ「ハイ有難うございます。貴方がたの吾が家においで下さつたのをいい機會として、今日から信仰に入れていただきませう」

タクソン「もし宣傳使様、どうかお邪魔でもございませうが、一度私の主人と會ふため、里庄の宅へお立寄り下されますまいか。里庄はキツと喜ぶでございませうから」

照國「里庄の宅もさぞ御心配してござるだらう。とも角お尋ねすることにしよう。さア一同出立の用意をなされ……、イヤお婆さま、永らくお邪魔をいたしました。

もう大丈夫ですから御安心なさいませ」

と言葉を残し、里庄の宅に向かつて宣傳歌を歌ひながら進み行く。老婆サンヨは杖にすがりながら門の外まで見送り、名残惜しげに一行の姿の見えぬまで見送つてゐた。ああ惟神靈幸倍坐世。

(大正一三・一二・一五 舊一一・一九 於祥雲閣 北村隆光録)

第三章 酒浮氣（一六八五）

タライの村の里庄ジャンクの家うちの表門おもてもんには、甲乙二人かふおつふたりの門番もんばんが胡坐あぐらをかいて雑ざつ談だんに耽ふけつてゐた。

甲かふ「オイ、バンコ、どうも此このごろぐらゐ怪體けたいな時候じこうはないぢやないか。朝あさも早はやくから日の丸まる様がカンカンとお照てりなさるかと思おもへば、直すぐさま西にしの方ほうから黒雲くろくもがやつて来て日の丸まるを呑のんでしまひ、お月つき様が照てるかと思おもへば、雲くもに呑のまれ、この暑あつい國くにも底冷そこつめたい風かぜが吹ふき、何なんとはなしに惡魔あくまに襲おそはれさうな氣分きぶんで、酒さけでも飲のまなければやりきれぬぢやないか」

バンコ「オイ、アンコ、それは何なにをいふのだ。酒さけどころかい、大事だいじな大事だいじな一人ひとり娘すめのお姫様ひめさまはお行衛ゆくゑが分わからず、ジャンクの旦那様だんなさまが日々にちにち青息吐息あをいきといきで、大自在天だいじざいてん様に火物ひもの斷たちをし艱難苦勞かんなんくろうをしてござるのに、その家いえの子この吾々われわれが安閑あんかんと酒さけを呑のむやうな不始末ふしまつができやうか。姫様ひめさまがお歸かへりになつたら三日みっかなりと五日いつかなりとお祝いはひの酒さけをいたただかうとままだ。旦那様だんなさまが火物ひもの斷たちをしてござるのに、吾々われわれは結構けつこう

なお扶持をいただき安閑と門番をさして頂いてゐるのぢやないか。勿體ない、冥加に盡きるぞよ」

アンコ「それだつて人間はさう悲觀ばかりするものぢやない。天地の道理を考へて見よ、黒雲は日月を呑み、大蛇は人を呑み、蛇は蛙を呑み、大魚は小魚を呑み、暴君は人の國家を呑み、英雄は天下を呑み、女房は夫を呑み、大工の寶は槌と鑿、人間は酒を呑み、茶を呑み、水を呑み、藝者は人の家倉を呑み、おまけに床の下から這い上つて來て吾々を遠慮會釋もなく噛んで血を啜る奴は蚤だ。それだから門番「のみ」に心力を費やし謹慎謹慎と謹慎「のみ」に日を送つてゐるやうなことで、どうして人間様の生命が保たれやうか。人間は生活するために生きてゐるのぢやないか」

「馬鹿いふな、今の人間に生活なんてあるものか。生活と言ふやつは生々として社會に最善的活動をなし、神の御子として世のため、人のため愛善の徳に住し、信眞の光に浴して、善美なる生涯を送るものを稱して生活者といふのだ。どいつも、こいつも生活難がどうだの、生命がどうだのと學者ぶつて吐いてゐるが、生

命がどこにあるか。何奴も此奴も、機械人形のやうに、ウヨウヨと蠢動して暗黒界に墮落し、蟲の息で半死半生の境遇にありながら、新生命だとか何とか言つてゐるのが、をかしいわい。生活難ではなくて生存難のことを言ふのだらう」

「生存難に打ち勝ち半死半生の境涯を脱却しやうとして吾々は活動をしてゐるのだ、それだから生活といふのだ。今日の種々の主義者を見よ、彼奴だつて………：………、左に傾いているのぢやないか。左に傾くのは酒に限る。それだから左傾（酒）黨といふのぢや、アア酒なるかな、酒は百薬の長だ。萬民愛護の神様だ、平和の曙光だ」

「オイオイ アンコ、さう脱線しては困るぢやないか、酒と左傾黨とを混同してゐるぢやないか」

「定つたことだ。酒に酔うた上に管を巻き、終ひの果には氣に入らない嬢の横面をはり倒し、家から追出して新規播直しに愛善の徳に富み、信眞の光に満ちた女神様を入れるのが酒の徳だよ。これを稱して萬民愛の世界改革酒斷（手段）といふのだ。左傾黨だつて同じやうなものだ。古い社會を立替へて新しい平和の社會

を立直さうとするのだから、いづれ一度は酒の酔と同様に、落花狼藉亂離骨敗、矛盾混沌の暗黒界を來たさないと制限らない。破壊のための破壊でなく、建設のための破壊だよ。さあさうだから僕はたとへ主人がどうあらうとも、僕は僕として酒に信賴するのだ

「それやさうかも知れぬが、避けうる限り酒は避けたいものだなア」

「山はさけ海はあせなむ世ありとも」

酒に心は離れざりけり

といふ古歌があるだらう。さうだから僕は酒を止めることは出来ないのだ。何奴も此奴もな「さけ」ない顔をして忠義面を振り廻し、世の潮流に漂ひ、時代の風に吹きまくられて戦慄してゐるのだからなア、困つたものだよ。酒の反対は浮いだ、「酒を呑め呑め呑んだら浮けよ」といふぢやないか。なにほど浮け浮け浮いて浮世を暮せと言つたつて瓢箪ぢやあるまいし、酒も呑まずに浮けるものか。左

傾即右傾（酒即浮け）なりといふ這般の眞理を知らない唐變木は、現代の世に處
することは出来やせないぞ」

「オイそんな大きな聲で左傾左傾といふものぢやないわ。このごろはバラモンの
スパイが晝夜の區別なく往來してゐるぞ、すこし危険の言語は避けたら好からう
ぞ。大黒主から御發布になつた法律をお前は何と心得てゐるか」

「法律といふものは、正邪善惡を蹂躪して立つ、暴君の專政を謳歌する唯一に機
關に過ぎないのだ。強者は益々強く弱者はますます弱く、惡徳の蔓延する惡魔の
機關だ。今日の法學者だつて奸吏だつてみんな善の假面を被り、あくまでも惡を
遂行しやうとしてゐるのぢやないか。それだから暗黒無明の世界だといふのだよ。
現代の悲境を救ふには酒でも呑んで浩然の氣を養ひ、恍惚としてその心魂は天
國の樂園に遊ぶためだ。世の中にこれに増したる救世主があらうか。アア酒なる
かな酒なるかな。僕はあくまで酒黨だ。酒黨は即ち浮け黨。どうだ、僕の教説が、
【うけ】取れたかな」

「右確かに【うけ】とり不申候だ、アハハハハ。しかし貴様は臭いぢやないか」

「馬鹿いふな、俺は二十八才だ、壯年の花盛りだよ。正に男子として美の頂點に達したところだ。スガコ姫さまだつて俺にはチヨイ惚れだつたのだからなア。俺もスガコさまのお顔をチヨイチヨイ拜むのが楽しみに、こんな卑しい門番になつたのだ。蛟龍池中に潛むとも、何時までか池中のものならむや。一朝風雲を得れば天地に蟠つて日月を吞吐する底の神力を有する怪男兒だよ」

「ハハハハハ、デカタン風のやうに、好くも吹いたものだなア。スガコ姫様に愛してもらはうと思へば門番ぢや氣が利かねえ。なぜ貴様のいふ通り天地に蟠つて風雲を捲き起し、男の中の男と謳はれないのだ。天下一の人氣男となつて見たまへ。スガコ姫以上の美人が煩さいほど貴様の周圍に集まつて來るやうになるわ。こんな門番ぐらゐやつてゐてスガコ姫様に對し、戀ぢやの愛ぢやの吐すのは片腹痛いわ、アハハハハ。御主人の心も知らず、懷の中に朝から晩まで酒器を隠しやがつて、人の目を盗んでチヨイチヨイと引っかけかけてゐるといふケチな根性だから、いつまでも頭が上らないのだ、ハハハハハ」

「これやバンコ、俺の金で俺が呑むのに何が悪い。貴様は俺の先輩ぢや上役だと

いつも威張りよるが、そんな事で人が使へるか。コセコセと何だい。部下の行動をゴテゴテいふやうなことでどうして世が治まるか。吾々は壓迫すりやするほど頭をもたげるのだ。反抗と抗議と革命は吾輩の生命だ。チエー貴様もいまのうちに目が覺めないとアニコ主義者の暴動が起り貴様の地位を轉覆し、アニコ末代浮かべぬようになるかも知れないぞ、エーン。懷中に呑んでみたこの酒徳利を貴様に看破された以上、もはや何の躊躇が要るものか。焼糞だ、やけ酒だ、言論では追付かない。示威行動だ」

と言ひながら鬼の蕨を固めてアニコの頭を首も飛べよと擲りつけた。アニコは「アツ」と叫んでその場に倒れた。

かかるどころへジャンクの家の下僕セールは慌ただしく走り來たり、
「オイ、何だ何だ、妙な悲鳴が聞こえたぢやないか」
アニコ「アハハハハ、アニコさまが國家安固のために、アニコ平和の基礎を作るため、日頃の主義主張（酒義酒張）の實行と出かけたのだ。てもさても脆いものぢやわい、イヒヒヒヒ」

セール「オイ、アンコ、そんな氣樂な事を言つてゐる所かい。バンコが人事不省に陥つてゐるぢやないか」

「アハハハ人事不省に陥るのも天の然らしむるところじゃ。此奴は自分の事ばかり考へて人事を省みないから人事不省に陥つたのだ。そのくせ人の頭に上つて不正の事ばかりやりやがつて、唯一の吾々の娛樂にしてゐる酒をどうだの、かうだのと頭から壓迫しやがるものだから、酒の靈が聯盟して茲に直接行動となつたのだ、アハハハ」

「チエツ、酒呑みと言ふものは仕方のないものぢやなア。どうれ介抱してやらねばなるまい」

とセールは清らかな湯水を汲み來たり、頭部面部の嫌ひなく伊吹の狭霧を吹きかけ、「バラモン自在天救ひたまへ助けたまへ」と流汗淋漓として祈願をこめた。

半時ばかりたつとバンコは息吹きかえし、セールに手を引かれ、ヒヨロリヒヨロリと吾が居間を指して導かれ行く。

後見送つてアンコは怪しき笑ひをうかべ、

「チヨツ、エエ反古の紙撚で造つた羅漢のやうな面曝しやがつて、酒がどうのうのと何だい。またセールもセールだ。闇で蛙を踏み潰したやうな聲を出しやがつて、吾輩に意見がましいことを吐きやがつた。へん何奴も此奴も古い頭だな。しかし俺も、ちつとは好くないかも知れぬ。あまり直接行動が早すぎたからなア。しかし當家の旦那様もさういふもののお氣の毒だ。一人よりないお嬢さまは悪漢に夜の間に奪はれ今にお行衛が分らず、そこへ向けてバラモン軍の大將大足別奴、澤山の部下を引きつれ闖入し來たり、金銀珠玉を奪ひ取り歸つた後だから、旦那様も御心配なさるのも御無理はあるまい。アア思へば思へばお氣の毒様だ」

と獨り語ちつつ又もや懷から酒徳利を出し、額をピシヤピシヤと右の手で叩きながら、左の手で徳利の口を自分の口へ運んでゐる。

そこへ慌ただしく門を潛つて入り來たる一人の男があつた。アニコは目敏くこれを見て、

「オイオイオイ、どこへ行くのだ。ここに門番がござるぞ。この關所を越えるのにや吾輩の許可を受けねばなるまい。一體貴様の名は何といふか」

男「ハイ私は隣村の百姓でインカと申します。ジャンクの旦那様に御報告のため取急ぎ参りました。何卒お通し下さいませ」

アンコ「ハハハハハ。お前の名はインカといふのか。そんなら門の通過を允可してやらんでもないが、貴様は右傾黨か左傾黨か、どちらだ。左傾黨ならこの酒を飲下して進むのだな」

インカ「イヤ有難う、私は酒の話を聞くとどんな大切な用でも忘れてしまふのです。どうか歸りに呑まして下さい」

アンコ「ナランナラン、人の志を無にすると言ふことがあるか。まづ一ぱいグツと飲下して而して後に君の使命をジャンクの主に報告すれば可いのだ。さうクシヤクシヤと世の中を狭く小さく暮すものぢやないよ。まア一口やりたまへ」
とインカの口許へ突きつける。インカは目を細うしてガブガブと音を立て嬉しげに呑み干した。

アンコ「オイ、コラコラ貴様が皆呑んでしまつたぢやないか。俺をどうしてくれるのだ」

インカ「誠にすみませぬ、あまり美味しい酒で口を離さうと思つたのですが、副守の奴、空になるまで離してくれなかつたのです。どうぞ過ぎ去つたことは大目に見て下さいな」

「よし、それぢや俺のいふ事を聞いてくれるか、聞いてくれりや了簡する」

「どんな事でございますか、ともかく聞かしていただきませう」

「俺の名はアンコだ。しかしながら俺の地位はあまり安固でない。今バンコに對して蠻行をやつたものだから、どうやら首が飛びさうだ。だから此所をスタコラヨイヤサと三十六計の奥の手を出さうとしてみたところだが、ここを出されちや居所に困る。浮浪罪で捕まつては大變だから、暫くお前の家に養つてもらひたいものだなア」

「何の事かと思へばそんな御用ですか。ヘイよろしい、私もコマの村の侠客ぢや。男が頼まれちや後には引かせぬ、安心なさい。きつと引受けますよ」

「やア有難い、それでちよつと安心した。しかし君、慌ただしうやつて來たのは何の用だ。ちよつと端緒だけでもよいが、僕に内報してくれまいか」

「や、實のところは自分の村に大變な騒動が起つたのだ。里庄の倅サンダーさまが當家のお嬢様スガコ様にゾツコン、ラブしてござつたところ、お前も知つての通りスガコさまが行衛不明になつたのだ。サンダーさまが失望落膽のため發狂したと見え、この間から行衛が分らぬのだ。それがために村中は山といはず谷といはず廣い野原まで、返せ戻せと鉦や太鼓で探して見たのだが、今に行衛が分らぬので許嫁のある當家へ無音信つてゐる譯にはゆかないので、里庄に頼まれ使ひに來たのだ。自分も澤山の乾兒を使つて晝夜兼行で探してゐるのだが今にわからぬのだよ。實に氣の毒なことが出來たものだ。そのみならず、バラモン軍が通過の際村中の婦女を誘拐し、村民は大變に困つてゐる、何とかして一時も早く所在を探さねば、このインカだつて男の顔が立たないんだ」

「アーさうか、それや氣の毒だ。俺もお前の兄弟分となつて、一つ搜索隊の御用でも努めようかなア、アハハハハ」

インカ「ヤア、とも角も奥へ往つて報告を濟まして來るから、また後でゆつくり話さうか」

と言ひながら足早にジャンクの館をさしてかけり行く。

かかるところへ宣傳歌を歌ひながら、やつて来たのは照國別の一行五人であつ

た。アンコが嚴重に鎖した門の外に宣傳使一行は立ちながら、

照國「お頼み申す、お頼み申す」

アンコ「ナナ何だ、バラモン教の宣傳使はお斷わりだ。宣傳使なんかには用はない。

トツトと歸つて下さい。當家は心配事ができて上を下へと大騒動だ。そんな氣樂

さうな歌を歌つて来る乞食の潜る門ぢやない。トツトと歸んでもらひませうかい」

梅公「主の神は此家の嘆きを救はむがために、教の御子を遣はし門外に立たせ給

へども、奸惡なる世はこの御使を迎へ入れ救はるる事を知らず、實に憐れむべき

の至りだ」

と大聲に叱呼した。

タクソン「オイ門番、アンコにバンコ、俺は主人にお氣に入りのタクソンさまだ

ぞ。お屋敷の難儀を救ふべく三五教の活神様をお迎へ申して来たのだ。何をグツ

グツしてゐるか。サア早く開けたり、開けたり」

アンコ「エイ、かかぬす 嬖盗め 生まれのタクソン奴、えら 偉さうに吐ぬか しゃがる。仕方しかた がない、開あ けてやらう」

とつぶやきながら、かんぬき 門を外は し、もん パツと門を開ひら いた。

タクソン「ヤア御苦勞ごくらう、いつも元氣げんき な顔かほ をしてゐるなア、けっこうけっこう 結構々々」
といひながら照國てらくにわけ 別一行いつかう を案内あんない し邸内ていない 深く進すす み入い る。

(大正一三・一二・一五 舊一一・一九 於祥雲閣 加藤明子録)

第四章 里庄りしやうの惱なやみ (一六八六)

タライの村むらの里庄りしやうジャンクは重かさなる悲運ひうんに悄然せうぜんとして奥おくの間に火物ひもの断だちをなし、
顔色がんしよくあを青ざめ、ほとんど此世このよの人ひととは見みえぬまでにやつれながら、二絃にげん琴きんを弾だんじて
心こころの煩悶はんもん苦惱くなうを慰なぐさめてゐた。

久方の空すみ渡り日月の光は清く萬有を

照らし玉へど醜神のその勢ひの猛くして

眞澄の空も瞬間に墨を流せし常暗の

淋しき世とはなりにけり地には百草繁茂して

紫紅赤白の目出たき花は遠近と

所狭きまで咲き匂ふさながら花の莖をば

布きし如くに見ゆれども天に叢雲花に嵐

静かな波も風吹かば海の底ひも白波の

立髪ふるひ大津邊の岸に噛みつく世の習ひ

天國淨土と頼みてしタライの村の吾が家も

世の變遷にもれずして柱と頼む吾が妻は

十年の前に病氣の身を横たへて幽界に

果敢なき旅をなせしより忘れがたみの一人娘を

家の杖とし力とし這へば立て立てば歩めと朝宵に

心を配り育くみて 漸く二九の春迎へ
 ヤレ嬉しやと思ふ間も なくなく醜の荒風に
 吹きまぐられて情なくも 後に残りし吾獨り
 天に歎き地に哭し 呼べど叫べど行方さへ
 空白雲の當もなく 無限の涙干もやらず
 憂きに苦しむ吾が不運 憐れみ玉へ自在天
 大國彦の御前に ひとへに願ひ奉る
 この家の柱と頼みてし スガコの姫は今いづこ
 雨の夕べや霜の朝 心痛むる足乳根の
 父の心を思ひ出て 胸に萬斛の涙をば
 湛へて苦しみるならむ さは去りながら吾が娘
 如何なる曲に捉はれて 苦しみ悩みあるととも
 神の賜ひし玉の緒の 命の此世に在る限り
 日頃頼みし家の子を 四方に遣はし所在をば

尋ね出だして老の身の

涙にぬれし衣手を

天津御空の日のかげに

乾かし喜ぶ事もあらむ

それを一途の望みとし

老の命を永らへて

味なき月日を送るなり

憐れみたまへ自在天

たとへ天地は失すると

忘れ難きは恩愛の

吾が子を思ふ赤心に

まさりしものはあらざらむ

アアなつかしやなつかしや

夢になりともスガコ姫

戀しき父よと一言の

言あげせよや惟神

神の恵みの深ければ

又も逢瀬の川波の

會うて流るる愛の海

救世の舟に救はれて

父の館へイソイソと

歸り來ませよ吾は汝の

身魂の幸を祈りつつ

朝な夕なに歎くなり

ああ惟神々々

神靈の恩頼を願ぎまつる

かかる折りしも玄關番に導かれて隣村の侠客インカが、隔ての襖を押しあけて、寧に辭儀をしながら、

「エー旦那様、御免下さいませ」

この聲にジャンクは琴の手を止めて、涙をかくしながら、

「ヨー、ア、其方は、音に名高き隣村の侠客インカ親分であつたか、ヨウ、マア来て下さつた。そして御用の筋はどんな事かなア、早く聞かしてもらひたい」

インカ「ハイ、お嬢様のお行方を探し求め、一日も早く旦那様に喜んで頂かうと思ひ、五十人の手下を遠近四方に聞くばり、大搜索をいたしました。今にお所在は分らず面目次第はござりませぬ。あなたの御心中はこのインカお察し申しませぬ」

ジャンク「ア、それはお心を煩はし、誠に申譯がありません。いづれ貴方の御威光と御親切によつて、娘のスガコはやがて歸るでございませう。何卒々々よろしう願ひます」

「ハイ、承知いたしました。面目次第もございませぬが、瘦せてもこけても、遠

近に名を賣つた侠客の私、力のかぎり活動をいたし、お心に副ふやう努めるでございませう。しかしかかるお歎きの央へ、又もや御心配の事を申上げるのは私の身に取つて、實に心苦しい次第でございますが、お嬢さまの許嫁のサンダー様は、日夜快々として樂します、遂にはお行方が分らなくなり、お父上マルク様より私に搜索方を依頼され、これも又二三日前から骨を折つて探してゐますが、どうもお行方が分りませぬので、私の顔も臺なしでございます」

「なに、マルクさまの御息が、行方不明とな。左様な事が……出来てゐるのなら、これほど昵懇な間柄、なぜに直ぐに知らしに來て下さらなかつたのだらう。サテ不思議な事だなア」

「實のところは、マルクの旦那様も直ぐさま御通知遊ばすはずでございましたが、旦那様が嬢様の事について御心配の最中へ、こんな話を申上げたら、さぞお力おとしをなさるだらうと思召され、ソツと人知れず搜索を始められ、御息のサンダー様がお歸りになりさへすれば、それで貴方様に御心配をかけるに及ばないと、今まで包んでゐられましたのでございますが、どうしても行方が分らぬとすれば、

當家の御養子と定まつたサンダーさまの事でございますから、旦那様に報告せずにはをられないので、今日は私に「ちよつと、お使いに行つて来てくれぬか」とのお頼み、罷り出でました次第でございます」

ジャンク「何と、憂が重なれば重なるものだなア。吾が娘の紛失といひ、許嫁の養子サンダーの行方不明といひ、アア天道は是か非か。かくまで歎きの打ち重なるものだらうか、如何なる宿世の罪業かは知らねども、これは又あんまり慘酷だ、アア」

と吐息をつき差俯むき、熱い涙をポロリポロリとおとしてゐる。

インカ「お歎きは御無理もございませぬが、歎いて事のすむものでもございませぬ。まづ心を落ちつけなさいませ。きつと神様がお助け下さるでせう」

「ヤ、有難う、悔やんでかへらぬことを、又しても年老りの愚癡、つい涙がこぼれるのだ、アハハハハハ。これもしインカさま、サンダーはバラモン軍に捉はれたのではありますまいか」

「神ならぬ身の吾々、どうとも申上げかねますが、サンダー様は何時も女装をし

てゐられますから、大足別の軍勢が女と過つてつれ歸つたのかも知れませぬ。私も一身を賭して、バラモンの陣中に駆け込み、實否を查べむかと存じますけれど、何をいうても目に餘る大軍、血に飢ゑたる虎狼どもの群、可惜犬死にを致すよりも……と存じ、卑怯かは知りませぬが、何とかして安全にお救ひ申したいと苦心慘澹の最中でございます。義を見ては命を惜しまぬ侠客なれど、目的も達せずには犬死にするは、男子の意氣でもございますまい。湧きかへる胸を抑へて、時を待つてをるような次第でございます。しかし邪は正に勝つものぢやございませぬ。きつとお嬢様もサンダー様も無事にお歸りなさるでせう。心丈夫にお待ちなさいませ」

「ハイ、弱肉強食の暗の世の中、誰にたよる術もなき腑甲斐なき里庄の身、ただ貴方様を唯一の助け神として、細き息の根をつないでをります。何分よろしく願ひます」

かく話すところへ舊臣のタクソンは慌ただしく入り來たり、頭を疊にすりつけながら、

「旦那様、御愁傷のほどお察し申し上げます。まだ嬢様のお行方は何の便りもございませぬか」

ジャンク「ア、其方はタクソンか、よう来て下さった。娘の行方について、今インカ親分と相談をしてみたところだ。お前も大切な女房を取られ、さぞ心配してゐるだらう」

タクソン「旦那様、勿體ないそのお言葉。私の女房なんか、物の數でもございませぬが、大切な、ただお一人の嬢様を、お捕られ遊ばした旦那様のお心、立つても居てもゐられないでございませう。早速お見舞に参り、嬢様の御在所を探し出さねば濟まないののでございませう。早速お見舞に参り、嬢様の御在所を探し出かつさらはれ、また村の妻女は残らず毒手にかかり、阿鼻叫喚の地獄の有様でございませうから、旦那様にはすまぬ事とは知りながら、その方に手をとられ、いろいろ善後策を講じ、つい、御無沙汰をいたしました」

ジャンク「ナニ、そんな心配はしてくれな。お前も村人のために非常に力を盡してゐるといふ事を聞いて、蔭ながら私も感涙にむせんでゐたのだ。私の娘はどう

でもよい。村の災難を救ひさへすれば、これにまさつた喜びはないのだ」

「旦那様の慈愛に深き其のお言葉を、村人が聞いたなら、さぞ喜ぶ事でございませう。私も貴方のお言葉は神の慈言のやうに心にしみ渡り、有難さ勿體なさ、自然に落涙をいたします。アア時にインカの親分さま、御親切に有難うございます。どうかお嬢様のために一臂の力をお添へ下さいますよう、旦那様に代り、お願い申します」

インカも涙ぐみながら、許嫁のサンダーが又もやさらはれたといへば、歎きの上に歎きをかさねる道理だ。このタクソンには知らさない方がいいだらうと思つたから、サンダーのことは口にせず、

「お嬢様の事は御心配下さいませ。キツと神様がお救ひ下さるでせう。また私も神様のお力に仍つて最善の努力を盡さして頂きますせう」

タクソン「ハイ有難うございます。モウかうなれば、神様に何事もおすがりするより途がございませぬ。時に、旦那様、インカ様、お喜び下さいませ。齋苑の館より派遣されたる三五教の宣傳使、照國別といふ活神様がこの村にお出でになり、

サンヨの家にお立寄り下さいまして、婆さまの危難をお救ひ下され、その上、バラモンの悪神を言向け和してやらうと仰有いましたので、吾々の奉ずる宗旨は違ひますけれど、神の助けに二つはないと存じ、お願いいたしまして、ただいま當家の玄關までお伴を致しました。宣傳使にお尋ねになつたならば、嬢様の所在も判然するだらうかと存じましたので、旦那様に照會もせず、だしぬけに、失禮ながら御案内申して参りました」

ジャンク「ナニ、三五教の宣傳使様を御案内申して来たといふのか。あ、何はともあれ大自在天様のお引合せだらう。サアサア玄關にお待たせ申してはすまない。早く奥へ通つて頂くやうに……セールは居らぬか、セールセール」

呼ばはれば「ハイ」と答へて、セールはこの場に現はれ、
旦那様、何の御用でございますか」

ジャンク「お前は、玄關にお客様が見えてゐるのを知らぬのか、早くお迎へ申して来い。玄關番もせずどこへ行つてをつたのだ」

セール「ハイ、誠に不都合をいたしました。實は表門に當つて、騒々しい聲がし

ますので取る物も取り敢ず行つてみれば、アニコ、バンコの大喧譁、バンコは鐵拳をくらつて氣絶いたしましたので、いろいろと介抱をいたし、漸く蘇生させました。が、どうやらすると再び昏睡状態に入りさうなので、目も放されず介抱いたしてをりました。旦那様のお歎きの央ばへ、かやうな下らぬ門番の争ひ事まで申上げては濟まないと存じ、さし控えてをりました。

ジャンク「そりや怪しからぬ奴だ。アニコといふ奴は、酒くせの悪い男だからなア。しかし何はともあれ、宣傳使を御案内申して来い。」

「ハイ」と答へて、セールは玄關に立ち現はれ、一同を案内した。照國別はじめ梅公、照公、エルソンの四人はジャンクの居間に、一禮を施し座についた。

ジャンク「これはこれは三五教の宣傳使様、賤が伏家をよくお訪ね下さいました。何分よろしく願ひ申します。私はこの村の里庄を勤むるジャンクと申す者でござ

います。」

照國「お初にお目にかかります。この村の入口にてタクソンさまにお目にかかり、承ればお館にはお取込みのお有りなさるといふこと、それを聞いては宣傳使の

われわれ、聞捨てにもなりませぬから、お邪魔をいたし、御機嫌を伺ひに参りました。何分神力の足らぬ、修業中の吾々でございますから、何もお間に合ひませぬが、神様のお力によりて、最善の方法を盡さして頂きたいと思ひます』

『尊き有難きそのお言葉、老木も若芽を吹き出し、花にあふ春陽の氣が漂ふやうでございます。此處にござるお方はインカ親分といつて隣村の侠客でございますが、此方にもいろいろと御心配にあづかつて居るのでございます』

照國『アア、これはこれは、お初にお目にかかります。あなたが有名な侠客のインカ親分でございますか。何卒お見知りおかれまして、今後は御昵懇に願ひます』

インカ『貴方様は、今承れば尊き三五教の宣傳使様。ならず者の取締をいたす野郎でございます。どうか私のやうなケチな奴でも、男のはしくれと思召し、何とぞお目をかけ下さいませ』

かかる所へセールはあわただしく此場に現はれ、

旦那様に申し上げます、今國王様のお使がみえましてございます。如何取はか

らひませうや」

ジャンク「ハテ國王様のお使とは何事だらう。何はともあれ、別殿に御案内申せ。

すぐさまお目にかかるから……」

「ハイ畏まりました」

とセールは足早に玄關指して出でてゆく。一同は面見合せ、何事の起りしならむかと不審の眉をひそめてゐた。

照國別「三五の神のあれます上からは

いかなる事もゆめな憂ひそ

世の中は相身互ひ、まして四海兄弟と申しますれば、何とぞ御昵懇に願ひませう」

ジャンクは小聲で「ハハハハハ」と笑いながら、

「先生様、しばらく失禮をいたします。オイ、タクソン、お使にお目にかかつて来るから、お前は宣傳使様の接待をしてゐてくれ」

タクソン「ハイ承知いたしました。勝手覚えしお家の中、御安心なさいませ」
ジャンク「タクソン、落度のないよう、御無禮をせぬやうに頼んでおくぞや」
と言葉を残し、別室に入つて禮服を着用し、別殿さして進み行く。
(大正一三・一二・一五 舊一一・一九 於祥雲閣 松村眞澄録)

第五章 愁雲退散(一六八七)

トルマン國バルガン城の國王トルカ王より勅使として、ジャンクの家に入り來たりし二人の男はオール、コースといふ。オールは嚴然として正座に直り、里庄のジャンクに國王の令を傳へた。

「吾がトルマン國は建國以來、上下一致、王と民との間は親子のごとく兄弟のごとく夫婦の如し。天恵豊かにして地味は肥え、印度全國の寶庫樂園と稱せられ、國民和樂し、太平の夢を結びたること茲に三千年なり。しかるに圖らざりき、今

回ハルナの都に君臨し玉ふ大黒主の命の軍勢、ウラル教征伐のため、はるばる軍卒を派遣したまふ。しかるに全軍の將たる大足別は性質暴戾にして虎狼のごとく、吾が國內の民を苦しめ、婦女を姦し財物を掠奪し、甚しきは民家を焼き、暴状至らざるなく、勢ひに乗じてトルマン國の首府バルガン城を攻略せむとす。汝等忠良の民、忠勇義烈の赤心を發揮し、前古未曾有の大國難を救ふべく、凡ての男子は十八才以上六十才以下は各武器を携帶し王城の救援に向かふべし。汝等が祖先の開きし國土を守るは此の時なるべし。汝里庄、村民に吾が意のあるところを傳達し、時を移さず軍に従ふべし。トルマン國、バルガン城トルカ王の使者オール、コース、國王殿下の聖旨を傳達するもの也』

と讀み聞かすや、里庄ジャンクは謹んで席を下り、

『力なき吾々には候へど、御勅命に従ひ速やかに義勇軍を召集し、王城ならびに國家の危難に殉じ奉りませう』

勅使オール、コースの兩人は「満足々々」と笑を洩らし挨拶しながら、ジャンクが勸むる茶も吞まず、急いで玄關口に立ち出でて、待たせおいたる十數名の士

卒つとと共にともヒラリと駒こまに跨またがり、紅くれなゐの手綱たづなゆたかに、蹄ひづめの音おともカツカツと隣村りんそんさして進すすみゆく。

ジャンクは照國てるくに別一行わけいつかうの居間ゐまに歸かへり來きたり、稍緊張ややきんちやうしたる面色おももちにて、

「御ごいちどうさま一同様、えらい失禮しつれいをいたしました」

照國てるくに「いや、どう致いたしまして、勅使ちよくしの趣おもむき、如何いかがでございましたか。實じつは御心配ごしんぱい申まをし上あげてをりました」

ジャンク「ハイ、有難ありがたうございます。私わたしも、もはや國家こくがのため一家一命いつがいちめいを棄すてねばならぬ時ときが参まゐりました」

と憂愁いうしうに沈しづみ、意氣銷沈いきせうちんしきつたる老人らうじんにも似合にあはず、どこともなく決心けつしんの色いろが現あらはれてゐる。

照國てるくに「一身一家いつしんいつかを棄すてねばならぬとは何事なにごとでございますか」

ジャンク「只今ただいまバルガン城じやうのトルカ王様わうさまよりの御勅使ごちよくしによれば、「印度いんどの國くにを守まもるべき大黒主様おほくろぬしさまの軍隊ぐんたい大足別將軍おほだるわけしやうぐんなるもの、トルマン國こくの城下じやうかの民たみを脅おびかし、民みん家を燒やき婦女子ふぢよしを奪うばひ人種ひとたねを絶たやし、なほ飽あき足たらず王城わうじやうを攻せめ落おとし、國王こくわうを

放逐せむとする勢ひでございませぬれば、この際國民は男子は十八才より六十才以下のもの、一人も残らず國難に殉ずべし」との御嚴命でございませぬれば、私も本年は五十八才、老耄たりとはいへ、まだ適齡がかかつてゐます。もはや娘の事は斷念いたしました。華々しく軍に従ひ、國家のために屍を山野に曝す覺悟でございませぬ」

「なるほど、承れば承るほど、お氣の毒でございませぬ。國王の御命令とあらば國民として、この際お起ちなさるのが義務でございませぬ。私も宣傳使として天下の害を除くべく、遙々月の國へ神命を受けて参つたのでございませぬから、どうか参加させて頂きたいものでございませぬ」

「ハイ、有難うございます。何分よろしく」

梅公「ア、先生、よくお考へなさいませ。善言美詞の言葉を以て、あらゆる萬民を言向け和す無抵抗主義の三五教ではございませぬか。殺伐なる軍隊に参加し、砲煙彈雨の中に馳驅するのは決して宣傳使の本分ぢやございませぬ。三五教は決して軍國主義ではございませぬよ」

照國てとくに「ハハハハハ、吾々われわれはお前まへのいふ通り、決して敵てきを憎にくまない。また殺伐さつぱつな人じん爲あて的き戦争せんそうはやりたくない。義勇軍ぎゆうぐんに参加さんかしやうといふのは傷病者しやうびやうしやを救すくひ、敵味方てきみかたの區別くべつなく誠まことの道みちを説とき諭さとし、平和へいわに解決かいけつし、このトルマン國こくは申まをすに及およばず、印度いんど七千餘國しちせんよこくの國民こくみんを神かみの慈恩じおんに浴よくせしむるためだ。その第一歩だいいっぽとして從軍じうぐんを願ねがつてゐるのだ」

梅公うめこう「ヤア、それなら分わかりました。別に文句もんくもありませぬが、しかしながら當家たうけの娘むすめスガコ嬢ぢやうやサンダーさまはどうなさる考かんがへですか。この方々かたがたも見捨みすてるわけには参まゐりますまい」

照國てとくに「ア、それも氣きにかかるが、それはインカ親分おやぶんに願ねがひしたらどうだ」

梅公うめこう「それもさうですな。もしジャンク様さま、先生せんせいは、アア仰有おつしやいますから貴方あなたと一緒に從軍じうぐんを遊あそばすなり、私わたしどもはサンヨの妹いも娘むすめ花香むすななさまも救すくはねばならず、當家たうけのスガコさまもサンダーさまも見殺みころしにするわけにも行ゆかないから、この搜策さうさくは拙者せつしやにお任せ下くださいませぬか」

ジャンク「御親切ごしんせつは有難ありがたうございますが、もはや今日こんにちとなつては、娘むすめの事ことなど言い

つてる場合ぢやありません。國王様のため國家のため全身の力を盡さねばなりません。どうか貴方も照國別の宣傳使と行動を一にして下さいませ。自分の娘のために宣傳使様を頼んだ、といはれては末代の恥でございます。ついてはインカの親分さま、あなたも國民の一部、義勇軍の將となり、私と一緒に出陣下さいませ。娘のことやサンダーのことは次の次でございますから」

インカ「成程、天晴れ見上げたお志、それでなくては里庄様とは申されませうまい。私だつて弱きを扶け、強きを挫く俠客渡世、國王様のお達示を聞いて、これが安閑として居られませうか。お言葉に従ひ従軍いたしませう」

タクソン「もし、ジャンク様、イヤ御主人様、私もお伴いたしませうか」

ジャンク「イヤ、其方は、もはや承れば三五教の宣傳使のお伴になるといふ約束をしたさうだ。トルマン國の男子の一言は金鐵も同様だ。照國別様のお弟子として参加して下さい」

エルソン「もし里庄様、私も照國別のお弟子となりましたが、國民の一部として里庄様と共に軍に従ひませうか」

「イヤイヤそなたも、もはや三五教の宣傳使の部下だ。タクソンと行動を一緒にするが宜からう」

「ハイ有難うございます。しからは尊き宣傳使のお伴をいたし、劍を持たず只コランを手にして、天下萬民のために最善の努力を盡さして頂きませう」

ジャンク「ア、よしよし、それで私も安心した。もし照國別様、どうか兩人の身の上を宜しくお願ひ申します」

照國「ヤ、感じ入つたる皆様のお志、委細承知いたしました」

門番のバンコや受付のセールに命じ、村内一同に國王の令を傳へ、明朝を期して出陣すべく傳達せしめた。村内は俄かに騒然として火事場のごとく殺氣漲つて来た。ジャンクは村の男子を軍隊に仕立て、自ら將として出陣することとなつた。インカ「吾が村にも必ずや同様の命令下りしならむ。お先へ御免」
と言ひながら一同へ挨拶をなし、尻引きまくり大地をドンドン響かせながら、飛ぶがごとくに歸り行く。

ここに一同は三五の大神、バラモンのお大神に前途の勝利を得むためとて一大祈

願を凝らし、首途の祝ひとして夜の明くるまで、直會の宴を催した。何れも勇氣
頓に加はり、山河を呑むの勢ひである。祭典も終り、いよいよ直會の宴に移り、
酒汲み交して室内は和氣霽々あたかも春のごとき空気が漂うた。
ジャンクはホ口酔ひ機嫌になつて聲も涼しく二絃琴を弾じつつ謠ひ始めた。

千早振る皇大神の造らしし トルマン國の目出たさは

時じく花の香に匂ひ 果物豊かに實りつつ

五穀は榮え民は肥え 牛馬駱駝羊豚

鶏までもよく肥り 天の下四方の國々安らけく

いと平らけく治まりて 神代のままの人心

何れの家も押し並べて 怒り妬み悲しみの

聲さへもなく日に夜に 歡ぎ樂しむ天津國

常世の春を喜びしが 天津御空の日の影は

漸く光褪せ給ひ 月の面も薄曇り

星のみ獨りキラキラと
瞬き初めて何となく

此地の上は騒がしく
鳥の聲さへ悲しげに

謠ふ御代とはなりにける
月日は進み星移り

天の下なる民草の
心は漸く曇り果て

強きは強く弱きもの
虐げられて秋の夜の

霜に惱める蟲のごと
怨嗟の聲は満ち満ちぬ

人の心は日に月に
ますます悪しく曇り果て

山の尾の上や河の瀬に
荒ぶる神の屯して

又もや民家を苦しめつ
人の妻女を奪ひ取り

悪しき災ひ日に月に
相重なりて國人は

薄き氷を踏むごとく
涙に咽ぶ折りもあれ

大足別の率ゐたる
醜の曲靈の軍人

彌ますますに醜業の
募り來たりてトルマンの

國をば荒らし國主まで
打ち滅ぼして欲望を

遂げむとするぞ忌々しけれ
ああ惟神々々かむながらかむながら

神の此世に在すならば
吾が國民の災ひをくにたみ わきは

一日も早く除きませよ
バルガン城は永久にじやう とこしへ

トルカの國主は幾千代も
壽長く榮えましことぶきが さか

トルマン國を包みたる
醜の雲霧吹き拂ひしこ くもきり ふ はら

再び天土晴明の
珍の世界に還しませうづ せかい かへ

吾は老木の行末の
いとも短き身なれどもみじか み

一つの生命を國のため
君の御ため獻りきみ おん たてまつ

萬民安堵の道のため
捧げ奉らむ吾が生命ばんみんあんど みち ささ まつ わ いのち

諾なひたまへ三五の
神素盞鳴の大御神あななひ かむすさのを おほみかみ

梵天帝釋自在天
大國彦の大御神ほんてんたいしやくじざいてん おほくにひこ おほみかみ

ひとへに願ひ奉る
ああ惟神々々ねが たてまつ かむながらかむながら

御靈幸はへましませよ
御靈幸はへましませよみたまさち みたまさち

照國別はまた謠ふ。

☐ 蒼空一點雲もなく

日月星辰明らかに

輝き亘る世の中も

天に風雨のなやみあり

地には地震洪水の

百の災ひ湧き來たる

浪靜かなる大海も

ただ一塊の雨雲の

中より吹き來る荒風に

波立ち騒ぎ島々を

呑まむ例もあるものを

此地の上に住む人は

如何で悩みのなかるべき

天變地妖あるごとに

世は晦冥に進み行く

かかる汚れし世の中は

一度天地の大神の

大活動を要すべし

バラモン軍や醜神の

醜の猛びは強くとも

誠一つの三五の

神の光に敵すべき

心安けくましますよ

大日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 天は地となり地は天に

上の激變あるとても ただ惟神々々

神に任せし身にしあれば いかなる事も恐れむや

仰ぎ敬へ神の徳 祝へよ祝へ神の恩

神は吾等と俱にあり 神は汝等と俱に在す

人は神の子神の宮 誠の神に敵すべき

曲靈の如何で來たるべき アア勇ましし勇ましし

いま神軍の首途に ジャンクの君を初めとし

梅公照公タクソンや エルソン司と諸共に

神の御前に懼伏して 前途の幸を祈るこそ

實に壯快の至りなり ああ惟神々々

御靈幸はへましませよ 御靈幸はへましませよ

梅公うめこう「思おもひきや軍いくさの庭にはに立たたむとは

今いまの今いままでさとらざりけり

さりながら吾われは神軍しんぐん言靈ことたまの

武器ぶきより外ほかに持もつものはなし
」

照公てるこう「大空おほぞらに日は照公てるこうの吾われなれば

あわ「てる」ことは一つひとつも要いらず

照國てるくにの別わけの命みことに從したがひて

道照公みちてるこうの吾われは進すすまむ
」

タクソン「照國てるくに別神わかみの命みことの御威勢ごゐせいに

吾われは全まつ「たくそん」敬けいをぞする

おめで「たくそん」嚴無比の大神の

御前に幸を祈るうれしさ

エルソン「常暗の世を立替へて神の代に

開かむ人ぞ人の人なる

沸きか「えるそん」内一同の騒ぎをば

いかに静めむ由もなきかな

ジャンク「天津日を隠さむとする村雲を

拂はむための今日の神軍

老いぬれど吾が魂は若々と

甦りつつ出陣やせむ

白髪しらがみを染そめて軍いくさに向むかひたる
武士ものゝふもあり吾われも習ならはむ
國難こくなんに殉じゆんずる吾われと白髪しらがみの
輝かがやきを見みて驚おどろくならむ
□

照國てるくにわけ別わか 面おも白しろし神かみの任よさしの神業かむわざの

一いつ歩ぽを進すすむる時ときは來きにけり

オーラ山嵐さんあらしはいかに強つよくとも

神かみの御息みいきに吹ふき拂はらふべし

小夜更さよふけて武士つはものどもが語かたり合あふ

軍いくさの庭にはの心地こころちするかな

明あけぬれば百ももの軍人いくさを率ひきつ連れて

バルガン城じやうに駒こまを進すすめむ
□

梅公うめこう 駒こま並なめて大野おほのヶ原がはらを進すすみ行ゆく

勇士ゆうしの姿すがた吾わが目めに躍をどるも

照公てるこう 早はやすでにバルガン城じやうの敵軍てきぐんを

討うち拂はらひたる心地こちしにけり

タクソン 面おも白しろし吾わが師しの君きみに従したがひて

神かみの軍いくさの功績いさをしや立たてむ

エルソン 戀こひ雲ぐももいつしか晴はれて國くにのため

世人よびとのために盡つくさむとぞ思おもふ

漸やうやくにしてコケコツコーとテイハ（鶏にはとり）の聲こゑ、四隣あたりより聞きこえ來くる。ジャンクは先まづ立上たちあがり、

「もはや鷄鳴けいめい、皆様みなさま、御用意ごよういなされませ。いよいよ出陣しゅつげんの時とき近づちかきました」

と勇氣凜々ゆうきりんりん雄健をたけびしながら、マサカの時ときの用意よういと蓄たくはへおきたる具足ぐそくをとり出だし武裝ぶさうに着手しゅしゆした。

かかる所ところへ白髮異様はくはついやうの老翁らうをう現あらはれ來きたり、「頼たのまう頼たのまう」と玄關口げんくわんぐちより呶鳴どなつてゐる。果はたしてこの老翁らうをうは何者なにものだらうか。

（大正一三・一二・一五 舊一一・一九 於祥雲閣 北村隆光録）

第六章 神軍義兵しんぐんぎへい（一六八八）

玄關口げんくわんぐちに立たちはだかり「頼たのまう、頼たのまう」と呼よばはつてゐる白髮異様はくはついやうの老人らうじんは、

さも横柄わうへいにこの家やの下女げぢよに向むかひ、

「オイ、お下女どの、當家の主人はどう致してをるか。吾はオーラ山の修験者、シーゴーと申す者だ。當家の主人に申し上げたい事あれば、面倒ながら案内をし
てくれやれ」

下女「ハイ、何方か知りませぬが、旦那様は俄かの御出陣で上を下への大騒動、
どうか又出直して来て下さい。何分御多忙でいらつしやいますから」

老人「アハハハハ當家にかかはる大難を救はむがため、はるばるオーラ山より
救世主の使として現はれ來たりし修験者だ。何はともあれ、主人に面會いたした
い」

かくいふ所へ、武装をつけた主人のジャンクは現はれ來たり、老翁に向かひ、
「いづれの方かは知りませぬが、今は國家の一大事、館は番頭どもに任せおき、
今朝より出陣せなくてはなりません。何御用か存じませぬが、もはや一身一家
の事にかかはる場合ではありませぬ。どうかお歸り下さいませ」

シーゴー「アハハハハ。拙僧がオーラ山を立ち出で、草茫茫たる夜途を露に濡
れながら夜も明けぬうち尋ねて來たのは、大神の御命令、國家を救ふも一家を救

ふも、神かみならでは叶かなはぬ事こと、その方ほうも國家こくかを救すくはむとして、義勇ぎゆうの軍ぐんに出陣しゅつちんなさ
るならば、拙者せつしやの一言いちごんをお聞ききなされ。唯一ただいっくわい回わいぐらみ耳みみを借かしたところで、あま
り損そんにはなりませんまい」

ジャンク「國家こくかを救すくふ方法ほうはふがありとすれば何なにより結構けつこう、既すでに出陣しゅつちんの間際まぎはなれども、
聞き逃のがすわけにはゆきますまい。ここは玄關口げんくわんぐち、サアサア奥おくへお進すすみ下ください。篤とく
とお話はなしを承うけたまはりませう」

シーゴー「しからは御免ごめん、まかり通とほるであらう」
と錫杖しやくぢやうをつきながら、横柄わうへいな面つらをして離はなれの別殿べつでんに伴ともなはれ往ゆき、丸まるき机つくえを中なかに置お
き、主客向しゆきやくむかひ合せあはとなつて談話だんわが始はじまつた。

ジャンク「あなたは神かみのお使つかひ、修驗者しゆげんじやと承うけたまはりましたが、國家こくかを救すくふ要道えうだうをお示しめ
下くださるとのこと、實じつに感謝かんしゃに堪たへませぬ。何なにとぞ御指ごしだう導だうを願ねがひます」

シーゴー「拙僧せつそうはオーラ山さんの生神いきがみ、玄真坊げんしんぼうの高弟かうていシーゴー坊ぼうと申まをすもの、このた
び吾わが師しの君玄真坊きみげんしんぼうにおかせられては、トルマン國こくの危急ききふを救すくひ、民たみの苦くを免まぬがれ
しめ、かつ小せうにしては一家一人いっかいちにんの危難きなんを免まぬがれしめむと、連日連夜れんじつれんやの修業しゅげふを遊あそばし、

一切の苦難を救ひたまふ、その靈驗の著しきこと、古今絶無でござる。天地の神明も吾が師の高徳を慕ひ、教を受けむとし、毎夜オーラ山の杉の樹に、天より棚機姫の星體下らせたまひ、深遠微妙なる教理を聞かせたまふといふ御威勢、如何にバラモン軍が跋扈跳梁すると、吾が師の君の祈祷によりて、煙散霧消するは火を睹るよりも明らかである。ついでには當家の娘御は行衛不明との事、必ずやバラモン軍の間諜者に捉へられ給ひしに相違なし、あなたは吾が師の君に依頼して、最愛の娘御を、救つてもらふ御精神はござらぬか」

ジャンクは怪しみながら、頭を垂れ、稍思案に暮れてゐた。

「シーゴ様とやら、遠路の所御親切に有難うございます。然しながら今日の都合、娘の事などに心を悩ます場合ではございませぬ。國家の一大事を救ふ御道あらばお示しに預かりたい」

シーゴ「アハハハ、あなたも偽善者の一人でござるな。何ほど國家の爲だといつても、天にも地にも掛け替へのない娘が危難を救はれたいといふ精神は、十分にお持ちでせう。吾が子を愛せない親は、人君として、或は里庄としての資格

はございますまい」

ジャンク「いや、あなたの御明察、恐れ入りました。天が下に子を思はぬ親が何處にございませう。しかしながら今日の場合は、小なる愛を捨て、國家國王といふものに向かつて、大なる愛を注ぐべきでございます。國家も國王様のお身の上も、すでに焦頭爛額の危機に瀕してをりますれば、たとへ最愛の娘を犠牲といたしても、大なる愛のために心力を傾注したい考へでございます」

「あなたは大切な娘御を犠牲としてでも、國家を助けたいといふ思召、實に感心いたしました。もし國家、國王、ならびに貴方の愛兒がお助かりになるのなら、當家の財産に執着はございませんア」

「勿論のことです。吾が娘は行方知れず、生死もさだかならず、加ふるに老軀を引提げて、劍光閃く戰場に進むこの身、元より死は覺悟してゐます。吾が死したる後は、巨萬の財産も何の必要がございませう」

「成るほど立派なお志感じ入りました。しからは一つ御相談を申上げたいが、國王、國家、およびお娘御を救ふため、この財産をオーラ山の師の君玄眞坊に奉る

お氣はございませぬか。山も川も、草木も天の星まで其の徳を慕ひ寄り來たと
いふ古今無雙の生神様に、お上げなさつたならば、第一は祖先のため、國家のた
め最善の功德と考へますがな」

かかるところへ受付のセールはあわただしく入り來たり、

「旦那様、村中の用意が調ひました。早く御出陣をと、村人が武裝のままお願ひ
に參りました。お馬の用意も出來ましたから……」

ジャンク「アアさうか、すぐに往くからと申してくれ」

セール「ハイ、畏まりました」

と、あわただしく立ち去つた。

シーゴー「如何でございますか、御決心は……」

ジャンク「國家のため、國王様のためならば、吾が財産を全部玄眞坊様に差上げ
ませう」

「いや流石は明察の里庄殿、天晴れ天晴れ、しからは後日のため、あなたのお手
より、一切の財産を差上げるとの證文を認めて下さい」

「男子の一言は鐵石の如し、面倒臭い證文などは要りますまい。これが人と人との交渉なら兔も角も、善知識の活神様に差上げるのだから、かへつて證文など差上げるのは失禮でございませう」

「成るほど、ご尤もの話だ。現に拙者が生證文でござる。梵天帝釋自在天様も御照覽あれ、決して二言はございますまいなア」

「エ、執拗ござる。苟くも義勇軍の總司令、武士の言葉に二言はござらぬ」

「しからは今日只今より、この財産は吾が師玄眞坊の所有に歸しました。御承知であらうなア」

「吾が財産を善用し、國家のため、國王様のため、娘のため、神様を鄭重に祭り祈願を籠めて下さい。時刻も切迫いたしますれば、拙者はこれよりお別れ申す」
シーゴ「ヤ拙僧もこの吉報を吾が師の君に申し上げ、早速祈願に取りかかりませう」

と言ひながら、揚々として歸り往く。梅公は二人の問答を訝かりながら、ひそかに立聞きしてゐた。

ジャンクは照國別の居間に入り來たり、

「いやどうもお待たせいたしました、サアこれから出陣をいたしませう」

梅公は次の間より慌ただしく入り來たり、

「もしもしジャンク様、御用心なさいませ、あの修驗者といふ老人は曲者でございます。あの人相には劍難の相が漂ひ、悪相が顔面に満ちてゐます。貴方はこの財産を玄眞坊とやらに全部提供なさつたやうですが、今の中にお取消しなさつたがよからう、ちよつと御忠告申し上げます」

ジャンク「イヤ、有難う。私も怪しい事だとは思つたが、何というても國王様や國家を助けるといふのだから、この言葉に免じ怪しいとは思ひながら財産全部を提供しました。もはや男子の口に出した以上は撤回は出来ませぬ。これが撤回出来るやうなら地上に吐いた痰唾を再び呑むやうなものです。もう私も覺悟を定めました。サアサア御苦勞ながら出陣いたしませう」

梅公「チヨツ、曲津神の奴、偉い事をしやがつたな。こいつはきつと何かの秘密があるに相違ない。あんな事を吐して、自分が當家の娘を何處かに隠してをるの

だらう。こんなことを聞いては見逃す事は出来ない。吾が師の君が何といはれても、オーラ山とやらに踏み込んで正體を調べてやらう、オウ、さうぢや さうぢや

と獨語しながら、照國別に從ひジャンクと共に三角旗を風に翻し、數百の義勇軍と共に旗鼓堂々とバルガン城を指して、法螺の聲も勇ましく「ブウブウ」と四邊の邪氣を清めながら隊伍を調へ進み行く。

數百人の騎兵隊は、手に手に槍長刀などを携へ、果しもなき廣原を進み行く。風は幸ひ追風にて進軍にも最も便利であつた。ジャンクは馬上ながら進軍歌を謠ふ。

神代の昔皇神の 開きたまひし神の國

トルマン國の若者よ 國と君とに盡すべき

よき日は今や來たりけり 勇めよ勇めよ神軍よ

進めよ進め百軍 敵は幾萬ありとても

如何いかでか恐おそれむ敷しき島のしまの
トルマン男子だんしの魂たましひは

金鐵きんてつよりも猶なほ堅かたし
國くにに仇あだなす曲津神まがつかみ

拂はらへよ拂はらへよおつ拂ばらへ
骨身ほねみは積つみて山やまをなし

血潮ちしほは流ながれて河かはとなり
屍かばねを野邊のべに曝さらすとも

神かみの御おんため君きみのため
御國みくにのために進すすむなる

吾等われらは貴うづの神軍みいくさぞ
撓たゆまず屈くつせず進すすみ行ゆけ

ジャンクの率ひきゆる義勇軍ぎゆうぐん
後おくれを取とるなひるむなよ

神かみの守まもりのある上うへは
汝なんぢの前途ぜんとは坦々たんたんと

蓮華はちすの華はなの開ひらくごと
眞樂園しんらくゑんが開ひらかれむ

進すすめよ進すすめよ快男子くわいだんじ
進すすめよ進すすめよ神軍みいくさよ

神かみは汝なんぢと俱ともにあり
吾等われらは神かみの選えらみたる

御國みくにを守まもる神軍しんぐんぞ
吾わが神軍しんぐんの往ゆく道みちに

塞さやらむ曲まがのあるべきぞ
アア勇いさましし勇いさましし

國くにを救すくひのこの軍いくさ
民たみの守まもりの神軍みいくさぞ

ああ惟神々々かむながらかむながら

梵天帝釋自在天ぼんでんたいしやくじざいてん

大國彦の大稜威おほくにひこ おほみいづ

吾が身の上に輝きてわがみ うえへ かがや

忠義一途に固まりしちうぎいちづ かつ

軍を守りたまへかしいくさ まも

勝利の都は近づきぬしょうり みやこ ちか

勇めよ勇めよ快男子いさ いさ くわいだんじ

進めよ進めよ神軍よすす すす みいくさ

照國別はまた謠ふ。てるくにわけ うた

吾は神軍照國のわれ しんぐん てるくに

別の命の宣傳使わけ みこと せんでんし

三五教の御教をあななひけつ みをしへ

四方の國々傳へむとよも くにくに つた

進み來たれる折りもあれすす き せりもあれ

タライの村のジャンクさまがむら

館に立ち入りこの度のやかた た 入りこのたび

軍の話聞きしよりいくさ はなし き

吾も義軍に加はりてわれ ぎぐん くは

嚴の言靈盡くるまでいづ ことたま つか

あるひは防ぎ戦ひつあるひは ぶせ たたか

神の建てたる神の國かみ たたか かみ くに

御空に塞る黒雲を

伊吹拂ひに拂ふべし

勇めよ勇めよ神軍よ

神は汝と俱にあり

人は神の子神の宮

神に敵する曲はなし

梵天帝釋自在天

大國彦の神様を

敬ひまつり三五の

教を守りたまふなる

神素盞鳴の大神の

御稜威を力と頼みつつ

生死の境に超越し

神の御ため國のため

國王と民を救うため

身もたなしらに進むべし

ああ惟神々々

神の御稜威の尊さよ

進めよ進めよ神軍士

勇めよ勇めよ軍人

ああ惟神々々

御靈幸はへましませよ

御靈幸はへましませよ

梅公はまた謠ふ。

吾^わが師^しの君^{きみ}に從^{したが}ひて
風^{かぜ}吹^ふき荒^{すさ}ぶ河^か鹿^{しか}山^{やま}

やうやく越^こえて千^ち萬^{よろづ}の
曲^{まが}の難^{なや}みを拂^{はら}ひつつ

葵^{あひひ}の沼^{ぬま}に來^きて見^みれば
月^{つき}照^てり渡^{わた}る水^{みづ}の面^{おも}

空^{そら}に輝^{かがや}く清^{きよ}照^{てる}の
姫^{ひめ}の命^{みこと}や黄^{わう}金^{こん}の

姫^{ひめ}の命^{みこと}の宣^{せん}傳^{でん}使^し
右^{みぎ}と左^{ひだり}に袂^{たもと}をば

別^{わか}ちてタライの村^{むら}の口^{くち}
進^{すす}み來^きたれる折^をりもあれ

バラモン軍^{ぐん}の暴^{ばう}状^{じやう}を
耳^{みみ}にせしより腕^{うで}は鳴^なり

血^ちは躍^{をど}りつつどこまでも
世^{よびと}人の難^{なや}みを救^{すく}はむと

思^{おも}ひきはめし雄^{をこ}心^{ころ}の
大^{やま}和^と心^{ころ}のやりばなく

如何^{いかが}はせむと思^{おも}ふをり
ジヤンク^{ひき}の率^きゆる義^ぎ勇^{ゆう}軍^{ぐん}

從^{じう}軍^{ぐん}せよとの師^しの君^{きみ}の
言^{こと}葉^ばに否^{いな}み兼^かねつつも

皇^{すめ}大神^{おほかみ}の御^み心^{こころ}と
仰^{あふ}ぎまつりて進^{すす}み往^ゆく

さはさりながらスガコ姫^{ひめ}
難^{なや}みに遇^あひしと聞^きくよりも

これが見^み捨^すてておかれようか
戦^{いくさ}の場^{には}に立^たちながら

心にかかるは姫の事

一旦救ひ助けむと

思ひ定めし吾が胸は

いつか晴れなむ大空を

包みし雲の如くなり

ああ惟神々々

御霊幸はへましませよ

吹き來る風は強くとも

敵の勢ひ猛くとも

神にある身はどこまでも

如何でか恐れためらはむ

アア面白し面白し

敵を千里に退けて

トルマン國を永久に

神の教に守るべく

進まむ身こそ樂しけれ

進めよ進めよ神軍よ

勇めよ勇めよ諸人よ

ああ惟神々々

御霊の恩賴を願ぎまつる

御霊の恩賴を願ぎまつる

照公はまた謠ふ。

風よ吹け吹け科戸の風よ 砂よ立て立て天まで立てよ

吾は神軍照公の 神の司よ乗る駒の

蹄の音も夏々と 如何なる山路も恐れなく

神のまにまに進むべし デカタン國の高原に

駒に鞭うつつ吾々は 三千世界の救世主

鳥獸や草木まで 救ひ助けむ職掌ぞ

大足別の曲軍 バルガン城を十重二十重

取り圍むとも何かあらむ 神のよさしの言靈を

力限りに射放ちて 敵と味方の隔てなく

言向け和すは案の中 刃に血をば塗らずして

軍をおさむる神の徳 アア勇ましし勇ましし

前途に光明輝きぬ 恐るる勿れ神軍士

進めよ進めよ皆共に 天國淨土を地の上に

完全無缺に開くまで ああ惟神々々

御靈幸はへましてせよ』

と聲勇ましく謠ひながら、千里の廣野を駒の蹄に砂塵を捲き上げながら、途々參加する兵士を合し、數千人の團隊となつてバルガン城を目がけ、勢ひ猛く進み行く。

(大正一三・一二・一五 舊一一・一九 於祥雲閣 加藤明子録)

第二篇 容怪變化

第七章 女白浪 (一六八九)

デカタン高原中の最高地、しかも地味最も肥えたるトルマン國の西北端に、雲に聳えた大高山がある。樹木密生して晝なほ暗く、猛獸毒蛇の棲息するもの最も多しと傳へられてゐる。これがオーラ山である。オーラ山といふのは、澤山の山が同じ形に竝んでゐる意味であつて、數百里に延長し、この區域をオーラ山脈地帯と稱してゐる。谷々より流れ出づる水は何れもオーラ河に注ぎ、印度を縦斷して印度洋に注ぐ有名な大河である。

元バラモン教の修驗者たりしシーゴ坊は、片腕と頼む玄眞坊と共にこの山脈の中心地、すなはちオーラ山に根據を構へ、時の到るを待つて、まづバルガン城を占領し、勢を集めてハルナの都に押し寄せ、大黒主を征伐し、印度一國の霸權を握らむと、三千の部下を引連れて山寨を造り、オーラ河を利用し、一切の擧兵準備に着手してゐた。先づ第一に必要なのは軍資金である。彼はあらゆる方法手段を講じて金品穀類ならびに武器を蒐集することに腐心してゐた。オーラ山の腹には稍廣き平地があつて、數里を隔てた遠方から、幾抱えとも知れぬ大杉のコンモリとした枝が目立つて見えてゐる。シーゴ、玄眞坊の二人は首を鳩め、秘

密會を開いた。

シーゴー「オイ玄眞、計畫もおひおひ緒につき、三千の部下は集まつたが、しかながら食料の缺乏といひ、武器の不足といひ、到底このままに経過すれば、折角の計畫も畫餅に歸するより途はない。また豺狼のごとき部下を統一せむとすれば、食糧が豊富でなくては、吾々の命令も聞かなくなつて了ふ。何ぞ可い工夫はあるまいかなア」

玄眞「左様でございますなア。私もいろいろと思案を致してをりますが、何といつてもバラモンの信仰をもつて固まつた此の國、一つの奇瑞を現はし、人心を攬し、信仰の力によつて、金錢物品その他の武器を献上させては如何でございませう。私はこれより外に可い方法はなからうかと存じます」

「なるほど、いいところへ氣がついた。俺も永らくバラモンの修驗者をやつてゐながら、宗教的信仰をもつて人心を攬し、大望を達せむとする最善の方法手段は氣がつかかなかつた。しかしながら斯かる山奥に在つて、人を集むるは容易の事ではあるまい」

「サアその事について、私も頭を悩めてをります。里近く出づれば人の寄りやすいが、秘密の漏洩する虞れがある。この山奥に居れば安全ではありませんが、人を集めることは容易ではありません。よほどの離れ業をして見せむ事には、この山奥へ愚夫愚婦をおびきよせる事は難かしいでせう」

「俺もいろいろ雑多と考へてはみたが、第一食糧の窮乏を告げるやうな事ではこの大望は成就せない。三千の部下に泥棒ばかりさせても、結局統一が出来なくなり、つひには國民の嫌悪を買ひ怨府となり、大業の妨害を來たすであらう。

何とか可い方法手段を捻り出せないものかなア」

兩人は首を傾け思案に暮れてゐる。そこへ岩窟の戸を開けて次の岩窟から這入つて來たのは玄眞坊の妻ヨリコ姫であつた。

「アアこれはこれは親方様、旦那様、何か可いお話が出来てゐるやうですなア。どうか私にもお招伴さして下さいませ」

シーゴー「ウーン、イヤ、何でもない。あまり大原野の風景が佳いので、玄眞殿と眺望を恣にしてゐたところだ」

ヨリコ「ホホホ妙なことを仰有いますな。岩窟の戸を閉めきつておきながら、大原野をみはらすの、眺望が佳いのと、子供を騙すやうなお言葉、何ほどお隠しなさつても、あなたがたの心の奥まで看破してをりますよ」
玄眞「ナア二、本當に見てゐたのだよ。今お前が来る一寸前に戸を閉めたところだ」

「ホホホ嘘ばかり、そんな白々しい事が仰有られますわい。貴方がたは妾を女と侮り、いつもコソコソとよからぬ御相談ばかりしてゐられますが、小さい悪をするよりも一層男らしい大悪をなさつたらどうですか。大悪は大善に似たり……

……といふことがあるぢやありませんか」

「女神のやうな優しいお前にも似ず、今日は又太いことを言ふぢやないか。人間も變れば變るものだなア」

「そらさうですとも、朱に交はれば赤くなり、麻につれる蓬、門前の小僧習はずに經を読み、勸學院の雀は蒙求を囀るとやら、日日毎日惡黨哲學の實習を受けてゐるのですもの、惡にかけたら、出藍の譽ともいふべき妾ですよ。もはや妾は夕

ライの村時代のヨリコ嬢ではありませぬ。比較的大悪黨の玄眞坊様が宿の妻、ホホホずるぶん發達したものでせう」

シーゴー「何とマア感心だなア。オイ玄眞、お前も最早安心だよ。こんな有力な後援者が出來たのだから、鬼に鐵棒だ。ついては俺も百萬の後楯を得たやうだ。

アア愉快愉快、オツホホホ」

と肩をゆすつて笑ふ。

玄眞「なるほど、親方の仰せの通り、ずるぶん悪化したものですわい。オイ、ヨリコ、實のところは親方や自分たちの大望をお前に打ち明けて、後援してもらひたいと喉元まで出てゐたが、何といつても名人の畫から抜け出たやうな、嬋娟窈窕たる其方、靈體一致の關係から見ても、優美な高尚な正直なお前の心、こんな悪黨な企らみを、うつかりお前に聞かせて、愛想をつかさね、三年の戀は一度に醒め、俺を振りすてて逃げ歸るか、ただしは自害でもしてくれちや大變だと、今日の日まで祕密を心に包んでゐたのだが、お前にそれだけの悪度胸があるとすれば、俺も最早大安心だ。天下は吾が意のごとく臆てなるだらう。テもさても愉快

な事ことだわい、アツハハハハ

ヨリコ「夫をつとに連添つれそふ女房にようぼうぢやございませぬか。タライの村むらの吾わが家やへお泊とまり下くださつた時とき、どつかに一癖ひとくせのある御目おんまなざし、此方このかたは何れは善ぜんか悪あくかは知らねども、大業たいげふを企くはだてる快男子くわいだんじだと直覺ちよくかくしましたので、大恩だいおんある母ははを捨すて、可愛かはいい妹いもうとに放はなれて、あなたに心中しんちゆう立だてをしたのでございませぬ。ここまで打明うちあけた以上いじやうは決けつして御心ごしんば配いなく、一切いっさい萬事ばんじ私わたしも相談さうだんに乗のせて下くださいませ」

玄真げんしん「何なんとマア、女をんなといふ者は分わからぬものだなア。いな、恐おそろしい者ものだなア、まるきり化物ばけものだ。よくマア、こんな極惡ごくあく美人びじんを抱だいて寝ねて、寝首ねくびをかかれなかつた事ことだワイ、アツハハハハ」

シーゴ「ウツフフフフ、ますます面白おもしろくなつて來きた。鬼おにの夫をつとに蛇じゃの女房にようぼう……とはよく言いつたものだ、エツへへへへ」

ヨリコ「もし親方おやかた様さま、珍めづしさうに何なんでございませぬか、女をんなは魔物まものと昔むかしからいふぢやありませぬか。私わたしも玄真げんしん坊ぼう様さまと三年さんねんが間暮あひだくらしてゐる間に、時々ときどき氣きの弱よわい事ことを言いつたり、世よをはかなんだりなさる度たび毎ごとに、……エー工腰こしぬけ拔野郎やらうだな、一層いっそうのこと、

寝首をかいてやらうか。イヤ待て待て現代の男といふ奴、何奴も此奴も腰拔ばかりだ。善を徹底的に行ふでもなければ、悪を徹底的に遂行する快男兒もない。世間の男から比べて見れば、この玄眞坊様は幾分か偽善と悪辣との手腕が、チツとばかり優つてゐるやうに思つたので、自分の意には充たないけれど將來何か使つてやる時もあるやうと、今まで辛抱してゐたのですよ、オツホホホ。玄眞様、誠に濟みませぬが、決して悪く思つて下さいますな。妾だつて時々愛は注いでゐるでせう。何といつても人體自然の理に依つて月に一度や二度は、發情期が出て來ますからねえ。ひだるい時のまづい物なし、喉の渴いた時は、泥田の水も呑めば甘露の味がするとやら、本當に貴郎は、妾が唯一の慰安者でしたよ、小なる救世主でしたよ。ホツホホホ

玄眞「チエツ、馬鹿にしてゐる。さうするとお前は俺の威力に恐れて、心ならずも服従してゐたのだな。そして時々情欲の炎を消すポンプに使つてゐたのだらう」

「あなたのポンプは人並み勝れて馬並みでしたよ。しかしながらそのお蔭でウツ

トコの孔口が擴大し、東經百度、北緯二百度といふ大龍門洞が形作られたのですもの、ホツホホホ

「エー、お前は男子を嘲弄するののか」

「ホホホホさうですとも、聖人の言葉にも、長老を敬へといふぢやありませんか。いはゆる、あなたに對して嘲弄するのは結局敬意を表してゐたのですワ。それに時々女の腐つたやうな、チヨ口臭い泣言をおつしやるのを聞く度に、胸がムカムカいたしましたよ。和尚の屁は長老臭いといひますからね。時々まるで水の中で屁をひつたやうな、掴まへどころのない計畫をしては失敗をなさるのだもの、カラツキシ信用がおけないぢやありませんか」

「アア、大變な女帝様を女房に持ったものだなア」

「コリヤ面白い、妾を女帝様と言ひましたね。敬ひ過ぐれば禮を失するとか申しまして、あなたは妾に對し、輕侮嘲笑の的としてござるのでせう。しかしながら愚弄的にもせよ、輕侮的にもせよ、女帝といはれたその言靈は、妾に取つては身魂相應、實に感謝いたします、ホツホホホ」

シーゴー「コレコレ女帝さま、大變な馬力ぢやありませんか」

ヨリコ「ハイ、馬力どころか、象力ですよ。大象も女の黒髪一筋にて曳かれると言ふぢやありませんか。男子は馬力、これを詳説すれば馬鹿力といひ、女はいはゆる象力です。象は憎に通じ、飽くまで男子を憎悪してをつても女子の精神を知らず、俺に惚れてゐるに違ひないと大變な馬鹿力を出し「象憎悪」しくも、主人面をさげて納まり返つてゐるのが世間一般の男子の病患ですワ。本當に男子といふ者は憐れな代物ですよ。ホツホホ」

「これは怪しからぬ、天下無雙の勇士二人を手玉に取つて罵詈訛弄を擅にし、絶對無限な侮辱を與へるとは言語道斷な代物だ。キツと敵を取つて上げますから、その覺悟をなさるが可からう」

「ホホホホお氣に障りましたら、御免下さいませ。この女帝は世間普通一般のガラクタ男子に對し、萬丈の氣焰を吐いたまひです。あなたのやうな男の中の男、天晴れ偉丈夫に對しては例外ですワ。私、實のところはシーゴー様が本當に好きなのよ、ねー、シーゴー様、頭に純白の雪を頂きながら、その艶々しいお面、こ

れが世のいはゆる白髪童顔とでも申しませうか。まるつきり劫を経た狒々公のやうですワ。ヒヒヒヒ」

「これはしたり、怪しからぬ女帝のお言葉、益々もつて八尺の男子を、讒誣嘲笑なさるか」

「滅相もない、ここに玄眞坊様がゐらつしやるぢやありませんか」

「エへへへへへ、褒めたり、くさしたり、上げたり下ろしたり、何が何だかチツとも譯が分らない。曖昧模糊として龍のごとく霞のごとく、吾々の馬力では到底その首尾を捕捉することは出来ぬワイ、エツへへへへへ」

「妾はその白髪童顔が大變に氣に入つてますのよ。大政黨を率つれ、平民大臣として時めきわたり遊ばす大資格が備はつてゐるのですもの。しかしながら用心なさいませよ。停車場や人ごみの中を、いつ中岡良一が現はれるか知れませぬからね、オツホホホ」

「未來における自轉倒島の總理大臣とは縁起が可い。しかしながら、刺客に會ふことだけは眞平だ」

「そらさうですとも、古今無雙のナイスに惚れられて、その上権力は天下に並びなく、酔うては眠る窈窕美人の膝、醒めては握る堂々天下の権……と酒の機嫌で唄つてみると、そこへキツと刺客が現はれやうまいものでもありませんよ。戀の仇とやらいふ曲神が現はれましてね」

「その刺客といふのは、一體どんな奴だ」

ヨリコ「ホホホホホ、ここでは一寸差支へますが、ゲのつく色男さまですよ。

御用心なさいませ」

玄眞「コリヤ女帝、何といふ暴言を吐くのだ。亭主を馬鹿にするのか。モウ今日かぎり、貴様のやうな氣の多い不卓腐れには暇を遣はさぬワイ」

ヨリコ「ホホホホ、あのマア妙な面ワイの、まるつきり古狸の化け損つたやうだワ」

シーゴー「何時までも女帝さまに嘲弄れてをつても事務が進捗せない。サア、これはこれで切上げて、本問題の討議にかからうぢやないか。なア玄眞坊」

玄眞「左様でございます。女帝は女帝として、雲深く祭り上げておき、親分さま

と私と肝膽相照らし、唇齒輔車的關係をますます密接にし、空前の大業につき最善の方法を協議いたさうぢやありませんか

シーゴロ「よからう。しかしヨリコさまに居つてもらつちや聊か憚るやうだ。失禮ながら御退席を願ひませうか」

ヨリコ「ホホホ頓馬野郎ばかりが首を鳩めて、何ほどメートルを上げたつて、馬力をかけたつて、到底碌な相談は纏まりますまい。今日までの貴方がたの御手腕は念入りに拜見さして頂いてをりますワ。……女賢しうして牛賣り損ふとやら、

あるひは女子と小人は養ひ難しとやら、七人の子はなすとも、女に大事をあかすなとやら、女は嫉妬の權化だとか、惡魔の化身だとか、婦女子の言信ずべからず……とか今時の男子は自分の馬鹿を棚に上げて、交際場裡の花ともいふべき婦人に對し冷笑輕侮を以て迎へてをりますが、女だつてさう捨てたものではありませんぬよ。本當の英雄は女にあるのですからなア。よく考へて御覽なさい、釋迦も孔子もキリストも皆女の玉門から吐き出されたものぢやありませんか。妾がここに居りました、お邪魔になるとは聞こえませぬよ。實のところを言へば、表面あな

たがたに親方様……とか、御主人様とかいつて面従してをりますが、うしろ向いては舌を出し、……取るに足らない、腑甲斐ない、ケチな野郎だなア……と、何時も子供扱ひにしてゐるのですよ。どうですか、貴方がた、妾を知恵の寶庫として尊重し、この大望を成就する考へはございませんか。馬鹿野郎や、下司の知恵で到底天下は取れませぬよホホホ。雑言無禮の段御勘辨を願ひます』

と傍若無人なヨリコ姫の言葉に、さしも兇惡なる二人は呆れはて、しばし言葉も出なかつた。

ヨリコ『ホホホホホ大膽不敵の女と思召すでせうが、このくらゐな事で驚くよ
うな貴方がたなれば最早取るには足らない、目なつと噛んで死んだ方が、よつば
ど男らしいですよ』

シーゴ『イヤ、女帝様、今日から貴女の部下にして下さい。キツと御命令に服
従いたします』

『決して間違ひはありませんまいな』

『バラモン男子の一言は岩石のごとく動きませぬ』

「よろしい、そんなら今日から女帝の部下ですよ。今までは親方親方と尊敬して
ぬましたが、今日からはシーゴーと呼びつけを致しますから、そのお覺悟をなさ
いませ」

「ハイ、一切萬事、徹頭徹尾、絶対服従を誓ひます」

「ホホホホ、善哉善哉。コレコレ玄眞さま、お前は何うする考へだい」

玄眞「お前が大親分になつて、シーゴーさまを乾兒とした以上は、俺はお前の夫
だ。お前の地位が高まると共に俺の地位も高まるのが當然の歸結ぢやないか。馬
鹿な質問をするものぢやないワ、アツハハハハハ」

ヨリコ「ホホホホ何時までも蟲のよい、唐變木だこと、ものが分らぬと言つて
も、あまりぢやないか。最前からの女帝の言葉にチヨコチヨコと現はれてゐるの
が、お前は氣がつかないのかい。もはや今日となつては、ヨリコ女帝の部下です
よ」

「ヨリヤヨリヤ女帝、まだ三行半を渡した事もなし、さうお前の方できめて貰つ
ても此方の方に承諾はしてゐないぢやないか」

「三行半も四行半も要りますか、承諾も妄宅もあつたものですか。お前もモチツと勉強してこの女帝をへこますだけの實力が具備したならば、再び夫婦になつて上げませう。それまでは夫婦たる權利は撤回しますよ」

「コレ、シーゴーさま、あんな事を言ひますワ、チツと可い挨拶をして下さいな」

「シーゴー」

「エー、君、斷念し玉へ、君の夫婦は提燈に釣鐘だ。到底知恵と言ひ、力といひ、不相應な夫婦の關係は永續はむつかしいよ。それよりも一層のこと、この女帝を謀師とし、日頃の大望を成就させやうぢやないか。女帝の承諾もなしに形式的の夫婦だなんて愛のない夫婦關係は險難だよ。最前も女帝が言つただらう、……幾度も幾度もこの頓馬野郎、寢首をかいてやらうと思つたか知れぬ……との御託宣、あれを聞いた時や、俺も體内地震が勃發したよ。本當に腕の凄、豪膽な女帝様だ、モウ諦めてしまへ。それよりも澤山な乾兒に命じ、世界の美人を誘拐して来て、選り取り見取り、不義の快樂に耽つた方が何ほど男らしいか知れないよ。ヨリコ女帝ばかりが女ぢやあるまいし、男子はモウ少し心を廣く持たないと駄目だよ」

玄眞「エー、仕方がない、思ひ切つて、夫の權利を放棄します。どうか女帝様、今日只今よりシーゴアの親分同様に可愛がつて使つて下さい」
ヨリコ「ヨシヨシ、シーゴアは左守、玄眞は右守、三位一體となつて、天下の經綸を行ひませう」

ここに二人はヨリコ姫に絶対的權利を賦與し、いろいろ大陰謀の計畫にかかる事となつた。密議の次第は次章において明らかになるであらう。

オーラ山の醜の嵐の強くして

四方の草木は悩み伏しなむ

女てふものの強きを今ぞ知る

醜の曲靈のまつらふみれば

(大正一三・一二・一六 舊一一・二〇 於祥雲閣 松村眞澄録)

第八章 神乎魔乎（一六九〇）

美の化身、愛の權化、善の極致、眞情の發露にして平和の女神と渴仰憧憬さるる天成の美人も、一度霜雪を踏み激浪怒濤の中に漂ひ、あらゆる危険と罪惡との渦に卷かれて、その精神内に急激なる變調を來たした時は、たちまち鬼女となり惡魔となり、龍蛇となり國を傾け城を覆へし、あらゆる男子の心膽をとろかし、男子の稜々たる氣骨も、肉離れのするところまで魔の手を伸ばすものである。實にも女は外道の骨頂、鬼畜の親玉、惡魔の集合場、暗黒無明の張本となつて天下を混亂し、あらゆる害毒を流布するに至る。かれヨリコ姫は梅花の唇、柳の眉、鈴をはつたやうな眼、白い顔の中央に、こんもりとした恰好のよい鼻、白珊瑚の齒の色、背は高からず低からず、地藏の肩、ふつくりとして恰好のよい乳房、滑らかな玉の肌、髪は漆のごとく瑠璃のごとく黒き艶を腮邊に放ち、象牙細工のやうな手首、指の先、瑪瑙のやうな爪の色、歩行する姿は春の花の微風に揺れるがごとく、縦から見ても横から見ても、どこに點の打ちどころのない嬋娟窈窕たる

傾國の美人であつた。彼はタイの村の吾が家にある頃より、その美貌が災ひして、あらゆる男子に戀の矢玉を集中されたが、かれヨリコ姫の意思に合つた賢明にして勇壯なる男子の本領を具備した戀人が見付からなかつた。さうして彼は蜥蜴面、蛙面、閻面、南瓜面、瓢箪面、瓜實顔、茄子のやうな黒い顔等の悪性男に包圍攻撃され、日夜男子たるものの弱點を知り、嘔吐を催す思ひに十六の春より三年の光陰を味氣なく情けなく感じつつ暮してゐた。世の中の男子といふ男子はひとり一人として碌なものはない、ちよつと見ては才子と見え勇者と見え、或は人情深き有徳者と見え、間然するところなき男の中の男だと世の譽を専らにする男子に接して見ても、その魂を包んだ肉體といふ表皮を破羅剔抉して精神のドン底を洞察すると、いづれも惡臭蝟集して恰も塵捨場のごとく、糞尿の堆積せるのごとくに感じ、戀てふものの到底、完全に味はふべからざる事を知つた。かれヨリコ姫は比較的他の女に比べて理智に富んでゐた。凡てが男性的であつた。それ故なまめかしい香油の香や白粉の香で、ごまかしてゐるハイカラ男子を見ては蛇蝎のごとくに忌み嫌うた。さうして男子てふものの卑怯さ、腑甲斐なさ、女に對して無

力なる眞理を悟つた。彼は如何にもして自分に勝る逞しい、雄々しい男子と結婚して見たいとの念慮を離さなかつた。

時しもあれ、バラモン教の修験者玄眞坊なるもの、荒風吹き捲くる或日の夕、門口に立つて一夜の宿を乞うた。かれヨリコ姫は戸の節穴より修験者を垣間見れば、帽子を深く被つてゐるためその面體は確と分らねど、どこともなしに逞しい、男らしい男だと直覺した。そこで彼は心よく戸を開いて修験者を呼び入れ、いろいろと世の有様を徹宵して語り合ひ、玄眞坊の普通人とは異なり、どこともなく山氣のあるに心を傾け、不満足ながらも……普通の男子に比ぶればチツとは男らしい處もある、盈つれば虧くる世の習、到底明暗行交ふ世の中には、圓満とか具足とか完全とかいふ事は望まれなからう、エーままよ、この男と、母と妹にはすまないが共に手を携へ、吾が家を抜け出だし、一つ天下を驚かすやうな大賭博が打つて見たい。のるか、そるかだ、事の成功不成功は問ふところでない。一度死んだら二度とは死なぬ。何事も死を決して断行すれば鬼神も避くるとかや、アア断行断行……と首肯しながら自分の方から玄眞坊を口説き落とし、あくる日の眞

夜中頃、兩人手に手を執つて、十八年住みなれし故郷を後に、あちらこちらと漂浪ひながら、つひに十八才の暮、このオーラ山に立て籠り大陰謀實行の第一歩を進めんとしたのである。

彼女は時期の至るまで表面に柔順と貞淑を粧ひ豺狼の心を深く胸に包み、おひおひ月日が経つに従つて、鼻持ちのならぬ香を感じて來た玄眞坊に、表面あらゆる媚を呈し、夫婦となつて時の至るを待ちつつあつた。彼は、もはや躊躇すべき時に非ず、シーゴーフや玄眞坊の部下に集まる三千人の惡黨輩を利用してトルマ國を吾が手に入れ、バルガン城を根據として月の國七千餘國の大女帝となり、驍名を天下に輝かさむ事を日夜神に祈つてゐたのである。それゆゑ彼は今まで塗つてゐた金箔を剥がし生地を表はして、シーゴーフ、玄眞の二巨頭に向かひ思ひ切つた言動に出でたのである。果して二巨頭は彼の大胆不敵なる言と、その度胸に心膽を奪はれ、旭に霜の當つて消ゆるが如く、もろくも彼が前に甲を脱ぎ、彼女を女帝と仰ぎ謀主となし、遂に幕下となる事を甘諾したのである。

シーゴーフ 女帝様、吾々が日頃の望みを遂行するためには、如何なる方法手段を

とれば、いいでせうか。御指導を仰ぎたいものでございます」

ヨリコ「お前たち兩人は妾の言に背きはせないか。まづ、それから定めておかう」
「今となつて何しにお言葉に背きませう」

「よしよし、玄眞坊はどうだ」

玄眞「私もシーゴーと同意見でございます」

ヨリコ「そんなら、妾が空前絶後の大計畫、神算鬼謀の奥の手を教へてやらう。

まづ當山に古くより祀られある天王の社を策源地と定め、玄眞坊は表面天より降りし救世主となり、シーゴーは三千の部下を統率し、妾は天より降りし棚機姫の化神となつて天下の萬民を誑惑し、まづ第一に擧兵準備のため金品、糧食、軍器を徴集することに着手せねばならぬ」

シーゴー「成るほど、先立つものは金銭と糧食と武器でございます。それを無事に蒐集する方法は如何いたしたら宜しうございますか」

「まづ玄眞坊は天來の救世主と揚言し、當山の有名なる大杉の上に、日夜天の星下つて救世主の教を聞くと遠近に觸れまはり、ギヤマンの中に油を注ぎ、これに

火を點じ、晝の中より杉の木の梢に十五六ヶばかり火を點じ遠近の民を驚かせ、
天王の社を信仰の中心と定めるのだ。一方シーゴは數多の部下を使役し、あ
ゆる富豪の家に忍び入り、美人を奪ひ歸り、當山の天然岩窟に幽閉しおき、而
て後、シーゴは救世主玄眞坊の高弟と稱し、娘を奪はれし家々に修験者となつ
て立ち現はれ頻りに宣傳をなし、幸ひに之を信じて來たるものには天地八百萬の
神を招待し、神助を願ふため、信者の財産の高に應じ一戸につき金子五十兩乃至
五百兩、之に加ふるに穀物は一俵乃至百俵を神に獻らしめ、夜の間に、オーラ川
の谷間に鐵線を通じ、滑車を以て谷底に輸送し、數多の部下は澤山の運送船を造
り、米麥は船にて八里の下流ホー口の谷間まで輸送し、バルガン城攻撃の時の糧
食にあて、妾は天王の社に身を潛め、迷信深き愚夫愚婦に神託を傳へ、出師の準
備を致さうではないか。これに勝したる巧妙な手段はあるまいと思ふ。兩人、吾
が神策には恐れ入つたであらう』

□ 成程、水も洩らさぬ御計畫、いや、もう感心仕りました。オイ玄眞坊、知識の
源泉たる天來の女傑、到底吾々の及ぶところではない。どうだ、お前も感心した

だらうのう』

玄眞 『イヤ、もうズツと感心した。それでは一つ大芝居にとりかからう』

これよりシーゴーは谷間の大木を伐り倒し、澤山な舟を造り、兵糧運搬の用に供すべく數多の部下を使役して、晝夜兼行して舟の建造に着手し、玄眞坊は大杉の木に繩梯子をかけ、ギヤマンのランプを樹上高く輝かすことに苦心した。

附近の村民はオーラ山の杉の木に、夜な夜な燦爛たる光のとどまり輝くのを見て何れも不審の眉を潜め、日の暮るるを待つて村人が火花を見るごとくワイワイと囂し立て、種々雑多の批評を下してゐた。シーゴーは三千の部下の中より力の強い氣の利いた奴を百人ばかり選み、遠近の村落に放ち、あわよくば直接金品を奪ひ、或は富豪の娘を搔攪ひ、ひそかにオーラ山に連れ歸り數多の天然岩窟に押込めおく事にとりかかった。遠近の村民は盜賊横行し、娘や妻を奪はれるといふ噂が、それからそれへと傳はり、いづれも夜分になると戸を鎖し、遂には樹上の梢の光を見物するものもなくなつた。シーゴーは修驗者に化けすまし、遠近の村落を、

諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂、本來無東西、何所有南北、迷故三界城、悟故十方空、生者必滅、會者定離、南無波羅門帝釋自在天、歸命頂禮謹上再拜

と錫杖を振りながら、村々の目星しき門戸に立つて順禮した。この宣傳は大いに效を奏し、いづれも戦々恟々として悲歎の淵に沈む人は、オーラ山の救世主を頼り一切の災厄を免れむことを希求するに至つた。シーゴは部下を修驗者に仕立て遠近を巡錫せしめ、

「オーラ山には天來の大救世主出現し玉ひ、山河草木、禽獸蟲魚はいふも更なり、萬有愛護の教を垂れさせ玉ひ、遂には天地の神明もその徳に感じ、夜な夜な救世主のまします珍の聖場の傍に立てる大杉の梢に天降り、燦爛たる光明を放ち救世主の教を聞かせ玉ふ。前古未曾有の瑞祥なり」

と言葉たくみに宣傳をしたので、娘を失ひしもの、妻を失ひしもの、病に苦しめるものは、吾も吾もと先を争ひオーラ山の救世主に面會せむと、蟻の甘きに集ふがごとく參詣することとなつた。

今^{いま}まで人^{じん}跡^{せき}さへ絶^たえたるオーラ山^{さん}は救^{きう}世^{せい}主^{しゅ}出現^{しゅつげん}ありとの評^{ひやう}判^{ばん}に、老^{らう}若^{にやく}男^{なん}女^{によ}の嫌^{きら}
 ひなく金^{きん}錢^{せん}、物^{ぶつ}品^{ぴん}、穀^{こく}物^{もつ}はいふも更^{さら}なり、家^{いえ}の重^{ぢゆう}寶^{ぼう}として保^ほ存^{ぞん}しありし槍^{やり}薙^{なぎ}刀^{なた}な
 どの武^ぶ器^きまでも神^{しん}器^きと稱^{しょう}して奉^{ほう}納^{なふ}することとなり、瞬^{またた}く間^{うち}に穀^{こく}物^{もつ}の山^{やま}、矛^{ほこ}の林^{はやし}が
 築^{きづ}かれた。玄^{げん}眞^{しん}坊^{ぼう}は處^{ところ}狭^せきまで集^{あつ}まり來^きたる人^{ひと}びとに向^むかひ、大^{おほ}杉^{すぎ}の大^{たい}木^{ぼく}を小^こ楯^{だて}
 にとり、さも應^{おう}揚^{やう}なる口^く調^{てう}にて、
 『汝^{なんぢ}等^ら一切^{いっさい}の衆^{しゆ}生^{じやう}、善^{ぜん}男^{なん}善^{ぜん}女^{にょ}、吾^わが教^をふる言^{げん}を聞^きけ。吾^{われ}は父^{ちち}なく母^{はは}なく天^{てん}を以^{もつ}
 父^{ちち}となし地^ちを以^{もつ}て母^{はは}となす宇^{うちう}宙^{ちゆう}唯^{ゆい}一の天^{てん}帝^{てい}の再^{さい}來^{らい}なるぞ。先^まづ吾^{われ}を信^{しん}ずるものは
 壁^{あしなへ}は立^たち、盲^{めくら}は明^{あか}りを見^み、聾^{みみしい}は聞^きき、癩^{らいびやう}病^{びやう}は清^{きよ}まり、身^{しん}體^{たい}壯^{さう}健^{けん}にして無^む限^{げん}の長^{ちやう}壽^{じゆ}
 を保^{たも}ち、富^{ふう}貴^き繁^{はん}昌^{せう}し、死^ししては天^{てん}國^{こく}に上^{のぼ}り、百^{ひやく}花^{くわ}爛^{らん}漫^{まん}芳^{ほう}香^{かう}馥^{ふく}郁^{いく}たる天^{てん}國^{こく}の樂^{らく}園^{えん}に
 無^む限^{げん}無^む極^{きよく}に歡^{くわん}喜^きの生^{しやう}涯^{がい}を送^{おく}り、求^{もと}めずして百^{ひやく}味^みの飲^{おん}食^{じき}を給^{きふ}せられ、不^ふ老^{らう}不^ふ死^しなる
 べし。汝^{なんぢ}等^らかか^る美^{うる}はしき天^{てん}國^{こく}に至^{いた}らむことを望^{のぞ}まば吾^わが救^{きう}世^{せい}主^{しゅ}の言^{げん}を聞^きけ。汝^{なん}
 等^{ちやう}が花^{はな}婿^{むこ}をとり、花^{はな}嫁^{よめ}をとるにも、相^{さう}當^{たう}の結^{ゆひ}納^{なふ}が要^いるだらう、金^か錢^ねなり、物^{ぶつ}品^{ぴん}な
 り、箏^{たん}筥^す、長^{なが}持^{もち}、旗^{はた}、指^{さし}物^{もの}、武^ぶ器^きなどは嫁^{よめ}入^いりに要^{えう}する肝^{かん}腎^{じん}要^{やなめ}の結^{ゆひ}納^{なふ}なるべし。
 汝^{なんぢ}等^ら天^{てん}國^{こく}の樂^{らく}園^{えん}に至^{いた}り天^{てん}人^{にん}と結^{けつ}婚^{こん}をなし、平^{へい}和^わの生^{しやう}涯^{がい}を永^{えい}遠^{えん}に送^{おく}らむとせば、ま

づ神の御前に結納金を献上すべし。金銀珠玉穀その他あらゆる武器を天帝の化身たる吾が前に奉り、永遠無窮の幸福を得よ。汝等の知るごとく、吾を天帝の化身として久方の天津空より天の星下らせ玉ひ、吾が徳を慕ひ、吾が説法を聴聞し玉ふ。その證據には毎夜この神木に星光燦爛たるを見るならむ。決して疑ふこと勿れ。怪しむこと勿れ。疑ひは信仰の門を破り、疑ひは地獄を造り、暗黒を作り、滅亡を招くものぞ。愛善なる神に對するには愛と善を以てせよ。信眞なる神に對するには信と眞とを以てせよ。神は相應の理に住し玉ひ、内面外面ともに汝等の行爲を調査し玉ふ。神の愛するは即ち吾が身を愛し吾が家を愛し、國土を愛するの謂ひなり。疑ふこと勿れ。善男善女よ、一切の衆生よ、歸命頂禮神道加持、謹上再拜謹上再拜」

日々集ひくる愚夫愚婦に對し、右の言葉を繰り返し、鼻をすすらせ嬉し涙をこぼさせ軍資の蒐集に心力を注いでゐた。さうして大切な娘や妻を紛失したるものに對しては特別の祈祷と稱し、澤山の金品を獻納せしめ、ヨリコ姫の鷹棚機姫が忍びある天王の社に伴ひゆき、神勅を受けしめつつあつた。何れも深山のことと

て朝は夜明けごろより参来集ふものあれども、玄眞坊の託宣により、七つ下れば一人も残らずこの山を下らせた。その理由は、

七つ時以後は天神地祇八百萬の神、毎夜下り玉ひて、天下救済のために玄眞坊の説法を聞かせ玉ふ。それゆゑ智慧證覺の劣れる凡人は遠慮すべし。萬一強ひて止まらむとするものは神罰たちまちに至るべし」
と脅威し、信徒の歸り去つた後は、あらゆる美味を食ひ、酒を飲み、ヨリコ姫を眞中にシーゴー、玄眞坊は三つ巴となり、その他の頭分は傍に侍して暴飲暴食に舌鼓を打つてゐたのである。

ヨリコ「シーゴー殿、随分お骨折りと見えて、非常な効果が上りましたよ。世界の愚夫愚婦どもは蟻の如くに集まり來たり、澤山な金銭物品をこのきつい山も顧みず送つて來るやうになつたのは全くお前のお骨折りだ。この調子で六ヶ月も續いたならば、最早兵糧は心配は要らぬ。たとへ十萬の部下といへども、容易に養ふことが出来るだらう。汝の天晴れな働きはまさに勳一等功一級だよ」

シーゴーは得意な顔して、さも嬉しさに、

「不束な吾々の微弱なる働き、女帝様のお褒めに預かりまして身にあまる光榮でございます。なほこの上は粉骨碎身、犬馬の勞を厭ひませぬ。どうか大望成就の上は宜しくお引立てをお願いいたします」

ヨリコ「そんなことは、言はいでも分つてゐるよ。お前は妾の右の腕だ、腕なしには働きは、どんな英雄だつて豪傑だつて出来はせないよ。乾兒あつての親分、親分あつての乾兒だ」

シーゴー「エへへへ有難うございます、鹿猪盡きて獵犬煮らる……と言ふやうな惨めな目に會はしちや、いけませぬよ」

ヨリコ「ホホホホいづれ悪黨と悪黨との結合だもの、それも保證の限りではなからうよ、ホホホホ」

玄眞「女帝様、私の働きはどうでございますか」

ヨリコ「お前の働きは又格別だ。何といつても天帝の化身だからね」

「どちらの功績が大きうございますか。それを聞かして頂かないと、ネツカラ勵みがつきませぬがな。そして競争心が一向起りませんがな。凡て物事は競争によ

つて進歩し發達するのですからな」

「お前は左の手だよ。右の手も必要なれば左の手も必要だ。お前たち兩人は何れも兄たり難く弟たり難しといふ間柄だ。決して手柄に甲乙はない。妾の手柄はお前たち二人の手柄、いや部下一同の手柄、お前等はじめ部下一般の手柄は妾の手柄、上一致不離不即の鞏固の關係が結ばれてゐるのだ。いづれも協心戮力して印度統一のために活動して下さい。今日は部下一般にも祝ひの酒を與へたがよろうぞよ」

シーゴー「ハイ、承知いたしました。部下も喜ぶでございませう」

かかる所へ小頭のパンクといふ男、恐々現はれ來たり、三人の前に兩手を突き、
「お頭様に申し上げます。大變な事が起りました。どうかシーゴー様にでも來てもらつて取り押へてもらはなくては、到底パンクの腕では解決がつきませぬ」

ヨリコ「パンク、どんな事が起つたのか」

パンク「ハイ申し上げ兼ねますが、部下共が食糧の事について叱事を申し、もうお暇をもらつて國に歸り正業につくとか申しまして、二百人ばかり同盟軍を組織

しました。なるべく、こんな内輪揉めはお頭に聞かしたくはありませぬが、もう駄目でございます。彼等の主張するところによれば、お頭や頭株は百味の飲食に舌鼓をうち、俺たちは高粱や炒米の味ないものに甘んじ菜葉ばかり食はして、骨から肉離れがして、到底動けないから歸らう歸らうと言つてゐるのです」

ヨリコ「成るほど、それも尤もだらう。これシーゴーさま、一時も早く今、妾の言つたとほり酒を一般にふれまひ、かう澤山集まつた御馳走に舌鼓を打たしてやつて下さい。獅子、狼、虎、山犬なども腹さへよけりや人に噛みつかぬものだから、ホホホホ」

シーゴーはパンクと共に、谷底の部下の集團を目がけてヨリコの命を傳ふべく繩梯子に乗つて下り行く。

（大正一三・一二・一六 舊一一・二〇 於祥雲閣 北村隆光録）

オーラ山の谷間には蒼味だつた水が、かなり廣い流れをなして靜かに流れてゐる。これより七八丁上に登ると非常に峻しい瀧のごとき水流であるが、もはやこの地點は水の流れも緩やかにして底も深く、深い池水のやうな調子である。この河には新舊數多の船が無數に浮かべられ運搬用に供されてゐた。日々四方より持ち運び來たる物品を鐵線と滑車との作用によりて、天王の森の祠の床下から逆落としに谷間へ落とす、これを船に満載してホールの隠れ家に送るのを乾兒どもの仕事としてゐた。澤山の乾兒どもは奔命に疲れやや倦怠の氣分を生じ、そろそろ食料の粗惡なるを憤り、二百名ばかり同盟脱退を謀つてゐた。三千の部下の七分通りは各地へいろいろのよからぬ用務を帯びて散らばつてゐたのである。そこへシーゴアの親分株がパンクと共に、澤山の珍味佳肴や豊醇の酒をつり下した。ニコニコしながらシーゴアは一同に向かつていふ。

「皆の乾兒ども、お前たちには大變な骨を折らした。實に、女帝様を初め吾々幹部は感謝をしてゐるのだ。今日は幸ひ澤山のお供へ物があつたから、腹一杯美味佳肴を喰ひ、酒でも呑んで元氣をつけ大活動をやつてもらひたい。女帝様からも

皆みなの者ものによろしく傳つたへてくれとおつしやつたぞ〇

この聲こゑに一同いちどうは今いままでの不平ふへい面づらは何處どこへやら、酒肴しゅかうと聞きいて惠ゑ比須びすのやうな顔かほになり、拍手はくしゅの聲こゑは谷たにの木魂こだまを響ひびかせ、雷かみなりの落おつる如ごとき勢いきほひであつた。

パンク〇 オイ、皆みなの奴やつ、お前まへ達たちやア ブツブツと不平ふへいを漏もらしてゐたが、女帝にょていさまだつて親分おやぶんさまだつて、お前まへたちの苦勞くろうはよく御存ごぞんじだ。今日けふは女帝にょてい様の思召おぼしめしで、見みたこともないやうな御馳走ごちそうを頂いたくのだから、感謝かんしゃしたらよからうぞ〇

甲か 〇 オイ、パンクさま、お前まへの骨折ほねをりで久ひさし振ぶりで結構けつこうな飲食おんじきにありつくのだ。毎日まいにち日ひに栗あはや黍きびで口腹こうふくを満みたしてゐても、骨離ほねばなれがしさうで思おもふやうな活動くわつどうが出來で来きなんだが、かう結構けつこうな油あぶらをさしてもらへば、機關きくわんが圓滑ゑんくわつに運轉うんでんするだらう。女にょ

帝ていさまに宜よろしく申まをしてくれ。一同いちどうを代表だいへうしてお禮れいを申まをしておく〇

パンク〇 ヨシヨシ、キツと傳つたへておかう、女帝にょてい様さまもお前まへたちの機嫌きげんの好よい顔かほを御ご覽らんになつたら、きつと満足まんぞくなさるだらう。シーゴー、玄眞坊げんしんぼう様の親分おやぶんも御満足ごまんぞくなり、俺達おれたちも満足まんぞくだ。貴様達きさまたちも大おほいに満足まんぞくだらうアハハハハ〇

と笑わらひつつ女帝にょていの居室きよしつをさして急坂きふはんを登のぼりゆく。鯨飲馬食げいんばしょくの宴えんは無雜作むざふさに開ひらかれ

た。酒がなければ悄氣返り、青い顔をしてブツブツ不平を漏らし、酒に飲ひ酔ひ腹が充つれば又もや怒つたり、泣いたり叫喚いたり擲り合をしたり、どうにもかうにも始末におへぬガラクタバかりが集まつてゐるのだから、容易なことで統御はできない。泥棒の親分になるのも、アア又難い哉である。そろそろ酔ひが廻り出すと彼處にも此處にも濁りきつた言靈戦が開始された。

甲「オイ皆の奴、いい加減に喰うとかぬか、何だ、アタイやらしい、チヨンチヨンと舌打ちをしゃがつて、おまけに皿を嘗めたり箸を舐ぶつたり、まるきり乞食の所作ぢやないか、エーン、卑しいものだなア。オーラ川の杭ぢやないが、大食の長食とは貴様等のことだ。禪の河流れで、【食ひ】にかかつたら離れぬといふ代物だからなア。餓鬼みたやうな奴と行動を共にするのは、本當に情けないわ。

チヨツ、嫌になつてしまふ」

乙「ナナナ何だ、何が卑しいのだい。苟くもオーラ山の山寨に割據するヨリコ女帝様の吾々は輩下だ。まるで塵埃を箒で掃くやうな事を吐すと、此方にも了簡があるぞ」

甲 ㊦ アハハハハ、その了簡を聞かしてもらはうかい」

丙 ㊦ (浄瑠璃) 計略といひ義心といひ、かほどの臣を持ちながら、了簡もあるべきに、浅き企みの鹽谷殿、今の忠義を戦場の、御馬前にて盡さばやと、思へば無念に閉ぢふさがる、胸は七重の門の戸も、漏るるは涙ばかりなり、ジャン、ジャン、ジャン、アハハハ。オイ甲、乙、歌でも謡つて機嫌を直したらどうだ。結構な酒をいただいで小言をいふと言ふ事があるものか、冥加知らずの奴だなア。女帝様のお志を何と心得てゐるんだ」

甲 ㊦ エー、何を吐しやがるのだ。女帝の志が聞いて呆れるわ。自分が計略をもつて愚夫愚婦の懷中を捲きあげ、そして俺達に振舞つてやるのなんのとは「おとまし」いわい。自分が汗膏を流して造つた飲食でもあるまいし、たとへて言へば、この川の中に入つて、お前と俺とが水を浴びてゐる時、その手許から水を掬つて俺の口へ入れてくれたやうなものだ」

丙 ㊦ そんな水臭いことをいふない。女帝様に聞こえたらどうするのだ」

甲 ㊦ 聞こえたらどうだい。何奴も此奴もそつと物した物を、俺達にものして呉れ

るだけの事ぢやないか。いつも俺達に働かしてその上前をとり、大將然と構へて居るのだから、地部下の俺達はたまらないわ。たまに酒の一杯や二杯吞まして呉れたつて恩に着る理由もなし、また恩に着せる理由も無いのだ。つまり、要するに、結局俺達が物して来た物を俺達が喰うやうなものぢや。部下に命掛けの仕事に、をさしておいて、自分は高い所にとまり、吾々を頭で使ひ、女帝だの何のとほんとの忌々しいぢやないか。鱧か何ぞのやうに俺達の不平の蟲を酒で殺さうと思つたつて、そんな奸策に乗る奴があるか。俺や、酒を吞めと吐しやがつた時にや、腹の中の癩癩の蟲がグルグルと喉元で鳴りやがつて、手を出しよつたのだ。アタ味なくもない酒を滅多やたらに強ひられて、俺だつて耐つたものぢやない。そこらの山も木も岩も草も、天手古舞ひをさらすなり、俺の體は宙に捲き上げらるるなり、本當にひどい目に會はずぢやないか。エエ怪體の悪い、もうこれから酒など一杯も吞んでやらぬわい、とは言はぬわい」

乙「エへへへ、何だか知らぬが、俺は結構な酒に酔ひ、脂肪濃い御馳走に預かつて何ともいへぬ氣分だ。しかしながら脂肪氣の多い食物はちつと【ひっこい】

な
□

丙 □ さうだ、一寸【ひつこい】はひつこいが、しかしひつこう甘いぢやないか、

俺はもうグンドサが破裂しさうだ。どうれ、パサパーナでもやつてこうかな□

といひながら立ち上らうとして目が眩み、又もやドスンとその場に腰を下ろした。

甲 □ 何だその態ア、腰も何も抜けてゐるぢやないか□

丙 □ なに、今御輿を下ろした所だ。しかしながら、かう足の立たぬところまで結

構な酒肴を頂いて、精神正に恍惚とし、天國に遊ぶやうな気分になつたのも、み

んな女帝様のお蔭だよ。よく考へて見よ、シーゴの奴が大親分として威張つて

けつかつた時は自分ばかり喰つて、手下の奴には酒一杯も飲めとは吐しやがらな

かつたぢやないか。ヨリコ姫様が大親分に取つて代られてから、すぐさまかふい

ふ結構な御馳走を下さつたのだ。それを思へば今度の女帝様は、吾々に對する慈

母だ。拜み奉らぬと罰が當るぞよ、ババ罰が……□

甲 □ なに、さう有難がるには及ばないわ。あいつ等は鮫鯨に海月に鰐の集合團體

だから、終ひの果には吾々をよい食物にしやがるのだ。それだから俺が最初に、

もう脱退しやうと言つたぢやないか」

乙「三人の親分が、鮫鯨だとか鰐だとか海月だとか貴様はいふが、一體鮫鯨といふのは誰だい」

甲「ヘン、分らぬ奴だなア、女帝が鮫鯨で、玄眞坊が鰐でシーゴアの奴が海月だ。鮫鯨といふ奴はな、沼の底や海の底にじつと潜伏しやがつて、頭から細い細い絲のやうな物を水面にニユツと浮かべ、その先に花とも蟲とも分らぬやうな肉塊をつけ、いろいろの魚が好い餌があるとと思つてその肉塊を喰ひにゆくと、チクチクと綱を手繰り、自分の口に来た時にガブリとやるのだ。今の世の中にはこの鮫鯨に似たやうな奴が、女帝のみならず澤山あるよ。さういふ代物を稱して鮫鯨主義の生活といふのだ」

乙「ハハハハハ、そいつは面白い。そして玄眞坊の鰐の理由を聞かしてくれい」

甲「ヨシ、聞かしてやらう、何でも世の中に分らない事があつたら、俺に聞くのだな。そもそも鰐といふ奴は、體にも似合はぬ大きな口をしやがつてその口の中に木の片や枯枝なんかを一ぱい詰め、小魚どもがよい隠れ家があると思つて悠々

と這入つて来る奴をソツと舌を出してグイグイと腹の中へ引つ張り込み、自分の腹を肥やす奴だ。あの大杉の木の下に陣を構へて、寄つて来る有象無象や、小雑魚などを引張り込むやり方といふものは、まるで鰐そつくりぢやないか」

乙「ウンなるほど、こいつは面白い、序に、シーゴー親分が海月だといふ因縁を聞かして貰はうかい」

甲「海月といふ奴は骨もなければ、口々に顔もない奴だ。そして長たらしい尾を幾條も幾條も引きづりやがつて浪のまにまに漂ひながら、俺達のやうな小雑魚を澤山に丸い笠の下に隠し、親分氣取りで保護してゐやがるのだ。さうすると些ばかり大きな魚が、その小魚を取らうと思つて海月に近づいてくるのだ。さうすると海月の奴ぬるぬるとした紐でクルクルとしめつけ、頭から食うといふ代物だ。そこで小雑魚は海月の奴に守られ、すこし大きな魚は海月の奴に喰はれるのだ。吾々だつて今は小雑魚の身分だから親分の傘下に保護されてゐるのだが、すこし大きくなつて頭を擡げて見、きつと唯では置かない。親分だつて、これを思ふと前途闇黒になつて、嫌になつて仕舞ふわ。今の世の中は形式こそ變れ、こんな

奴ばかりだ。海月生活、鰐生活、鮫鰈生活と人のいつてゐるのは、大略右様のや
りかたをやる人間のことだ。エエ怪體の悪い、折角呑んだ酒まで醒めてしまった。
オイ乙、一杯俺につがないか」
乙「サアサア、呑んだり呑んだり」
甲「オツトツトツ、こぼれるこぼれる。やつぱり酒の香は有難いものだなア。
イヒヒヒヒヒ」
と肩を揺する。一方の方には泣いたり笑つたり怒つたり、廻らぬ舌の面白い歌が
始まつてゐる。

「オーラの山に鬼が出た 出た出た出た出た鬼が出た

このまた鬼の素性をば 調べて見れば月の國

ハルナの都に蟠る 妖幻坊の片腕と

羽振り利かした曲津神 玄眞坊やシーゴアの

兩親分に取りついて バルガン城をば占領し

天下を亂し人種を絶やして曲津の世の中に

轉覆せむとの企み事さはさりながら俺もまた

今は曲津の御厄介百姓するにも道具なし

商賣するにも資本なし肝腎要の妻も子も

親さへもなき吾々は一層氣樂な泥棒業

元から悪とは知りながら食はず呑まぬが悲しさに

善の心を立直し悪魔の乾兒となり下り

一寸先は暗の夜でその日その日を送るのだ

バラモン教の教には人の物をば盗んだり

人を痛めておいたなら未来は地獄に落ちるぞと

聞いてをれども如何にせむ背に腹は替へられぬ

ウントコドツコイドツコイシヨヨイトサノサヨーイヤサだ

甲「ダダダ誰だい、そんな大きな聲で不穩な事を申すと、鮫鯨さまに申し上げる

ぞ
□

丁てい「ナナ何なんだ。喧やかましういふない。おれや今日けふかぎり脱退だつたいするのだから、もはや女にょ帝ていの権力けんりょくも俺おれにや及およぶまい。いひたい事ことをいうて酒さけを呑のまなけりや、日頃ひごろの鬱憤うつぶんが晴はれないぢやないか、貴様きさまは何時いつまでも鮫鯨あんかうに盲従まうじゆうするつもりか、よい馬鹿ばかぢやなア、エへへへへ□

數多あまたの部下ぶかは思おもひ思おもひの小言こごとをつきながら、日ひの暮くるまでこの谷間たにあひに酒さけに浸ひたり、思おもはぬ鞆丸きんたまの皺しわのばしをやつてみた。

(大正一三・一二・一六 舊一・二〇 於祥雲閣 加藤明子録)

第一〇章 八百長劇やほちやうげき (一六九二)

ヨリコ姫ひめの大頭目だいたうもくを始めはじめ、シーゴ、玄真坊げんしんぼうの三人さんにんは酒汲さけくみ交かはし、いろいろと面白おもしろからぬ協議けふぎに耽ふけつてゐた。そこへ慌あわただしく手下てしたの一人ひとり現あらはれ來きたり、

「親分に申し上げます」

ヨリコ「慌ただしきその様子、何事が起つたのかなア、お前はコリぢやないか」

コリ「ハイ、左様でございます。シーゴー親分様の御命令により、タライの村の里庄が家に十數人を率つれ、夜陰に乗込み、たうとう絶世の美人スガコ姫を引つ捉へて歸り、狼谷の入口において、吾々同僚が芝居をやつてゐる所でございますから、どうか救世主として、お一人現はれ下さいませ」

「ソリヤいい事をした。あしこの娘ならば随分美人だらう。そして澤山の金も要り求出来るだらう。ヤ、面白い面白い。オイ、コリ、あの娘をかつさらへるに就ての殊勲者は誰だ」

「ハイ、ともかく私が引率して參つたのですから、誰がかつさらへても、ヤツパリ私の凡ての畫策よろしきを得た結果でございますから、まづ月桂冠はこのコリに歸すべきものと存じます」

「自分が生れた村の娘と聞けば、何だか恥づかしいようだ。そして面を見られちや大變だから、妾は天王の社の床下なる地下室に住居を移さう。玄眞坊、コリ、

お前兩人寄つて、よきに取計らふたが宜からう」

兩人は「ハイ」と頭を下げ、よい椋鳥が捉まつた……と俯向いたまま、ホクソ
笑んでゐる。

ヨリコ「コレ、シーゴー殿、吾が居間に跟いて来て下さい。お前さまには又別の
用があるから」

と言ひながら、シーゴーを伴ひ、地下室に歸り行く。玄眞坊は厳しき法服をつけ、
錫杖をガチャガチャと響かせながら、七つ下りの山路を法螺貝を吹き立て吹き立
て降り行く。

狼谷の入口に十五六人の手下どもが、一人の美人を中におき、

甲「オイ、女、汝は今まで榮耀榮華に、何不自由なく、里庄の娘として暮して來
た奴だが、もはや汝の運命も「ツキ」の國だ。サアこれから因果腰を定めて、こ
の方の女房になるか、厭と吐さばこの方が刀の錆、性念をすゑてシツカリ返答を
いたすが可からうぞ」

女「お前さまは、この山に割據してゐる小盗兒サンだな。同じ人間に生れながら、

なぜ又またこんな卑怯ひげふな商賣しやうばいをしてゐるのだい。自在じざいてん天様の御冥罰ごめいばつが怖ろしくはありませぬか」

「アツハハハハ、大自在だいじざいてん天がこはくつて、こんな商賣しやうばいが出来るか、馬鹿ばかな事をいふな。どうだ一つ、改心かいしんして泥棒どろぼう様の奥様おくさまになり、女盜賊をんなたうぞくの頭目とうもくとして羽振りはぶりを利きかす氣きはないか」

「エー、汚けがらはしい、小泥棒こどろぼうの分際ぶんざいとして貴婦人きふじんに向かつて何をいふのだ。さりおらう！」

「アツハハハハ、チヨツクとやりよるワイ。さすがは里庄りしやうの娘むすめだけあつて、どこともなく魂たましひが出来できてゐる、ヤ、感心かんしん々々。その魂たましひを見込みこんで、この方ほうが惚ほれたのだ。お前は俺おれを小盜兒こぬすとといふが、決して其様そのやうな者ものではない。トルマン國こくのバルガじやうかン城下じやうかに生うまれたシヨールさまといふ立派りつぱな男をとこだよ。男なかの中の男をとこといはれた哥兄あにきだ。俺おれが腮あこの振りかたで、お前まへの命いのちが助たすからうと助たすかるまいと、自由じゆう自在じざいの權けん力りよくをもつ男をとこだ。どうだ、一つ考かんがへ直なほして、俺おれの奥おくになる氣きはないか」

乙おつ「シヨールさま、エ、邪魔じやまくさ臭くさい、こんな尼あまツチヨに相手あひてになつてたら、日ひが暮く

れますよ。サ、たたんだりたたんだり。コリの親分が歸つて來たら、何と言つて小言をつかれるか分らぬ。こんな婦女の一疋や半疋に手古ずつたとあつちや男が立たねえ。オイ皆の奴、やつつける」

「ヨーシ合點だ」と一同は柄物を取つて、一人の女に向かひ打つてかかる。女も強者、身構へなし、柳眉を逆立て、

「タカが小泥棒の十人や二十人、何の怖るる事あらむや。日頃覚えし柔術の妙技を現はすはこの時だ。サア來い、來たれ」

と大手を擴げて待つてゐる。

「なに猪口才な」

と一同は、武者振ぶりついて手を取り足をとり、忽ち地上に捻伏せてしまった。

シヨール「コリヤ女、ジタバタしてもモウ駄目だ。サア俺の心に従ふか、何うだ。

その方の一言に依つて、汝の生死が分るるのだ」

女「エー、汚らはしい、妾はタライの村の里庄が娘スガコ姫だ。汝がごとき心汚れし小泥棒に靡くやうな女ではないぞ。殺したくば殺したがよい。惜しまれて散

るのが花の値打だ。サア殺せ殺せ」

と呼ばはつてゐる。シヨールも……早く玄眞坊が来て呉れないかなア……とやや

手持ち無沙汰の氣味でまつてゐると、ブーブーと法螺を吹きたてながら、ガチャ

リガチャリと急坂を下つて来る男がある。かれはコリの注進によりて、この芝居

の處置をつけむため、修験者の法服を纏うてやつて来た玄眞坊である。玄眞坊は

あたりに響く大音聲にて、

「われこそは、天の命を受け、オーラ山に天降りたる玄眞坊の大救世主だ。見れ

ばかよわき女を拐かし、亂暴狼藉を働きをる、こわつぱの企みと見えたり。待て

ツ、今に神譴を加へくれむ、そこ動くなツ」

と呼ばはる聲に、シヨールはじめ部下の者共は、ヤレ幸ひと、蜘蛛の子を散らす

がごとく、バラバラバツと逃げ出し遠く姿をかくした。スガコ姫は餘りの無念さ、

殘念さに白齒をくひしばり、嗚咽涕泣してゐる。玄眞坊は側近くより來たり、靜

かに姫の頭や背中を撫で、一人靜かなやさしみのある聲で、

「どこのお女中か知らぬが、えらい御災難でござつたのう。もはや拙僧の現はれ

た上は御安心なさい。てもさても危ない所でござつたワイ」

スガコ「何れの方かは存じませぬが、妾の命の瀬戸際をお助け下さいまして有難う存じます。あなたは何れの神様でございますか、恐れながら御名を承りたうございます」

「拙僧は天を父となし、地を母となし、宇宙の主宰となり、トルマン國を救済の爲このオーラ山に聖蹟を止め、かくのごとく修験者と變化して衆生濟度をいたす者、もはや吾が目にかかりし上は、如何なる曲神といへど、あなたが體に一指だもそへる事は出来ない。ご安心なさい」

「どうも有難うございます。あなたが噂に高きオーラ山の玄眞坊様でございますか、これも全く神様のお引合せ、何かの御縁でございませう。妾はタライの村の里庄が娘、親一人子一人の憐れな者でございしますが、昨夜泥棒の團體に踏み込まれ、猿轡を嵌められて廣い原野を引き廻され、今又この處において泥棒頭が無體の戀慕、かれが意に従はざるため、妾が命を取らむといたし、大勢寄つてかかつて捻ぢ伏せてをりました一刹那、尊き法螺貝の聲が聞こえたかと思へば、救世主

様の御來臨、おかげで危ふい所を助けて頂きました、幾重にも御禮申し上げます」

「イヤ、お禮を言はれては困る。天が下の萬民は皆吾が子だ、吾が弟子だ。親が子の危急を救ふのは當然だ、決して禮をいふにや及ばぬ。サアこれからこの方と共に、オーラ山の聖場へ行つて休まうぢやないか」

「ハイ御親切有難うございますが、吾が家におきましては、父は申すに及ばず、家の子どもが上を下へと、妾を探ねて心配をしてをりませうから、何とぞ父の家まで送つて頂くわけには参りますまいか。そして十日も二十日も百日も御逗留下さいまして、里人に結構な恵みをお與へ下さいませまいか」

「そなたの望み、聞いてやりたいは山々なれど、この玄眞坊は七つ下ると、天地の神々と相談を致さねばならず、星は天より下り大杉の梢に止まつて、吾が教説を聞きに来る……といふやうな次第であるから、今少时间里へ出るわけに行かぬ。さうだと言つて、お前を一人、このまま歸せば、又もや泥棒の難に會はぬとも保証し難い。それゆゑ今少時、この方と共にオーラ山の聖場に詣でて、天王の社に感謝祈願の誠を捧げ、少時逗留いたしたが可からう。そなたの父上には、この方

より人をつかはし、報告をしておくから臆て迎へにみえるだらう。救世主の言葉

に二言はない。サアサア此方に従いてお出でなされ

「さう御親切に仰有つて下されば、否む譯には参りませぬ。左様なれば不束な妾、しばし御厄介に預かりませう」

「ウン、ヨシヨシ、さすがは明察の淑女、いな賢女だ」

とほめそやししながら、スガコの手を引いて、コツリコツリと急坂を登り、おのが住家へと歸り行く。早くも日は山の頂に没し、四邊は薄暗く、大杉の梢には燦爛

なる妖星の光が輝いてゐた。玄眞坊は頭上の光を指ざし、笑を満面に湛へながら、

「コレコレお女中、あの梢を御覽なさい、あの通り、日の暮れるが最後、天からお星様がお降りになり、救世主の教説を聞かんとお待ちかねだ」

スガコは頭上を打仰ぎながら、目も眩き光の梢に散在せるを見て、且つ驚き且つ怪しみながら、青い面して慄うてゐる。玄眞坊はこの態を見て高笑ひ、

「アハハハハ、さすがは深窓に育つたお嬢さまだ。天からお降りになつたお星様がこはいと見える。その青い顔……」

「玄眞坊様、あまりの御神徳の高さに、妾は肝をとられました。何と不思議な事があるものでございますなア。天地開闢以來、お星様が降つて教を聞かれるといふ事は、言置にも書置にもございませぬ。思へば思へば貴方様は絶対無限の神權を備へていらつしやる活神様の御化身でございませう、あまり有難くつてお禮の申しやうもございませぬ」

「お前は實に見上げた才媛だ、この方の魂の素性をよくもそこまで看破したなア。お前は尋常の人間ではない。尊きある女神様の化身だよ」

「ホホホホ、勿體ない、妾のとき賤しき女に向かひ女神の化身だなどは、玄眞坊さま、御冗談も程がございますよ、あなたも人が悪うございますな。さう擲掬つていただきまますと、知らず知らずに慢心いたしますからなア」

「イヤ決して擲掬ふのではない、救世主の言葉には嘘詐りはない筈だ。拙僧の言葉は神の言葉だ。スガコ殿、安心をなされよ」

「ハイ有難うございます、そんなら少時、魂の素性が分るまで、あなたのお側に

おいで頂きたいものでございますなア」

「ヨシヨシ、それが可からう、お前は第一靈國の天人の天降りだ。八百萬の神にいひつけて、天國の身許調べをしてやらう。ここ一週間の中には、お前の素性が判然と分るだらう」

「ハイ、有難うございます、何分よろしくお願いいたします」

スガコは相當の教育もあり、凡人にすぐれた知恵も有つてゐた、そして天性の美人であつた。しかしながら何ほど賢明な婦人でも思はぬ厄難に會ひ、九死一生の場合、思はぬ人に助けられ、その人から……お前は立派な女神さまだの、化身だの……と言はれては、如何なる明智の女でも迷はざるを得ないのである。スガコは到頭彼等悪人輩の待ち受けた罅に陥り、玄眞坊を眞の救世主と信じ、虎狼の窟に入るとは知らず、欣然として妖僧の後に従ひ、やうやく大杉の下、玄眞坊が居間に導かるることとなつた。アアスガコの今後の身の上は何うなるであらうか。

(大正一三・一二・一六 舊一一・二〇 於祥雲閣 松村眞澄録)

第一章 亞魔の河（一六九三）

スガコはオーラ山の岩窟に玄眞坊につれ込まれ、天國における神の族籍を査ぶるためと稱し、一週間も待たされてゐた。彼はその間に無聊を慰むるため、望郷の歌を唄つてゐた。

□ オーラの峰は高くとも この谷川は深くとも

吾が身を育てはぐくみし 誠の親の御恵みに

比べまつれば九牛の一毛だにも如かざらむ

夜な夜な通ふ風の足 吾が垂乳根の父上の

居間の雨戸を訪れて さやぎまつれど如何にせむ

風に靈なく言葉なく 吾が言靈をまつぶさに

傳へむ由もなくばかり 父は吾が身の行く末を

案じわづらひ玉ひつつ 歎きに沈み朝夕の

食物たべものさへも進すすまずに 吐息といきをつかせ玉たまふらむ

アア戀こひしや父ちちの御顔容おんかんばせ 妻つまに別わかれて只ただ一人ひとり

浮世うきよの風かぜにもまれつつ 妾めかけを杖つゑとし力ちからとし

後のちぞえ添そさへも持もたせられず 惠めぐみはぐくみ玉たまひしを

夜よるの嵐あらしに誘さそはれて 一人ひとりの娘むすめは雲くもがくれ

探たづねむ由よしも荒風あらかぜの 野原のほらを巨わたる聲こゑばかり

悲かなしみ玉たまふ有様ありさまを 今目いままのあたり見みる心地こころ

吾わが身みに翼つばさあるならば この岩窟いはやどを脱ぬけ出いでて

歸かへらむものとは思おもへども 玄眞坊げんしんぼうのいぶかしき

そのまなざしにいとめられ 進すすみもならず退しりぞきも

ならぬ苦くるしき果敢はかなさよ 玄眞坊げんしんぼうといへる人ひと

自みづから天てんの神様かみさまの 化身けしんといへど訝いぶかしや

別べつに變かはりしこともなく 朝あさな夕ゆふなに吾わが側そばに

い寄より添そひ來きて厭いやらしき 目色めいろを注そそぎ忌いまはしき

言葉の端の何となく
いとも卑しく思ほゆる

醜の曲靈の取憑り
世を紊さむと企らみて

かかる悪戯なすならむ
ああ惟神々々

梵天帝釋自在天
大國彦の大御神

一日も早く吾が胸の
雲を晴らさせ玉へかし

大日は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも

たとへ大地は沈むとも
神の御恵み父の恩

一日片時忘れむや
神の形に造られし

妾は神の子神の宮
神に等しきこの身にも

曲の雲霧かかるとは
實に訝かしき世の様よ

あはれみ玉へ天地の
誠の神の御前に

慎み敬ひ願ぎまつる。

思ひきや誠の神と思ひしに

吾が身を戀ふる神司とは

いと聖き神の柱と思ひしに

怪しきことの多き人かな

このままに仇に月日を過ぎしなば

妾も曲の餌食とならむ

かく歌つてゐる所へ、玄眞坊は鍵をもつて錠をねぢあけ、ソツと入來たり、

「スガコ殿、どうも忙がしいことでござつた。今日はことさら澤山な參詣者で、

この方も實に多忙をきはめたよ。しかしながら最早七つ下り、やうやく人は家路に歸つたから、先づお前の美しい顔容を見て、一日の疲れを休めやうと思ふのだ。

何とマア美しい顔だなア

と厭らしげな笑をたたへ、川瀬の亂杭のような齒をニユツと出して、スガコの頬にキツスをしようとする。スガコは驚いて「アレまあ」と言ひながら、象牙細工

のようない白い美しい手で、玄眞坊の額をグツと押した。

玄眞「アツハハハハ、怖いかな、可笑しいか、恥づかしいか。テもさても初心な者だ。オイ、スガコ、今日はじめて天から使が来て、お前の神籍を調べて見たところ、マア喜べよ、第一靈國の天人で、しかも此方の女房の靈だつたよ。それだから、相應の理によつて天に在つては比翼の鳥、地に在つては連理の枝、どうあつても天地相應の眞理により、そなたと夫婦にならなくちゃ、やり切れない因縁が結ばれてあるのだ。何だか其方の危難を救つた時から、床しい女だと思つてゐたが、よくよく調べて見れば、右の通り、どうぢや、姫、嬉しいか」

スガコは眞青な顔をして、唇を紫色に染め、聲を慄はせながら、
「エー、残念やな、妾は貴方に謀られました。どうしたら可からうかな。梵天帝釋自在天様、どうぞこの急場をお助け下さいませ、惟神靈幸倍坐世」

「アハハハハ、さすがは少女だ、ヤツパリ恥づかしいのだな。はじめの間は三番叟でも後には深くなるものだ。アイヤイヤイヤ、オーハ、カタカタ、つひには、カタカタと埒のあくもんだて、結局男子の方が戀にカタカタだ、アハ

八八八

スガコは忌いましさうな顔をし、眉のあたりに皺をよせながら、

「モシ玄眞様、どうぞ妾をお赦し下さいませ。その代りに外の事ならどんな御用でもいたします」

「ヤア、お前は第一靈國の天人の靈だから、卑しい炊事や掃除などは、靈に不相應だ。ただ拙僧の神業すなはち神生み、人生みの御用さへすれば、こけた筈を起すこともいらぬ。さてもさても幸運な生れつきだのう」

と玄眞坊はスガコに内兜を見透され、蜘蛛のごとく嫌はれてゐるのを、戀に晦んだ眼には盲滅法界、あやめも分ず、戀の黒雲に包まれ、得意になつて、うるさく口説きたててゐるのである。スガコは一つ困らしてやらうと思ひ、平氣の面を装ひながら、微笑を浮かべて、

「妾が最も敬愛する師の君様、貴方様は妾の危ふき生命をお助け下さいまして、天にも地にも代へ難き御高恩、萬劫末代、ミロクの代までも忘れはいたしません。その上妾の神籍までお調べ下さるとは、何たる勿體ない事でございませう。第一

靈國の天人の靈と仰せられましたが、もしや妾は柵機姫の命ではございませぬかい」

「ヤアさすがは偉い者だ。そなたのいふごとく全く柵機姫命のお前は靈だよ。星さまでいへば天の川を隔てた、右側の姫星様だ。そしてこの方は彦星だ」

「ヤ、それで分りました。柵機様は年に一度の逢瀬とやら申しますが、それは事實でございませうか」

「そらさうだ、開闢以來動かすべからざる天律によつて、萬劫末代きまつてゐる、本當に仲のよい夫婦だよ。天の川を隔てて、年が年中、互ひに面を見合せてゐらつしやる神様の、吾々は靈だからなア。だから私とお前は、朝から晩まで面を見合せ、仲よう暮さねばならぬ因縁があるのだ」

「なるほど、左様でございませぬ。しからば、妾と師の君様とは、天において夫婦の靈、年に一度の逢瀬とやら、仰せご尤も。妾も天地相應の理によりまして、七月七日の夜まで師の君様と夫婦になることは出来ませぬなア。まして貴方様は天帝の化身とやら、天帝からして神律をお紊しなさるやうなことはございませぬ

い。どうか、この谷川を天の川と見なし、川向かふへ妾をおいて下さらば、それこそ天地合體合せ鏡ぢやございませぬか」

と巧く言ひぬけてしまった。玄眞坊は……うつかり、口糸をたぐられ、取返しをつかぬことになつて了つた……と一時はギョツとしたが、なかなかの曲者、「ア

ハハハハ」と大口をあけ、無雑作に笑ひながら、

「オイ、スガコ姫、本當は棚機姫様ぢやない、モツトモツト奥の奥の立派な立派な神様だ」

「へーエ、そりや又どういふ神様でございますか」

「マアさうだなア、お前の靈は木花姫の大神様、そして俺の靈は岩長姫命だ。それだから、何うしてもかうしても夫婦にならなくちやなるまい。その玄眞坊は岩のごとく頑として威嚴の備はつた修験者。常磐堅磐に、さざれ石の巖となりて苔のむすまで、この世を守る下津岩根の大ミロク様も同様だ。そしてお前の靈は木花咲耶姫命様だから嬋娟窈窕たる花のごとき美人、いな花にも優る美人、柔よく剛を制するといつてな、お前は柔、俺は剛だ。しかし剛また柔を制すといふこと

あり。剛中柔あり、柔中剛あり、不離不即、密接固漆の關係があるのだから、何
といても天地から結ばれたる夫婦の閒柄だよ」

「ホホホホあのマア師の君様のヨ夕を仰有いますこと。岩長姫は御女體、木花姫
様も御女體、そして天の神様ではなくて、國津神様の御娘子、お二人様は姉妹の
閒柄ぢやございませぬか。愚昧な妾だと思召し、いいかげんに嘲弄しておいて下
さいませ。天を以て父となし、地を以て母となし、八百萬の神に御説法をなさる
貴き御身をもつて、月に七日の汚れある女の妾におからかひ遊ばすとは御冗談に
も程がございますよ、ホツホホホホ」

「イヤもう何から何まで、目から鼻、耳から口へつきぬけるばかりの大學出の才
媛だ。天地を父母とするこの玄眞坊も、そなたには一本參つたワイ、アツハハハ
ハ」

「ソレ御覽なさい。師の君様は妾に對し冗談を言つてゐらつしやつたのでせう。
神様に似合はず、お人が悪いぢやありませんか」

「イヤ、ナニナニ嘲弄どころか、冗談どころか、眞實眞の一生懸命だ。お前の爲

なら、一つよりない命をすてても構はないといふ覺悟だ。決して嘘言はつかない、冗談は言はない。萬一この方の言葉に詐りがあつたら、一つよりない首でもお前に與るワ」

「ホホホホホそんな首、もらつたつても、煙草入の根付けにもなるぢやなし、仕方がありません。髑髏にして枕にしたところで格好が悪くつて、不釣合なり、廢物利用の利かぬ首つ玉ですからね」

「コリヤ姫、何といふ、姫御前の優しい面にも似ず、無茶なことをいふのだ。お前は私のいふことを誤解してゐるな。よく考へてみよ。この玄眞坊は神様に仕へる時は即ち天帝の化身であり、神様の御用を休んだ時は一介の修験者だ。神の籍においては神の活動をなし、人の籍においては人の活動をなし、變現出沒自由自在、或時は天に蟠まる龍となり、或時は古池になく蛙となり、時ありては蠓蠓蚯蚓になる。これが即ち神の神たる所以だ。ここの道理をトツクリと考へて、いさぎよい返事をしてくれ、なあスガコ」

「アア左様でございますか、あなたは神となつたり、人となつたり、甚だしきは

蛙かはずとなつたり、蟾いもり、蚯蚓みみづとなつたり、何とマア器用きようなお方かたですと、しかしながら玄眞坊げんしんぼうさま様、私はますます貴方あなたが怖こはいらしくなつて参まゐりましたよ。そして夫婦ふうふうになれと仰おつしや有るやうですが、私も月に七日なぬかの障さはりある人間の肉體にくたい、神様かみさまと添そふわけにはゆかず、また修験者しゆげんじやは女をんなに接せつする時は死し後ご佛罰ぶつばつに仍よつて七萬有尋しちまんいうじんの大蛇だいじやとなり、かつ修験者しゆげんじやに犯をかされた女をんなは八萬地獄はちまんぢごくに墜おちるといふバラモンの教をしへ、かう考かんがへてみますれば、修験者しゆげんじやとしての貴方あなたの妻つまになることは絶對ぜつたいに厭いやでございませぬ。況いはんや人間にんげんと生うまれながら、蛙かはず、蟾いもり、蚯蚓みみづなどと夫婦約東ふうふうやくそくは到底たうていできませぬ。どうか悪あしからずこの理由りいうを御賢察ごけんさつ下くだされて、忌いまはしい夫婦關係ふうふうくわんけいなどには言及げんきふなさらないよう、お願ねがひ申まをします。その代り妾わらわははどこまでも、貴方様あなたさまを師しの君様きみさまと尊崇そんすうし、敬愛けいあいし、誠まことを盡つくしますから、貴方あなたも妾わらわはを愛あいして下くださいませ。そして結構こつこうな經文きやうもんを教をしへて下ください。お願ねがひ申まをします」

「マアマア今日けふはこれくらゐにしておかう、お前まへも神經しんけい昂奮かうふんしてゐるから、何を言いつても耳みみに入るまい。女をんなといふ者ものは一日いちにちに七度ななたびも心こころが變かはるといふから、水みづの出でばなに何をいつても駄目だめだ。また風向かぜむきのよい時にゆつくり話はなさうほどに。左様さやう

ならスガコ殿、ゆつくりお休みなさい」

といひながら、やや悄氣氣味になつて、岩の戸をあけ、吾が居間なる次の岩窟に歸り行くのであつた。後にスガコ姫はハツと吐息をつきながら、獨り言。

「アア情けないことになつたものだなア。かやうな所へ拐かされ、悪人輩の戀の犠牲に供せられむとするのか。一度は拒んでみても、かれ玄眞坊の燃ゆるがごとき戀の炎は容易に消すことは出来まい。何とか彼とか言つて一日送りに日を送り、助け人の來るまで時節を待つより仕方がない。アア父上はさぞ、妾の行方について御心配してござるだらう。何とマア不運な父娘だらう。悩み禍ひの浮世とは言ひながら、ジャンクの家にはこれほどまでに禍ひの見舞ふものか。テもさても、残酷な世の中だなア。ああ惟神靈幸倍坐世。天地の大神あはれみ玉へ救ひ玉へ」

(大正一三・一二・一六 舊一一・二〇 於祥雲閣 松村眞澄録)

第三篇 異燭獸虚

第一二章 戀の暗路〔一六九四〕

コマの村の里庄が二男サンダーは、許嫁のジャンクの娘スガコの行衛不明となりしより怏々として樂しまず、日夜煩悶苦惱の結果、神経病を起して一室に閉ぢ籠り、人に會ふのを嫌ふやうになつた。兩親はサンダーの憂鬱に沈める状態を見ていろいろに心を苦しめ、醫者よ、藥よ、修驗者よと騒ぎまはれども、サンダーは一切の醫藥を排し且つ修驗者の祈祷を嫌ひ、一室に潛んで時々自分の髪の毛を搔つたり耳を掻いたり、體中を自分の爪で搔きむしり、半狂亂のごとくになつてゐた。さうして時々怪しげな聲で述懐をのべてゐる。

「ジャンクの家いへに生うまれたる トルマン國こくに名なも高たかき

美人と聞こえしスガコさま
結ぶの神の引合せ

いつかは合うて妹と背の
赤き縁を結び昆布

苦勞するめの夫婦ぞと
楽しみ待つた甲斐もなく

世は味氣なき諸行無常
今に行衛も白雲の

何處の果にましますか
柳の眉毛涼しき目許

つんもりしたる鼻貌
紅の唇花の口

耳にかけたたる七寶や
時々光る夜光石

髪は烏の濡羽色
起居物腰しとやかに

棚機姫の大空ゆ
天降りましたる風情にて

この世に人と生れまし
吾が戀妻となり玉ふ

間近き空に果敢なくも
秋の木の葉と散り果てて

何處のいづこに在しますか
但しは猛き獸の

餌食とならせ玉ひしか
思へば思へば味氣なき

憂世に残されいつまでも
長らふことの恥づかしさ

吾等も男の子の端なれば 戀しき妻を奪はれて

いかでこのまま泣き止まむ 吾が玉の緒のある限り

雲を分けても探し出し 容貌美はしき姫の顔

再びまみえ村肝の 心の奥を語り合ひ

互ひに手に手を取り交し この世を廣く樂もしく

暮さむものと思ふより 頭は痛み胸つかへ

日月空に輝けど いても暗けき心地して

闇夜を渡る如くなり アア如何にせむ千秋の

怨みはつきじトルマンの 國に塞がる雲の空

空行く雁の心しあらば 戀しき姫の在所をば

尋ね求めて吾が戀ふる 心を傳へ呉れよかし

儘ならぬ世と言ひながら 神や佛に見放され

かかる憂目を味あふか 親の罪とは誰がいふ

誠の神は親々の 重き罪をば生みの子の

身魂にまでも厳かに 加へますべき道理なし
ああ惟神々々 天地の間に神まさば
吾が胸先の苦しさを いと速かに科戸邊の
風に拂はせ玉へかし 朝な夕なに姫の身の
いと安かれと眞心を 捧げて祈り奉る
捧げて祈り奉る

かく歌ひ了り、サンダーは力なげに氣晴らしのためとて郊外に出で往來の人を眺めてゐた。サンダーは國內きつての美男子で白面の青年、常に女装を好み、何人も相會ふ人はこれを男子と認むるものはなきほどの美貌を備へてゐた。彼は門口に立つて空行く雲をポカンとして眺めてゐると、そこへ錫杖をガチャンガチャンと音させながら現はれ來たる白髪異様の修驗者、彼が美貌を見て、その前に錫杖を止め、顔色を和らげながら、

「これこれお嬢さま、貴女は顔色が悪いやうだが、何か心配事がござるかな。若

い娘に、よくあるラブといふ病ではなからうか。それならばオーラ山に現はれ玉ふ救世主の許に参拜し御祈願を籠めなされ。必ず靈験がありますよ。拙僧はオーラ山の活神玄眞坊様の高弟でシーゴー坊と申すもの、人助けのために各地を遍歴いたす修験者でござる。いかなる煩悶苦惱も、オーラ山の玄眞坊さまに伺へば忽ち煙散霧消し、平和と幸福の太陽が、貴女の心天に輝くであらう。歸妙頂禮神道加持謹上再拜

と嚴かに呪文を唱へる。サンダーは今まで修験者の祈禱を兩親から勧められ、また出入りの者からも勧められてゐたが、チツとも氣が向かなかつた。しかるに今日目のあたり、威儀嚴然たる修験者に會ひ、どこともなく頼もしき言葉に釣り込まれ、少しく心が動き出した。

「もし、修験者様、私はあるにあらぬ煩悶苦惱の淵に沈んでをります。もはや此世が嫌になり、一層天國の旅をなさむかと只今思案にくれてゐたところでござります。煩悶苦惱も玄眞坊といふ活神様に願へばお助け下さるでせうか」

シーゴー「あなたは、まだお聞きなさらぬか。御靈験の顯著なること日月の如く、オーラ山に向かつて参拜する善男善女は蟻の甘みに集ふごとく、明六つより午後の七つ時までは引もきらぬ群集、各自神徳を頂いて歸りますよ。中には妻を失ひ、娘を失ひいろいろ心配してをられた方が、玄眞坊の天眼力によつて、所在分り歡喜の涙に浴してゐられる方も澤山ござります。まづ一度お詣りなさいませ」

「あらたかな神様がオーラ山に現はれたといふ事はチヨコチヨコ承つてゐますが、偽救主、偽キリストが雨後の筍のごとく現はれる時節ですから、又その種類と存じ、僕どもの忠告をも聞かず今まで疎んじてをりましたが、あなたのお話を聞いてどうやら心が動き出してきました。しからば近い中、気分のない日を考へて参拜いたすでござりませう」

「や、それは結構です、きつと後利益がありますよ。一日も早くお詣りなさいませ」

と言ひながら、素知らぬ顔して又もや錫杖をガチヤつかせながら遠く彼方へ進み行く。

サンダーは暗夜に一縷の光明を得たるごとき心地して、その日の夕暮よりソツ
と吾が家を抜け出でオーラ山の大杉の星の光を目あてとし、道々歌を歌ひながら
夜風に吹かれつつトボトボと進み行くのであつた。

天津御空は澄み渡り 草より出でし日の神は

又もや草に入りまして あとに輝く望の月

星の光は疎にて 氣は澄み渡る大野原

吹き来る風に百草の そよぎの音も騒がしく

犬の泣き聲かしましく 彼方此方の村々ゆ

聞こえ來たるぞ恐ろしき スガコの姫の所在をば

探ねむものと足乳根の 父と母との目を忍び

夜に紛れて一人旅 淋しき野路も誰故ぞ

生命に代へて愛したる スガコの君があればこそ

スガコの姫よスガコさま お前は何處の空にゐる

無言靈話があるならば　ここに居ますと一言の

音信吾に送りませ　吾が魂は夜な夜なに

汝が所在を探ねむと　中有に迷へど限りなき

此地の上の彌廣さ　何の手掛りなくばかり

涙に袖をしぼりつつ　夜は淋しき一人寝の

枕に通ふ蟲の音も　汝が命の囁きと

思ひ迷ふぞ果敢なけれ　此世に神の在ますなら

戀し焦がれし二人仲　結ぶの神の引合せ

必ず會はせ給ふとは　思ひ慰めあるなれど

心も暗き吾が思ひ　汲ませ給へよスガコ姫

呼べど叫べど荒風の　中を遮る悲しさに

吾が眞心も汝が耳に　直に入らぬが口惜しや

夢になりとも會はま欲しと　思ひ寝れば夢に入り

戀しき汝が訪ひの　聲かと思れば雨の音

風の野原を渡る聲

汝を松蟲鈴蟲や

實にもはかなき蓑蟲の

日に日に細る霜の下

實にも淋しき吾が心根を

汲みとりませよスガコ姫

汝に會はむと朝夕に

思ふ戀路の募り來て

今は全く病氣の

ままならぬ身となりにけり

さはさりながら汝思ふ

戀の力の不思議なる

病軀を起して野路山路

區別白露分けて行く

オーラの山の活神の

稜威を受けて妹と背の

汝に會はむが楽しみに

冷たき夜風を浴びながら

露の芝草踏みしめて

心の空の明りをば

杖や力と頼みつつ

吾はイソイソ上り行く

吾はイソイソ上り行く

サンダーはトボトボと夜露滴る高原を、オーラ山目あてに進みしが、途中にお

いてガラリと夜を明してしまつた。身體綿のごとく疲れはて路傍の方形の岩に腰をかけ、息を休め遂には眠りについた。音に名高き美青年、色はあくまで白く、玉の肌、衣を通して光るがごとく、眉涼しうして鼻筋通り、齒は象牙細工のごとく白くして光澤あり、黒目勝ちの露を帯びたる目、誰が目にも女とより見えなかつた。大畫伯の精根を凝らして成れる繪の中より抜け出て來たごとき美人、四邊に芳香薰じ、音樂聞こゆるがごとき思ひに満たされる。かかる美男子が女装したまま、頬杖をついて路傍の岩に腰打ちかけ眠つてゐる其の風情は海棠の雨に萎るごとく、梅花の旭に匂へるがごとく、一見人をして恍惚たらしめ、心魂をして宙に飛ばしむるごとき光景である。

そこへシーゴアの部下なる、シヨール、コリ等は十七八名の手下を従へ、髯に露を浮かせ、尻切れ草鞋をパスつかせながら此の場に現はれ來たり、サンダーの眠れる姿を見て夢か現か將また天女の降臨か。魔か女かとアツケにとられ、少時佇んでゐた。

シヨールはしきりに首を振りながら、左右の部下を顧み、

「何と、綺麗なものだなア。オイ、まともから拜むと、目がマクマクするぢやないか。あれは果して人間だらうか、もし人間とすればこの間のやうに、何とか一芝居をして玄眞坊様の岩窟に引張り込まうぢやないか。さうすりやキツと御褒美に、また甘い酒でもふれまつてもらうと、ままだよ。なあコリ、貴様どう考へるか」

コリ「ウン全くだ」

「なにが全くだい。全くでは意味が分らぬぢやないか」

「ウンウン何しろ全くだ。全く御免を蒙りたいわい。彼奴ア、キツと化衆だ。此世の中にあんな美人があらう筈がない、相手になるな。この間の美人だつて神徳高き玄眞坊様が何程口説いてもたらししても、お挺にあはないのだもの。俺達のやうな小盗兒連は、まづ相手にならぬ方がましだよ。いらはぬ神に崇りなした。何時、尻尾を出すか知れない、サア逃げる逃げる」

とがやがや立ち騒ぐ。この聲にサンダーはフツと目を覺まし、四邊を見れば森の鳥はカアカアと清く鳴きわたり、小鳥はチュンチュン ジャンジャンと鼓膜を揺

るがせる。サンダーはシヨール、コリの一隊に向かひ徐に口を開いて、

「もし、そこに居らるる方々、物をお尋ね致しますがオーラ山の修験者、玄眞坊のお住居は何處でございますか。遠方から大杉を見當に参りましたが、麓にかかつてより目標を見失ひ、行手に悩んでをります。どうか御案内下さいませまいか」

「シヨールはこの聲にやつと安心し、
「ヤツパリ人間だ」

と小聲に囁きながら、

「ハイ、私はこの邊をうろついてゐる泥棒でございますが、玄眞坊様の處へ案内せよと仰有いますけど、私のやうな悪人は到底お側へも寄れませぬ。この間も玄眞坊に鐵拳の雨にあひ、吾々一同はコリコリ致してをります。のうコリ、痛かつたな。又もや、こんな處にうろついて居るところを玄眞坊様に見付けられたならば、「これ貴様はあれほど戒めてゐるのに、シヨールコリもせず小盗兒をやつてるか」と、いかいお目玉を頂いては鞆丸が縮み上がります。この道をスツと一直線に三十町ばかりお上がりになれば、そこが玄眞坊様のお館です。分らな、暫く

待つて下さい。もう半時もすれば澤山な参詣者がここを通りますよ。さうすれば一緒に上がりになれば御案内もいりますまい」

サンダー「泥棒が泥棒と名乗るのは今が聞き初めだ。そんな正直なことで泥棒渡世が出来るのか」

シヨール「ハイ、あなたに對してのみ、こんな正直な事を申したのです。隠したつて貴下のその眼孔には、直ぐ看破されますからな。大方お嬢さまはシーゴ様さまの修験者に聞いてお詣りになつたのでせう」

「アアさうです。修験者が私の門前を通り、あらたかな神様があるから詣れと言つて下さつたので、とるものも取り敢へず夜の道を急いで、やつて來たのですよ」

「男のやうな言葉づかひもあり、女のやうな言葉づかひもあり、私としては、お前さまの正體は分りませぬが、あなたはそんな事言つて吾々の行動を調べておらつしやるのでせう。大親分のヨリコ姫女帝様でせうがな」

サンダーは……女装をしてゐることなり、ヤツパリ彼奴等は女と見てをる、今ヨリコ姫女帝と言つたのは何か山賊の親分の名かも知れない。ああいふ木端盗人

は親分の顔を見ることの出来ないものだ。キツと数千の團體を抱へてゐる大親分だらう。此奴を一つ計略にかけ、疲れた足を歩むのを助かるため昇がして上つて見やうかな……と俄かに大膽な心を起しワザとおチヨボ口をしながら、
「オホホホ、お前は妾の乾兒と見えるな、お前の察し通りヨリコ姫女帝だよ。玄眞坊さまのお側へ案内してくれや。妾の體を大切に、荒男がよつてこの坂道を昇き上げるのだよ。サア御褒美にこれを與げよう」
と懐より小判をとり出し、ばらばらと大地に投げつけた、小盗兒連は先を争うて拾ひ懐に捻ぢ込み、サンダーを大親分と思ひ、お手車に乗せて、きついきつい赤土の滑る坂道を汗をタラタラ流しながら大杉の下、玄眞坊が所在へと送り行く。

(大正一三・一二・一六 舊一一・二〇 於祥雲閣 北村隆光録)

第一三章 戀の懸嘴(一六九五)

サンダーは、泥棒の小頭シヨール、コリなどの連中に手車に乗せられ、約一里ばかりの坂道を送られて大杉の麓の玄眞坊の館の前についた。玄眞坊はコリ、シヨールに目配せすれば、態とに驚いたやうな顔をして、屋根から「バラス」をぶちあげたやうにバラバラと坂道を倒けつ轉びつ逃げて往く。玄眞坊は其所に立つてゐるサンダーの美貌に見惚れながら態と素知らぬ顔をして、
「アハハハハ、小泥棒奴、この玄眞坊が法力に恐れ、睨みに會うて驚愕し蜘蛛の子を散らすが如くに逃げよつた、アハハハハ。てもさても困つた奴どもだなア。や、そこにござるお女中、そなたは彼等のために拐かされ此所まで擔がれて來たやうだが、まづまづ結構、玄眞坊の威力と法力により小泥棒どもは其方に暴力を加ふることもせず逃げ去つたのは、全く吾が法力のいたすところ、サアサア奥へお入りなさい」
サンダー「初めてお目にかかります。私はサンダーと申すこの村の里庄の娘でございますが、玄眞坊様とやらいふ活神様が當山に天降りたまひ、あらゆる萬民の困難をお救ひ下さると聞き、父母の目を忍び信仰のため夜の道をトボトボ参りま

した所、何と申しても病氣に難む身の上、足の運びも思ひにまかせず、當山の麓
において夜が明けました。踏も習はぬ孱弱き女の足竝み、グツタリと疲れはて、
進退谷まつて路傍の石の上に息を休め、うつらうつらと居眠るをりしも、盗人の
群だといつて現はれた十五六人の男、私に向かつていふやう、「そなたは吾々の
親分ヨリコ姫の女帝様ぢやないか」とかう申しましたので、何事か分りませぬが
つい諾づいたところ、私を大勢の者が昇ついで此處まで連れて来て下さつたので
すよ、どうか玄眞坊様に一目會はして下さいませぬか」

玄眞「貴女のお尋ねなさる玄眞坊と申すは拙僧でござる。女の孱弱き身をもつて、
ようまあ一人御參詣が出来ました、さぞお疲れでせう。どうか私の居間にゆつく
りと、おくつろぎなさいませ」

「ハア、貴方様が噂に高き活神様、あの、玄眞坊様でございましたか。えらい失
禮をいたしました」

「アハハハハ。やがて澤山の老若男女が參拜する時刻だから、私もこれから忙が
しいが、それまでに御用の趣きを聞かう。まづ私の居間にお出でなさい」

「ハイ有難うございます」

と、サンダーは立派な岩窟の中に姿を没した。室内には經机が一脚きちんと据えられ二三冊の金で縁を取った經書が行儀よく飾られてある。一方の隅には拂子や獨鈷、金椀などの佛具が飾つてあつた。玄眞坊は一種の色情狂である。三年間添うて来たヨリコ姫には見放され、その情けによつて僅かに二の弟子となり、いささか不平な月日を送つてゐた。そこで絶世の美人スガコを甘く誤魔化し、一室に閉じ込めて、吾が欲望を達せむと、暇あるごとに口説立つれど、挺でも棒でも動かばこそ、何時も肱鐵や後足砲の亂射を受け、意氣消沈してゐた。その矢先ヨリコ姫よりもスガコよりも幾層倍増した、天稟の美貌を有するサンダーが訪ねて来たので、これ幸ひ天の與へと雀躍し、この度こそはあらゆる祕術を盡して戦ひ、天晴れ勝利の月桂冠を得むものと固唾を呑んで力みかへり、わざとやさしき聲にて、

「そなたはサンダーとか言つたね。當山へ女の身として唯一人物騷な夜の路を參詣して来るについては何か深い仔細があるであらう。三千世界の一切を救ふ私は

救世主だから、遠慮會釋なく願ひ事はお話しなさい。如何なる事も貴女の願ひは聞き届けてあげるから」

サンダー「ハイ、仁慈の籠つたそのお言葉有難う存じます。私には一人の妹がございまして、その妹が行方不明となりましたので、いろいろと手を廻し下僕共や村人に搜索してもらひましたが、何うしても所在が分りませぬ。承りますれば、貴方は天からお下り遊ばし、萬民をお助け下さるとのこと、それゆゑ妹の所在もお尋ね申せば教へて下さると思ひ、失禮ですけれど、お尋ねに参つた次第でございます」

と、どこまでも女になり濟ましてゐる。さうして……この活神が自分の男だといふことを看破せないやうなら山子坊子だ、賣僧だ。これやどこまでも一つ、女に化けすましてをらねばならぬ……と、思案をしてゐたのである。玄眞坊は細い【まぶい】やうな目をしてサンダーの顔をチロリチロリと見るその氣分の悪さ。されどサンダーは……もしや吾が戀するスガコ姫がこの坊主等のために計られて、どこかに隠されてゐるのではあるまいか……といふ氣が、咄嗟の中に起つたので、

あくまで女でやり通さうと考へた。玄眞坊はまた、サンダーを天成の女と思ひ込み、夢にも男などとは氣付かなかつたのである。

「あの修験者様、私は妹に會ひたさにお願ひに參つたのでございますが、どうでせう、遇はしていただくことは出来ますまいか。私の妹の名はスガコと申しまして年は十八、この妹に遇はしてさへ頂けば、私はどんな御用でも否みませぬ」

玄眞坊は、スガコがこの女の妹だと聞いて、胸に動悸を打たせ些しは驚いたが、元來の曲者、轟く胸をグツと押へ素知らぬ顔して、

「アアお前の妹はスガコといふのかな。ウン會はしてやらう。しかしながら先づ妹に會はずについて、私にも交換的にお前に相談がある。それを聞いてさへ呉れば法力をもつてスガコ姫を此處に引き寄せ、姉妹の對面をさして上げませう」

サンダーは、いよいよ此奴賣僧と見て取つたので、ますます空呆け、師の君様、どんな御用でございますか。私の身に叶ふ事ならば、何なりと仰せつけ下さいませ」

玄眞「ヨシヨシ、そんなら私の方から提案を持ち出さう。外でもない、拙僧は天

の命を受け、天下救済のためにこの聖地に降つた者だ。それについては、最奥第一靈國の月の大神様より、今朝神勅が下り、今より半時の後汝に天成の美人を與ふる。その美人こそ最奥第一天國の姫神、玉野姫様の御化身だ。その方と時を移さず夫婦となり、神業に参加せよとの思召しでござつた。そなたも知らるる通り、拙僧は修験者の身の上、女房を持つとは、實に古來の舊慣を破るに似たれども、日進月歩、百度維新の今の世の中、神界の規則も變つたと見え、まづ拙僧より天下に模範を示すべく、靈魂の合うた夫婦を命ぜられたのです。お前さまが俄かに此處へ參つて來たくなつたのも、お前さまに守護してござる、玉野姫さまの精靈が導いてござつたのですよ。お前さまも若い身をもつて、年の違ふ拙僧と夫婦となる事は、さぞ驚くでせう。しかしながら天の命は拒むべからず。サンダーさま、分りましたかな」

サンダーはあまりの可笑しさに、吹き出すばかり思はれるのをグツとこらへ、素知らぬ顔をして笑を含みながら、

「何事の御用かと思ひましたら思ひもかけぬ神縁の御説明、妾のごとき汚れた肉

體がどうして、尊き御身の妻となる事が出来ませう。そんな御冗談はやめて下さい、どうしても妾は信ずる事は出来ませぬ」

玄眞坊はここぞ一生懸命と、全身の智勇を推倒し熱血をそそいで、身體を前に乗りだし、サンダーの手をグツと握つて二つ三つ揺すり、

「これこれお嬢さま、御不思議は尤もながら、決して神に偽りはありませぬよ。

あなたは妹にも會ひ、また神界における誠の夫に遇ふ事が出来るのですから、こんな幸福はありますまい。あなたが天の命に従つて、私の妻にお成りなさるのなら屹度神様はお妹に遇はして下さいさらうし、また貴女が神様の思召しに背き、拙僧が妻となるのを否まるに於ては、神様もお妹御に會はしては下さいませぬ。

サア、ここが思案の仕處だ、よい返事をするがよいぞや」

「不束なる、纖弱き経験なき妾に對し、神様か何か知りませぬが、有難い思召しをおかけ下さいますのは冥加にあまつて有難う存じます。しかしながら妾は妹に先に會はしてもらはねば、何と仰有つても御命令に従ふ事は出来ませぬ。信仰の浅き吾々、まだ貴方様に對して神様の御化身とも信ずる事が出来ませぬ。それゆ

「絶対的服従も出来ないのをございます。しかしながら今逢つてお目にかかつたばかりの私、不思議の御神徳も見せてもらはないのですから、疑つて濟みませぬが、どうかそこは大目に見て下さいませ」

「今まで神のかの字も知らなかつたお前さまだもの、早速に信用できないのも無理とは言はぬ。しかしながら、ここまで大勢の人が御神徳を頂き、随喜渴仰してゐるのだから、そこはそれ、神か神でないか賢明なる其女、推察したがよからうぞ」

「どうしてもスガコ姫に會はしては下さいませぬか」

「天の命を聞かない其女には會はず事は絶対に出来ない。妹に會ひたくば神の命を奉じ、拙僧と夫婦になりますか。拙僧だとて、年が寄つてから女房なんか持つのは迷惑だが、天の命には背き難く、國家萬民のため、今まで汚した事のない清淨無垢のこの體を犠牲に供するのだ。未來のキリストとやらも十字架を背おつて萬民を救つたぢやないか、そなたも世のために犠牲になる誠心はないか。それでは最奥第一の天國玉野姫の御靈とは申されませぬぞ」

「妾は玉野姫の御霊であらうが、狸姫の御霊であらうが、靈界のことは些しも意に介しませぬ。ただただ貴方様の御神徳によつて、妹に遇はして下さいませぬ、それで満足でございます。どうしても會はして下さらぬなら、是非がありませぬ、仰せに従つて貴方の妻になりませう。しかしながら妾は大切な生の母に別れてから僅かに六ヶ月、忌中の身でございますから、一年結婚式をお延ばし下さい。それを許し下さればこの身體を神様に差し上げます。いな貴方の御自由に任します」

「ア早速の御承知、満足々々。しかしサンダー姫様、いや女房殿、さう固苦しく一年も待たないでも好いぢやないか。天の神様のお許しだもの、世は禁厭といつて形さへすればよいのだ。もう六ヶ月も暮れたのだから、そんなにせなくても好からう。この夫に任しておいたらよろしからう。なア、サンダー姫」と、聲の色までかへて背を撫でるその嫌らしさ。

「もし、玄眞坊様、あなたの妻になる事を約しました以上は、早晚結婚を致さねばなりません。どうか一時も早く妹に一目會はして下さいませぬか、きつと最

愛の妻の願ひ事、聞いて下さらないやうな夫ではごきますまいなア」

「ウム、會はしてやりたいは山々なれど、實のところはスガコ姫は、ちよつと俺に關係があるのだ。それだから第一夫人と、第二夫人が目をむき合ひ胸倉の掴み合ひをせられては、俺も一寸困るから會はさないと云ふのだ。會はしても、よもや嫉妬は致すまいな。嫉妬さへ無くば何時でも會はしてやらう」

「ハイ、有難うございます。何といつても元が姉妹ですもの、何、嫉妬なんかしますものか。たとへ妹が氣儘な事を申しまして、私が仲裁をいたし貴方様の御意に添ふやう、取計らつて上げますわ」

「エへへへ、何でもお前は姉の權力をもつて、妹を説き付けてくれると言ふのか、それは結構だ。實のところは吾が女房とはいふものの、スガコは、辻つたの、轉んだのというて、まだ吾が要求に應ぜないのだ。しかし其方はスガコに比ぶれば幾層倍の美人だ、其方の顔を見てから、スガコに對する戀着心もどこかへ往つてしまつたやうだ」

「可哀さうに、そんな水臭い事を仰せられますと妹が泣きますよ。ほんに水臭い

旦那様だこと。妾だつてまた妾に勝る美人が見つかった時は、キツと又さう仰有るでせう。そんなことを思うと憎らしくなつて來ましたわ」

と、玄眞坊の鼻を思ふさま捻ぢ上げた。玄眞坊は現になつてゐるのだから、眼から涙が出るところまで鼻を捻ぢ上げられながら、サンダーが惚れてゐるのだと思ひ垂涎と涙を一緒に垂らし、

「オイ、サンダー姫、何をするのだ。ほんに痛い目に會はずぢやないか」

「それやさうですとも、可愛さ剩つて憎さが百倍ですよ。早く妹に會ひたいものだ。妹に會つて思ふ存分鼻が抓つて見たいわ」

「スガコだつて、さう鼻を抓んでは可哀さうだよ。どうか可愛がつてやつて呉れ。さうして恠氣をしないやうにのう」

「なに、あなた恠氣をしますものか。一方は可愛い可愛い夫、一方は可愛い可愛い妹ですもの、その可愛い妹を慰めて下さる夫はなほさら可愛いなり、また可愛い夫を慰めてくれる妹はなほなほ可愛いぢやありませんか」

「なるほど貴女は開けたものだ。天晴れの女丈夫だ。愛の三角關係と言へば三方

に角かどの立たつて居ゐるものだが、お前まへのやうに出でてくれれば三角さんかく關係くわんけいも圓ゑん滿まん具ぐ足そく、望もち
月づきのやうな立りつ派ぱな家庭かていが營いまなれるであらう。ヤ、目め出で度たい目め出で度たい
杵きね一本いっぽんに臼うす二に挺ちやう、これさへあれや立りつ派ぱな餅もちが搗つけませう。

このよをば吾わが世よぞと思おもふ望もち月づきの
虧かけたる事ことのなしと思おもへば

とかいふ歌うたの通とほり、圓ゑん滿まんなホームを作つくつて樂たのしみませうよ。アア早はやく妹いもうとに會あひた
いものだなアア

(大正一三・一二・一六 舊一一・二〇 於祥雲閣 加藤明子録)

第一四章 相生松風あひおひまつかぜ (一六九六)

サンダー、スガコの兩人は玄眞坊の要求を何とか彼とか言つて、ハツキリと承諾せぬので、玄眞坊もやや自暴自棄氣味になり、モウこの上は食責めに會はして、往生させ吾が意志に従はしめむと嚴重な錠前をおろし、兩人を取り込めておいた。二人は相思の閒柄とて、かかる岩窟に食物も與へられず閉ぢ込められても餘り苦しいとは思はず、戀しき人に會はれたのをば唯一の樂しみとして、いろいろの話を交換してゐた。

スガコ「サンダーさま、あなたは何うしてまたかやうな所へ捕はれてお出でになりましたの」

サンダー「お前の行方が分らなくなつたものだから、それが心配になり、一時は憂鬱症に陥り、自分も今度は到底命はないだらうと思つたくらゐ苦しんだのです。醫者はたうてい駄目だといふなり、兩親は心配するなり、よくよく其方とは縁のないものだと言ひながら、どうしても思ひ切れぬ戀の暗に包まれて、日夜煩悶苦惱をつづけてをりました。しかるにオーラ山の修験者だとかいつて、白髪異様の老人が吾が門前を通り、いろいろの效能書を竝べ立てたものだから、一時は怪し

みもしたが、なにぶん戀に心を奪はれた弱味で、神徳によつて其方の所在を知らして貰はむと兩親の目を忍び、夜の路をやつて來たところ、玄眞坊の使つてゐる手下の小盗人どもとみえ、自分を巧く擔いで、この岩窟に連れて來たのですよ。しかし今日は戀しい其方に會つて、何とも知れぬ喜びです。もはや此處で私は死んでも満足です」

と言ひながら涙を袖に拭ふ。

スガコ「妾のやうな者でも、ようそこまで思つて下さいました。有難うございませ。あなたはトルマン國切つての美男子、兩親の許嫁とは言ひながら、到底妾のごとき者を、まさかの時には相手にしては下さるまいと思ひまして、平素から諦めてをりました。それだけ貴郎に篤いお恵みがあるとは夢にも知らず、時々貴郎をお怨み申して暮して來ました妾の罪、どうぞお赦し下さいませ」

サンダー「ともかく相思の男女が、かやうな所で會はうとは、實に奇縁です。玄眞坊のいつたのには、兩人とも自分のいふことを聞かねば食責めにするとのこと、たとへ食責めに會つても、戀しい其方に會つた以上は、互ひに手を取り、眞の神

のまします天國てんごくの旅行りょかうを神かみに祈いのりませう。最早もはやそれより吾々われわれは開ひらくべき道みちはありませぬからなア」

「ご尤もつともでございます。三途せうづの川かはも死出しでの山やまも、天あめの八衢やちまたも、あなたと一緒にいっしょに参まゐりますならば、何なんの苦くるしみもございませぬ。どうか一時いっときも早はやく此世このよを去さりたいものでございます。アア一人ひとりの父上ちちうへを後あとに遺のこし先立さきだちまする不孝ふかうの罪つみ、どうぞ赦ゆるして下くださいませ」

と死ぬし覺悟かくごを決きめたスガコはホロリと涙なみだを膝ひざの上うへに落おとした。

「かうなれば、互たがひに覺悟かくごをいたしませう。此世このよの別わかれに臨のぞみ、歌うたでも詠よんで潔いさぎよく死期しきを待まちませう」

「ハイ、現世げんせの名残なごりに妾わらはも歌うたを詠よまして頂いたきませう、まづ貴郎あなたからお聞きかせ下くださいませ」

サンダー「天てんは蒼々そうそうとして高たかし
地ちは漠々ばくばくとして限かぎりなく廣ひろし

アア吾は

天地の御子として

明暗ゆき交ふ

うつし世の人と生れ來ぬ

幸か不幸か

里庄の家の子となり

年若くして未だ世情に通ぜず

艱苦の味はひを知らず

漸く十八才の春を迎へて

戀海の浪に漂ひ

激浪怒濤に呑まれ

舟將に覆へらむとす

アア如何にせむ

あが戀ふる

玉たまの舟ふねの

渦うづ巻まく波なみに翻ほん弄ろうされて

今いまは何いづ處くの空そらに彷徨さまよふか

探さぐり當あてむと朝あさ夕ゆふに

天てんに訴うへ地ちに哭こし

心こころは千ち々ぢにかき亂みだれて

身しん體たい日ひに夜よに細ほそりゆく

戀こひに惱なやみし心こころの苦くるしさ

いかに艱かん苦くの世よとはいへ

吾わが身みにふりかかりし

戀こひのなやみの

激はげしきには及およばむや

アア如い何かにせむ

なれが命みことの行ゆく方へをと

空そら行ゆく雲くもに心こころを移うつし

あるひは夕ゆふべの蟲むしの音ねに

汝なれが面影おもかげを浮うかび出いでては

夜よも夜よるならず晝ひるも晝ひるならず

常夜とこよの暗やみに迷まよふが如ごとし

むしろ運うんを天てんに任まかし

味氣あぢきなき浮世うきよを去さつて

天國てんごくに昇のぼり

永久とこしへの生命いのちを保たもたむやと

靜しづかに門かどを立出たちいでて

野邊のべの景色けしきを眺ながむるをりしも

現あらはれ來きたる

白髮はくはつ異樣いやうの修驗しゆげん者じゃ

われに向むかつて宣のらすやう

オーラの山の聖場にやま せいぢやう

神力無雙の救世主しんりきむさう きうせいしゆ

現はれ玉ふと教へしゆあら たま をし

汝を思ふの餘りなれ おも あま

もしやと一縷の望みを起しいちる のぞ おこ

病にやつれし身をもやまひ み

戀の力に支へつつこひ ちから ささ

漸く登り岩窟にやつや のほ いはやど

つくづく思案のをりもあれしあん

心汚き玄眞坊がこころきたな げんしんぼう

戀の擒となり果ててこひ とりい は

身動きならぬ破目となりみうごい はめ

言葉を左右に托しつつことば さいう たく

一日一日と今日までもひとひひとひ けふ

送り來たりし果敢なさよ

ああ惟神々々

梵天帝釋自在天

何とぞ吾らが窮状を

憐れみ玉ひて逸早く

二人の身をば明るみに

救はせ玉へと

願ぎまつる。

うつし世をあとに見すてて久方の

天津御國に吾は進まむ

大神の御許しうけてわれは今

スガコと共に天國に行かむ

村肝むらぎもの心こころの合あひし二人ふたり連れ

うべなひ玉たまはむ天津御神あまつみかみも

醜神しこがみの魔手ましゆを遁のがれて天津國あまつくに

登のぼり行く身みぞ樂たのしかるらむ

われ行ゆかばさぞ醜神しこがみは驚おどろきて

足あがきなすらむ岩窟いはやの中なかに

玉たまの緒をの命いのちの絲いとも刻こく々に

切きれなむとす神國みくに待またるる

スガコは聲低こゑびくに歌うたふ。

天津空あまつそらよりいと高たかき 神かみの御惠みめぐみ父ちちの恩おん

海うみより深ふかき母ははの恩おん 父ちちと母ははとははぐくまれ

二八にはちの春はるの今日けふまでも 月つきよ花はなよと育そだてられ

足らはぬ事のなきまでも
此世の幸を身に受けて

月より清き御姿の
サンダーの君を背となして

タライの村の花となり
月ともなりて世の人に

羨まれつつ天國の
樂しき御代を送らむと

思ひゐたるも水の泡
醜の嵐に吹かれつつ

身は常暗の巖の中
悪神どもに囚はれて

朝な夕なに厭らしき
醜の司の戀の鞭

受くるたびごと身體も
吾が魂も千萬に

碎くるばかりの苦しきよ
如何なる宿世の罪業が

吾が身にめぐり來たりしか
仰いで天に叫べども

天は答へず地に伏して
歎けど地には聲もなし

オーラの山の山嵐
時じく吹けど吾が魂は

父の御側に通路の
ひたと斷たれし惱ましき

せめては父の御夢に
吾が魂の苦しみを

告げさせ玉へと祈れども 祈りし甲斐やあら悲し

朝夕幾つ重ねつつ 待てど暮せど音沙汰も

只泣く聲は猿のみ 木魂に響く鳥の聲

アア是非もなや是非もなや 一層此世に暇乞ひ

靈となりて父上や 戀しき汝の御側に

通はむものと思ふをり 不思議や戀しき汝の聲

巖の戸口に耳を寄せ 様子洩れなく聞く折りもあれ

夢か現か幻か 戀しき人の聲すなり

天をば拜し地を拜し 喜ぶ間もなく岩の戸を

開いて入り来る玄眞坊 戀しき人の手を取つて

これらの岩窟に投げ込みつ 憎々しげに睨みつけ

立去りしこそ忌はしき アアさり乍らさり乍ら

こがれ慕ひし背の君の 氣高き姿目のあたり

拜みしことの嬉しさよ たとへ飢死なすとても

高天原たかあまはらに昇のぼりなば

神かみの御國みくにの御倉おんくらに

與あたへ給たまはむ嚴いづの神かみ

慈愛じあいに充みつる顔容かんばんせを

拜をがみまつりし心地ここちする

たとへ如何いかなる事ことあるも

後のちの命いのちを玉たまの緒をの

いづくの空そらに至いたるとも

榮さかえ久ひさしき青松あをまつば葉

常磐ときはの契ちぎりいま今いまよりも

われは汝なれをば力ちからとし

幽界かくりよとも共いに活いくるなり

これを除のぞきて生命せいめいの

憐あはれみたまへ天津神あまつかみ

靈みたまの糧かては澤々さはさはに

蓄たくはへありて汝なとあれに

瑞みづの御靈みたまの大神おほかみの

今目いまのあたりたしたしに

サンダーの君きみよ背せの君きみよ

たがひに心こころを結むすびつけ

縁えにしの絲いとにしかと結むすび

二人ふたり離はなれぬ常磐木ときはぎの

おちて枯かれても二人ふたり連れ

誓ちかはせ給たまへ背せの御君みきみ

生命いのちとなして現世うつしよや

汝なれをば戀こふる吾わが心こころ

泉いづみの何處いづこにあるものぞ

愛あいさせ給たまへ吾あが背せの君きみ

ああ惟神々々かむながらかむながら

御神に任せ奉る。みかみまかたてまつ

戀雲の漸くはれて大空にこひぐもやうや おほぞら

輝きわたるみづの月影かがや つきかげ

醜神の醜の館に囚はれてしこがみ しこ やかた とら

心は清き御空に遊ぶこころ きよ みそら あそ

身體は岩窟の中にまかるともからだま いはや なか

靈は廣く宇宙に遊ぶみたま ひろ うちう あそ

オーラ山曲の砦に忍び入りやままが とりで しの い

戀しき人に只に會ふ哉こひひと ひと ひた あ かな

背の君と天國に行くは嬉しけれどせ きみ みくに ゆ うれ

心は残る父の身の上こころのこ ちちのみ うえ

父なくば妾も心痛めまじちち わらは こころいた

戀こひの勝利しょうりを得えたる身みなれば
現世うつしよはよし添そへずとも天津國あまつくに
神かみの御前みまへに永久とほに榮さかえむ〇

サンダー 天津國あまつくに昇のぼり得えずして八衢やちまたに

よし彷徨さまよふも二人ふたり樂たのしき

根ねの國くにによしおつるとも吾あと汝なれと

二人ふたりなりせば樂たのしかるらむ

八衢やちまたの關所せきしよを無事ぶじに通とほりぬけ

戀こひの花はなさく神國みくにに至いたらむ

月花つきはなに譬たとふべらなる吾あと汝なれは

天八衢あめやちまたの榮さかえなるらむ〇

スガココ 八衢やちまたによし迷ふまよとも何かなにあらむ

戀こひしき汝なれを光ひかりと思おもへば

常暗とこやみの根底ねそこの國くにに落おつるとも

月つきの光ひかりの汝なれとしあらば

月影つきかげを仰あふぎみるたび思おもふかな

いつも清きよけき君きみの姿すがたを

サンダーコ 春夏はるなつの野のに咲さく花はなを眺ながめては

君きみの御姿みすがた思おもひうかべつ

山百合やまゆりの花はなに微風びふうの當あたるさま

汝ながスタイルによくも似にしかな

世よの中のなかすべての事ことを打うち忘れわす

只君ただきみのみに心注こころそそぎぬ

スガコ「たらちねの親と親との許嫁

なりとし聞けどいとも恥づかし

仰ぎ見る高根の花か大空の

月にひとしき君にありせば

手折られて君が館の床のべに

かをらむものと思ひけるかな

かく兩人は述懐や辭世をよんで、身の餓ゑ疲れを忘れ、靈を天國の樂園に馳せ
あるをりしも、ガチンと錠前を外して、悠々と入來たりしは二人の男女が蚰蜒の
如く嫌つてゐた玄眞坊であつた。玄眞坊は兩人の瘦せこけた姿を見て、さも愉快
げに打笑みながら、

「アハハハハ、オイどうだ兩人、もはや覺悟はついたか、其方たちの生命は、こ
の玄眞坊が手の内に握つてゐるのだ。生命あつての物種、いつまでも頑固な事を
申さずに、ウンと靡いたが、其方の身の得、命の鍵、返答を聞かしてくれ」

サンダー、スガコの兩人は既に死を決してゐたものの、まだ何處やらに生の執着心が残つてゐた。……何とかゴマかして一日でも生命を保ちをらば、兩人がこの岩窟を無事に逃げ出し、天下晴れて、此世で添ひ遂げる事が出来るであらう。何はともあれ、迷ひきつたこの賣僧、口の先にてゴマかしやらむ……と期せずして兩人の胸に泛んだ。

サンダー「玄眞坊様、妾も決心を致しました。おかげに依りまして、利害得失を悟り得ましたから、今までの頑固一點の態度を改め、なるべく御意に従ひませう。どうか空腹に惱んでをりますから、パンをお與へ下さいませ」

玄眞坊はこの言葉に飛立つばかり打喜びながら、ワザと素知らぬ澁り切つた顔して、

「ウン、氣が付いたならば、そち共の幸福だ。斷食といふものは精神が落付いて、悟りを開く第一の修行の要訣だ。決してこの玄眞坊は汝等兩人を干し殺さうと思つて食を與へないのではない。斷食の修行をさせて、誠の眞理を悟らしてやりた

いといふ、大慈大悲の心より斯く取計らつたのだ。どうだ、吾が慈悲心が分つた

か
」

サンダー「ハイ確かに分りました。結構な修行をさしていただきました。いかにも貴方は天の選みし救世主だと悟らしていただきました」

玄真「アハハハハ、さうなくては叶はぬこと、これこれスガコ、そちは何うだ。少し眞理が分ったか、この玄眞坊が眞心を悟ったか」

スガコ「ハイ、悟らしていただきました」

「どう悟ったのだ」

「ハイ、師の君様の魔心をスツカリ悟らしてもらひました」

「アハハハハ、悟りが開けたならば、この方の申すことは絶対服従するだらうな。ヨモヤ兩人、違背は致すまいのう」

サンダー「どうかパンをお與へ下さい。最早お答へする勇氣が出て参りませぬ」

玄真「なるほど無理もない。まてまて拙僧が自ら飲食を調理し、可愛い其方等に食はしてやらう」

とニコニコしながら、戸をピシヤリと締め、再び錠をおろして立ち去った。

第一五章 喰ひ違ひ〔一六九七〕

玄眞坊は、サンダー、スガコの二人の美人に現をぬかし、いかにもして兩手に花をかかへた色男たらむと、七つ下りになつて數多の信者の歸つて行つたのを幸ひ、自ら庖丁を手にして兩人の喜びさうな珍味佳肴の料理にとりかかり、ホクホクもので捻鉢巻、襷がけで板場を稼いでゐる。そこへ附近村落の宣傳をへて頭目のシーゴ坊が錫杖をガチャつかせながら、ドシンドシンと歸つて來た。

シーゴ「これはこれは玄眞坊殿、澤山の部下のあるにも拘らず、お手づから炊事をなさるとは不思議千萬、人は重からざれば威あらず敬せられずとか言つて、さう輕々しうされちや部下を治むる重鎮の貫目が零になりますよ。サアサア早く部下にいひつけて料理をさせ、貴僧はヨリコ姫御女帝の前に伺候なされ。拙者も

これから女帝にょていの御前おんまへに宣傳せんでんの模様もやうを報告ほうこくいたすござらう』
玄眞坊げんしんぼうは、

「悪い所わるところへシーゴーが歸かへつて來きやがつた」

といささか面喰めんくらつたが、さすがの曲者くせもの、さあらぬ態ていにて、

「アハハハハ、これはこれはシーゴー殿どの、永ながらくの間の宣傳せんでん、御苦勞ごくらうでござつた。

貴殿きでんの晝夜ちつや不斷ふだんの御盡力ごじんりよくによつて愚夫愚婦ぐふぐふの寄り來よること層そう一層いつそう多く、人山ひとやまを日々にちにち

築きつき拙僧せつそうも随分ずぶん疲勞ひらういたしてござれば、今日こんにちは自ら料理れうりをなし、快こころよく一杯いっぱいやつ

て浩然こうぜんの氣きを養やしなはむと思おもつた處ところでござる。サア早はやく女帝にょていのお側そばへ行いつてお休やすみ下くだ

さい。拙者せつしやはキツとあとからお伺うかがひ致いたすでござらう』

シーゴー「拙者せつしやも随分ずぶん疲勞ひらういたしました。貴僧きそうのお手料理てれうりを賞翫しやうがんするのも亦結構またけつこう

でござらう。どうか精々せいせいと御馳走ごちそうを願ねがひたいものですわい。時ときに玄眞殿げんしんどの、コマの

村むらの里庄りしやうが娘むすめサンダーといふ花はなに嘘うそつく美人びじんが當山たうざんへ來きてゐるはずですが御存ごぞんじ

でせうな。拙者せつしや思おもふところあり山住やまずまひの無聯むれうを慰なぐさめむとて、懸河けんがの辨べんを揮ふるひ、

當山たうざんまでおびきつけたはずでござる。御存ごぞんじならば一目ひとめ、彼かれに會あはして貰もらひたい、

アハハハハ

玄眞坊はこの言葉にヒヤリと頭から冷水を浴びせかけられたやうな氣がしたが、もはや隠す譯にもゆかず、思ひ切つて、

「成程、チツとばかり澁皮のむけた美人が先日参りました」

シーゴー「その美人は今何處にいますか。是非一目會ひたいものです。かう身體繩のごとく疲れはてては、酒の一杯や二杯飲んだところで到底元氣は恢復いたさぬ。絶世の美人の花の顔を眺め、丹花の唇より靜かに出づる言の葉を耳に聽聞するが唯一の力でござる。美人の笑みは所謂生命の源泉となるものだから、實は拙者の命の洗濯用にもと存じ、布婁那の辨をもつて當山へ差し向けおいた次第、如才のない貴僧の事であるから、キツと大切にしておいて下さつたでせう。あなたのお手料理は所謂、かの美人たちに勧むる爲でござらう。イヤハヤ感謝いたしますよ。貴殿も自ら料理なんかなさるやうな方ではないが、戀愛といふ曲物に取り挫がれては、からつきし駄目ですな。戀の奴となり、甘んじて下郎の役を遊ばす

と見える。世の中に何が強いといつても戀といふ奴ほど、無限力をもつてゐる奴

はない。鬼を欺く髯武者の男子、しかもこの白髪首も蓄の花の綻びむとする優姿を眺め、馥郁たる香氣を嗅いだ時は、もとの昔に返つたやうでござる、アハハハ八

玄眞坊は二人の美人を永らく食料攻めにして苦しめおき、今日ヤツと兩人が香ばしい言葉を出したので戀の願望成就と、なるべく味のよい加減のよい食物を與へ、層一層二人の歡心を得むものと心を碎き力を盡し、汗を絞つてやうやく馳走を拵へたところへ、シーゴーが歸つて来て、いろいろと耳の痛い事を聞かされ、夜食に外れた梟鳥か、小田の蛙が蛇に追はれて泣きそこねたやうな面をして、ブツブツと口の奥にて小言をいひながら、匆々に膳部を拵へ、シーゴーをして早くこの場を立去らしめむと、いろいろと謎をかけるけれども、意地の悪いシーゴーはこの場に立ち塞がつて女帝の側へ伺ひに行かうとはせぬ。

シーゴー「ハハハハ、この膳部は三人前でござるな、なるほど、女帝様と拙者と貴殿とでござるか、ヤ、貴僧ばかりに骨を折らせても濟まない。拙者が膳部を運

びませう」

玄眞「イヤ、お構ひ下さるな。徹頭徹尾、拙者が取扱ひいたしませう。サア早く
貴僧は女帝様の御機嫌を伺つて来て下さい。女帝様も先日より貴僧のお歸りをお
待ち兼ねですからな」

シーゴー「しからばこれより女帝様に御挨拶に参りませう。幸ひ拙者も空腹なり、
時分もよし、女帝様もお腹が空いてゐるでせう。貴僧が丹精をこらして手づから
拵へになつた百味の飲食を三人で頂くのも愉快でござらう。いや楽しい事でござ
る」

玄眞坊は二人の美人を喜ばせ、自分も一緒に舌鼓を打つて二人の嬉しい顔を見
ながら一杯やらうと思つてゐるのに、九分九厘の處にシーゴーに歸つて來られ、
「どうせ御馳走はあて外れの處へ持つて運ばねばならぬやうになつて來た。加ふ
るに、苦心慘憺して吾が意に八九分靡かせたサンダーは、どうやら、シーゴーが
懸想してゐるらしい。今のシーゴーの言葉から考へて見れば、彼は自分の妻にし
ようと思つて、ここへ詣らせたのに違ひない。イヤたしかに目的があつて辨舌に
まかせ、彼サンダーを、ここへよこしたのだ。ハテ氣の揉めることだわい。三人

前の馳走をシーゴーに見つけられた以上は、どうしても女帝様に奉らねばなるまい。自分の分だけを残して二人前、送るとしたところで二人の女に一人前の膳部とは可笑しい、また女帝様の命令で……三人揃うて一杯やらう……等と言はれちや一人前の膳部も助からない。アさうすりや二人の美人にこの玄眞坊はますます信用を落とす道理だ。……人を騙した残酷な奴だ……と、層一層怨まれるやうになつちや戀の目的は達成しない。チヨツ、えらいジレンマにかかったものだわい。アアア、こちら立てれば、あちらが立たぬ、あちら立てればこちらが立たぬ。両方立つれば身が立たぬ……とは自分の事だ。アアア」と吐息をついてゐる。そこへ慌ただしく、パンクが女帝の使として、やつて來た。『もしもし玄眞坊様、女帝様のお使ひで参りましたが、今シーゴー様が久し振りで宣傳を終へお歸りになりましたので、女帝様も非常にお喜び遊ばし、あなたにも來てもらつて女帝様、左守、右守のお三方が祝酒を飲み、御馳走をお食り遊ばすので、私に女帝様が「料理をせよ」と仰せられました所、シーゴーさまの仰有るのには、「イヤ女帝様、御心配下さいませ。いま玄眞坊様は天眼通をもつて、

拙者の歸るのを前知し、三人分の馳走を拵へておられますから、それさへここへ運んで来れば、いい」との事、さすがの女帝様も「玄眞坊様は何と、偉い奴だな」と、舌をまいて感心遊ばしましたよ。サア、何卒お待ちかねですから、女帝様のお居間へお越し下さい。お膳部は私が運ばして頂きます」

玄眞坊は是非なく溝狸が頭から煮茶を被せられたやうな不足な顔して、二人の女に心を残しつつ天王の社の床下に築かれた地下室、女帝の居間へと進み行く。

女帝は一段高い床の上に座を占め、シーゴー、玄眞坊は少し下つて鼎座となり、酒を汲み交はしながら手柄話に花を咲かした。パンクは酒注ぎ、飯つぎの役を忠實に勤めてゐる。何を言つても山賊の親分だから、あまり小むつかしい行儀もない。酒飲みながら、喰ひながら、諄々と話をつづけて言ふ。

ヨリコ「シーゴー殿、永らくの宣傳、御苦勞であつた。その効果空しからず、神様は大變な御繁昌だよ。ずゐぶん骨を折つたでせうな。その影響として玄眞殿も、大變に多忙を極めてゐたやうだ。そなたが歸つたら、一度慰勞會を催したいと思つてゐたところだ。サア飲みながら食ひながら、そなたの活動振りを聞かしても

らほう」

シーゴー「ハイ、まづ顯著なる私の働きと言へばタライの村の美人スガコを初め、コマの村の美人サンダー姫を、うまく此方へ引寄せおき、なほも宣傳をつづくる中、ハルナの都より地教山に向かふバラモン軍の勇將大足別の部下が附近村落に宿營をなし、金錢物品を掠奪し、婦女を姦し甚しきは美人を持ち去り家を焼くなど、亂暴狼籍至らざるなく、吾等が繩張を荒すこと甚しく、人心は恟々として、天の救ひを求むる好時節、この機逸してなるものかと、獅子奮迅の勢ひにて晝夜を分たず宣傳を致しました。中にも最も愉快なるはタライの村の里庄ジャンクは義勇軍を起し、バルガン城に向かふ事となり、最愛の娘は行衛知れず、自分が今戰場に向かふ上はもとより生きて歸る事は思ひも寄らず、可惜巨萬の財産を相續するものがないといふ破目、これぞ天の與へ、拾はずんばあるべからずと、修驗者の假裝を幸ひ、彼が出陣の間に彼を訪ひ、ほとんど應接の違なき多忙をつけ込み、「オーラ山に降り玉ふ天來の救世主、玄眞坊に全部財産を奉れよ」と掛合つたところ、ジャンクの申すには「一人の娘は生死も分らぬ今日の場合、吾また

戰場に向かはば屍を山野に曝す覺悟、財産の必要はない、神様に奉るから天下萬民のため、善用せよ」との頼み、イヤハヤ大成功でござる、アハハハハヨリコ「今に初めぬ其方の働き、天晴れ天晴れ、マサカの時の軍資にあつる事が出来るであらう。さすがはシーゴ殿、ヤツパリ猪食た犬は猪食た犬だ。それでこそ三千人の頭目として恥づかしからぬ頭目だ」としきりに褒めそやかす。シーゴは満面の得意に大口を開けて笑ひながら肩を揺すつて玄眞坊に向かひ、
「玄眞殿、拙者の腕前はザツとこんなものでござる。貴殿も一寸、おあやかりなさい。女帝様のお褒めの言葉を頂いて、もはや天下を握つたやうな氣分が致すでござる、アハハハハ」と酔ひに紛らし威丈高に笑ふ。玄眞坊は折角二人のナイスを喜ばせやうと思ひ、丹精凝らして料理した膳部は捲き上げられ、田舎の爺が三里もある豆腐屋に行つて、油揚げを買つて歸りに鳶に攫はれたやうな氣のぬけた面をさらし、半泣きの態にて、

「拙僧だとして、なかなかの苦勞がござる。相手變れど主變らず、朝から晩まで雲霞のごとく集まり來たる老若男女に對して「色々何とか、かんとか、ごまかさねばならず、中には骨のある奴があつて「そんな筈がない」とか「理が合はぬ」とか、難かしい哲學を楯に取つて理窟をこねる事もあり、日に幾度、ヒヤヒヤ、アブアブ、する事があるか知れないのですよ。その度毎に冷汗は出る、心臓は躍る、腹はデングリ返る。なにほど小便が張りきつてを つても、活神様が中途に便所に行くわけにもゆかず、大便是尚更のこと、眞青な顔して、高座に上つてゐる時の苦しさを。シーゴ殿のやうに自由自在に廣い原野を横行闊歩するのと違い、その苦しさは幾層倍かも知れませぬぞ。拙者の活動は地味ではあるが、最も苦しく且つ功績も多い。シーゴ殿の活動はいはば外的で花々しくて、愉快で、加ふるに功勞は「一目に見えるのだから、拙者よりも餘ほど勳功が高いやうに一寸は見えないが、どうしてどうして、拙僧の苦心に比ぶれば九牛の一毛にも如かないだらう」

「シーゴ」ヘン、何ほど苦しいと言つても、七つ下れば上跨を打つて美しい女を口説きながら、休んでゐられるのだから樂なものだ。拙者のごときは晝夜の區別

なく、荒風に吹き捲くられ、時々ポリスの追跡をうけ、バラモン軍に追ひまくれ、犬には吠えつかれ、猛獣にも脅かされ、おまけに露の弾丸、霜の剣を身に浴びて、荒涼たる原野の中を縦横無盡に馳驅する苦しさ。たうてい岩窟の中に蟄居する守宮さまの、想像し得るところではない。エー、時に拙者が辨舌を振り、千變萬化の秘術を盡して當山へ差し向けたるスガコ、サンダーの二人の美人は如何なされたか。男ばかりの酒宴ではネツカラ興がござらぬ。玄眞坊殿、どうか兩人をこれへ引出し、酒の相手に歌でも謡はせては如何でござるな」

玄眞「如何にも、尤もながら、彼は今斷食の修業中では如何でござれば、たとへ呼び出し

たところで、お間には合ひますまい。顔色憔悴して土のごとく、ほとんど此世の人ではあるまいごとき窶れた姿、むしろ見ないが花でござらう」

シーゴ「然らば修業が済んだ上、拙者も、ユルユル女神様にお目にかからう。もし女帝様、私の御褒美にサンダーといふ女を頂きたいものでございます」

ヨリコ「サンダーといひ、スガコといひ、いづれも其方の苦心慘澹の結果、引寄せたものだから、そなたの自由にしたが宜からう。妾は女の事でもあり美人の必

要はないから、其方の勇氣をつなぐため、自由にしたが宜からうぞや。玄眞坊は天帝の化身だから、ここ暫くは女なんかには心は寄せず、あくまで聖者と成りすまし、目的の成就までは辛抱してもらひたいものだ。のう玄眞坊、そちもそれくらゐの考へはあるだらう」

玄眞坊は頭をかきながら、

「ハイ、エー、何でございます。エー、拙僧もあくまで聖者を氣取り、なるべく活神としての信用を保ちたく、晝夜に心を揉んでみますが、何といつても二人の美人、拙僧に戀慕いたし、明けても暮れても玄眞玄眞と言つて、夢現となり戀やつれて今は見る影もなき有様、この兩人をこのままにしておけば、もはや命は亡ぶるより道はありません。この兩人こそは音に聞こえし富豪の娘、どこまでも生命を保たせ人質となし、彼が親の財産を捲き上げて、軍資金の充實を圖らねばならぬからと存じ、燃ゆるがごとき二人の戀慕を煩さいながら、柳に風と受け流し、タワタワと濡れ畔を渡るやうにして、今日が日まで、彼等の心を慰め將來に望みを抱かせておきました。拙者が顔を見せない時は彼は焦がれ死にをいたし

ます。それで拙者は彼が犠牲となつて日夜眞理を説きさとし、不離不即の態度を
持し、彼の元氣が恢復するまで、時々慰めてやる考へでございますれば、これか
ら拙者が彼の岩窟に訪うとも決して怪しまないやうにお願いいたします。彼等二
人の元氣恢復して元の身體となるまでは、たとへシーゴー殿といへども彼の室に
出入せぬやう、女帝様より厳しく御申し付け下さいますやうに……」

シーゴーは肩を揺すつて高笑ひ、

「アハハハハ、玄眞殿の豫防線、いな鐵條網、イヤハヤ、シーゴー、感奮仕つた。
それだけの腕がなくては美人に對し、云々する資格はござるまい。玄眞坊は年も
若く男前もいい。拙者は御覽のごとく頭に霜雪を頂き、到底若き女の好む面付で
はござらぬ。この點においては玄眞坊殿に對し一步を譲らねばなりません。しか
しながら、玄眞殿、この御馳走は女帝様や吾々の口に這入るべき物ではなかつた
のでせう。斷食をしてゐるといふ修業者に向かつての獻立、おほかた影膳にお作
りなさつたのであらう。拙者はお蔭を頂いて御馳走を鱈腹いただいたが、さぞ二

人の斷食者は待ちかねてゐる事でせう。サア玄眞殿、御苦勞ながら、炊事場に行つて二人前、否三人前の料理を調進召され。てもさても、器用なお方でござる。アハハハハ」
とあてこすられ、玄眞坊は今戸焼の出来そこなうた布袋のやうな面をして、しやちこばつてゐる。

ヨリコ「面白し玄眞坊の面ざしは泣きそこねたる羅漢面かな」

玄眞坊「これはしたり羅漢面とは訝かしや
女帝の言葉と覚えざりけり」

シーゴー 〇 岩の戸に立て籠みおきし艶人に

心揉みてや汝のをののき

玄眞坊 〇 何なりと誹れば誹れ吾は只

神のまにまに進むのみなる

ヨリコ 〇 何事も水に流せよ杯の

中にも澄める望の月影

(大正一三・一二・一七 舊一一・二一 於祥雲閣 北村隆光録)

第四篇 戀連愛曖

第一六章 戀の夢路（一六九八）

梅公 三千世界の梅の花

一度に開く神の教

開いて散りて實を結ぶ

月日と大地の恩を知れ

此世を清むる生神は

高天原に神集ふ

神が表に現はれて

黒雲包む天地を

嚴の伊吹に吹き拂ひ

瑞の清水に清めつつ

天國淨土を永久に

この地の上に建設し

百八十國の民草を

常住不斷の信樂に

救はむものと遠近に

神のよさしの宣傳使

まくばり給ふぞ尊けれ
照國別に從ひて

産砂山の靈場を
後に眺めて河鹿山

沐雨櫛風の苦を忍び
夜を日に繼いでデカタンの

風も激しき高原地
トルマン國に來て見れば

ハルナの都に蟠まる
八岐大蛇の惡靈に

左右されたる曲津神
大黒主の軍勢が

人の住家を焼き拂ひ
金銀物資を掠奪し

人妻娘の分ちなく
魔手を延ばして搔ツ攫ひ

深山の奥へと忍び行く
この國民は戰きて

夜も日も碌に寝むられぬ
塗炭の苦しみ見るにつけ

如何にもなして救はむと
心の駒はあせれども

吾が師の君の御許しを
得ざる悲しさ村肝の

心の駒をおさへつつ
義勇の軍に從ひて

バルガン城に進み行く
士氣は俄かに昂舞して

その勢いきほひは天てんを衝つく

吾わが師しの君きみやジャンクさま

これいの軍いくさを指し揮きなして

進すすませ給たまへばバラモンの

勇ゆう士しは如い何かに多おほくとも

荒あ野らのを風かぜの渡わたること

服まつろひ來きたるは目まの當あたり

吾わが梅うめ公こうは唯ただ一人ひとり

軍いくさに在あらうが有あるまいが

この全ぜん局きよくの戦たたかひに

いいくらの影えい響きやうあるべきぞ

師しの御み心こころに叛そむくとは

吾われも覺かく悟ごの上うへながら

はやりきつたる魂たまは

タライむらの村むらの花はな香か姫ひめ

スガコひめの姫ひめやサンダーさま

三み人たりの哀あはれな境きやう遇ぐうを

救すくひ出いだして天てん國こくの

花はな咲さき香にほふ喜よろこびに

救すくはにやおかぬと雄を健たけびし

吾わが師しの君きみの目めを忍しのび

夜や陰いんに紛まぎれて夏かつ々かつと

駒こまに鞭むちうち今いま此こ處こに

限かぎりも知しらぬ荒あ野らの原はら

目あて的ともなしに來きたりけり

オーラみねの峰みねを見み渡わたせば

夜よな夜よな光ひかる妖えい光くわうは

曲まが神かみ共どもの集あつまりて

醜しこの企たくみをなしつつも 世人よびとを苦くるしめゐるならむ

心こころのせいかは知らねども オーラの山やまが氣きにかかり

寢ねても醒さめても忘わすられぬ 命いのちを的まとにただ一いつ騎き

駒こまの蹄ひづめの續つづくまで 如何いかに山途やまみち嶮けはしとも

如何いかでひるまむ大和魂やまとたま 思おもひつめたる鐵石てつせきの

心こころの征矢そやははや既にすで 眞弓まゆみの弦つるを放はなれたり

最早もはや返かへらぬ吾わが意氣地いくぢ 彼等かれら三人みたりのあで人びとを

まんまと救すくはせたまへかし 三五あななひけう教まもを守まもります

國治立くにはるたちの大御神おほみかみ 神素盞鳴かむすさのをの大神おほかみの

御前みまへに畏かしこみ願ねぎまつる

梅公うめこうはジャンクの家いへに宿とまつた時とき、スガコやサンダーの何者なにものにか攫さらはれた事ことを聞きき、何なんとなくオーラ山さんに惡漢わるもののために閉とぢ籠こめられてゐるやうな、暗示あんじを何者なにものにか與あたへられた。さうして婆アさまの家いへを訪たづねた時とき、サンヨの娘花香むすめはながバラモン軍ぐん

に捉はれたと聞いた時、これも何處かの山奥に隠されてゐるやうな氣がした。自分
分は戀でもなく色でもなく何となく同情心に驅られ、この可憐な女を助けてやり
たいと義侠心に充たされてゐた。けれども自分は照國別の從者であり、勝手氣儘
に列を離れることは出来ぬ。如何がはせむかと、とつおひつ思案に暮れながら、
照國別、ジャンクの義勇軍に従ひ、駒に鞭打つて渺茫たる大廣原を驅け出したが、
黄昏時になり、自分の乗馬は何ほど鞭打つても「いましめ」ても一歩も前に進ま
うとはしない。その間に數多の義勇軍は梅公を大廣原の中に残り、馬の蹄に砂塵
を捲き上げながら暴風のごとき勢ひにてバルガン城をさして進み行く。梅公は馬
上にて雙手を組み暫し思案に暮れてゐたが……吾が馬に限つて何故進まぬのだら
う、何か深き御神慮のましますならむ……と試みに右の手綱を一寸引けば駒は頭
を西に立直し、星明りの原野をあてもなく一瀉千里の勢ひで驅け出した。梅公
は……アア師の君には濟まない、しかしながら肝腎の駒が進まないのは何か特別
の使命が神界から下つたのだらう。今となつては何事も神のまにまに行動するの
み……と決心の臍を固めた。乗馬はやうやく梅公の心を知つたかの如く、フサフ

サとした太い長い尾を左右に振りながら、勇ましく高く嘶きつつポカリポカリと静かに歩み出した。

蒼ずんだ空に金銀色の星は金箔を打つたるごとくキラリキラリと輝いて、梅公の行動を監視するものの如くに思はれた。天は高くして静かに、地は際限なき茫茫たる原野、猛獣の聲も聞こえず、「そよ」と吹く風の響もなし、ただ駒の鼻呼吸、蹄の音のみ砂地の草ツ原を駆け行く音が柔らかにポカポカと聞こゆるのみであった。左手の方の、コンモリとした小山をみれば木立の間からチヨロチヨロと火が燃えてゐる。梅公は……あの山麓に人家あり、何はともあれ立ち寄つて様子を探りみむ……と左手に馬首を廻らせば、駒は勢ひ込んで驀に進みゆく。梅公は火を目當に駒の足音を忍ばせながら、木蔭に近づき眺むれば、バラモンの落武者と見えて四五人の荒くれ男、一人の美人を後手に縛り、何事か荒々しく叫びながら女の體を所かまはず鞭にて打ち据ゑてゐる。その度毎に女はヒイヒイと悲鳴を上げ、髪振り亂し、無念の齒を喰しぱり美人ながらも形相凄じく、さすがの梅公も肝を潰すばかりであつた。梅公は……如何にもして彼女を助けてやりたい。今や

彼は血に餓ゑたる豺狼の餌食たらむとするのであるか、アア不愼なものだ。しかしながら敵は數人の荒武者、自分は一人だ。されど、千里の駿足を力として萬一失敗した時は一目散に逃げ出せばよい。一つ試しに脅かして見む……と、密樹の蔭に駒を寄せ馬上より大音聲、

「ウハハハハ、某はオーラ山に鎮まる天降坊と申す大天狗だ。汝等不届き至極にも、纖弱き婦人を弄び、無體の戀慕を企て、非望を遂げむとする憎き曲者、今や當山の眷族どもが報告により、汝等一同の悪人どもを征伐せむため、今此處に立ち向かふたり、不届者奴、其處動くな、ウーウー」

と唸り立つるや、寢耳に水のバラモン共は忽ち度を失ひ、女を捨てて、
「天狗だ天狗だ」

と呼ばはりながら軍服や帽や靴、劍などを其の場に捨ておき、思ひ思ひに逃げ散つてしまつた。

梅公「アハハハハ。案に相違の弱蟲共、吾が言靈に辟易して脆くも逃げ散つたるその可笑しさ。てもさても愉快な事だわい」

と獨語ちつつ駒の手綱を引きしめ引きしめ女の傍に進みより、ヒラリと駒を飛び降りて女の繩目を解き水筒の水を口に含ませ、二つ三つ背を叩けば、「ウン」と女は呼吸吹きかへし、梅公の顔を星影に透かし見て、
「どうかお助け下さいませ。何と仰有つても私は許嫁がございますから、身を汚す事は出来ませぬ。こればかりは御勘辨を願ひます。いくらお責め下さいましても命にかへても操を守らねばなりませんませぬ」
と掌を合す。

梅公「これこれお女中、拙者は決してバラモン軍ではない。三五教の梅公といふ神の使だ。お前さまが大勢の男に責められてをるのを見るに忍びず、命を的に敵を追ひ散らしてやつたのだ。安心なさい。決して操を破るやうなことを申さなから、安心なさいませ。こんな所に長居してゐては又もや敵が引返して来るかも知れぬ。詳しく話は途々承りませう。吾が馬にお乗りなさい」
と言ひながら女を抱へて自分と共に駒の背に跨がり、再び元の高原を西へ西へと進み行く。梅公は馬上ながら女に向かつて遭難の顛末を尋ねた。

梅公「これお女中さま、お前さまは、どうして又、こんな所へ誘拐されて来たのだ。何か深い譯があらう。差支へない限り、一伍一什を話してもらひたいものだ。なア」

女「ハイ、御親切にあづかりまして、お蔭様で危難を免れました。妾はタライの村の花香と申す娘でございますが、二三日以前バラモンの軍人が吾が村に屯營いたし、その際母を縛り上げ、妾を無理無體に縛つて馬の背に乗せ、其處邊中を引き廻し、遂にはあの洞ヶ丘の森林に誘き出し、寄つてかかつて獸欲を遂げむとして居ました所、貴方様がお出で下さつて危ふい所を救はれ、何ともお禮の申しやうがございませぬ」

梅公「何、お前さまが、花香さまか、何と不思議な事があるものだ。實は一昨朝のこと、お前の家へ立ち寄つて見ればサンヨさまは、雁字搦みに縛りつけられ、眉間から血を出して、蟲の息になつて居られた所、吾がお師匠様の照國別様一行がお救ひ申し、漸く全快された。その時にお前さまの話聞いたのだ。サンヨさまの仰有るには「娘は到底命の無いものと諦めてゐます。しかしながら、あなた

の御神徳で娘を救うて下さつたならば、娘の身の上を一切お任せする」と頼まれました。しかしながらお前さまにはエルソンといふ意中の男があるでせう」

花香は驚いて、

「ハイ、母までが豪いお世話になりました。お禮の申しやうもございませぬ。そして母が妾の身の上を貴方様にお任せ申しますと申しましてございませぬか」

梅公「たしかに頼まりましたが、しかしながら其處へエルソンさまが見舞に見えてサンヨさまに心のたけを打ち明けられたので、大變にサンヨさまもお喜びになり、お前さまが無事で歸つたなら、きつと夫婦にしてやらうといふお約束が出来てゐますよ」

花香「あれまア、母がそんな事を申しましたか。貴方様に妾の身の上をお任せすると言つたぢやございませぬか。どうも母の言葉として二人の男に任すといふのは合點が参り兼ねます」

「八八八八八。これ花香さま、さう深く考へてはいけない。私は宣傳使、天下を股にかけて旅行するもの、サンヨさまが、私に任すと言つたのは、そんな夫婦關

係けいのやうな深ふかい意味いみぢやない。要えうするに……娘むすめを救きう助じよしてくれ……といふ意味いみだ。

エルソンさまに言いはれた事ことと私わたしに言いはれた事こととは大おほいに意味いみが違ちがひますよ」

「ハイ、分わかりました。えらい御ご厄やく介かいをかけまして誠まことに濟すまない事ことでございます。

しかしながら妾わたしは貴あなた方が何なんだか戀こひしく思おもはれてなりませぬわ」

「これこれ花はな香かさま、さう脱だつ線せんしてはいけませぬよ。今いま貴あなた女なが惡わる漢ものにさいなまれ

てゐた時とき、木こ蔭かげに隠かくれて聞きいてをれば、どこまでも……女をんなの操みさをを破やぶらない……と

言いうて、命いのちに代かへて操みさをを守まもつたぢやありませんか。それはきつとエルソンのため

でせう」

「いいえ、エルソンなんか一いつ回くわいも約やく束そくした事ことはありませぬ。あちらの方ほうから何なんと

か彼かとか言いうて幾いく度たびとなく言いひ寄よられた事ことはございますが、いつとても體ていよくお

斷ことわりを申まをしてゐるのです」

「そんなら、あなたの戀こひ人びとはまだ外ほかにあるのですか」

「ハイ、立り派っぱなお方かたが唯ただ一ひとり人ひとがございます」

「その戀こひ人びとといふのは今いま何なにをしてをられるのですか」

「ハイ、お恥づかしながら今妾と一緒に馬に乗つてをられます」

「ハハハハハ。これ花香さま、冗談言つちやいけませぬよ。貴女は私を擲掬つてゐるのですな」

「イエイエ勿體ない、命の恩人、神の與へた戀人に對し、どうして擲掬ひなんぞいたしませう。妾の言葉は熱血より迸つてをりますの」

「どうも合點のゆかぬことを言ひますね」

「妾は夜な夜な夢に麗しき神人と遇つてをります。そのお方はいつも馬に跨がり、妾を山野に導いていろいろの教訓をして下さいますが、今あなたのお顔を拜みまして、初めて夢の中の戀人に遇へたと思つて喜びにたへませぬ。妾は夢の中なる戀人と深く契を結びました。その夢に現はれた方は貴方にそっくりです。お顔といひお聲といひ、馬の乗りかたといひ、この馬までがそっくりですもの。これが何う疑はれませう」

梅公は吐息をつきながら、

「ハテナ、これや夢ではあるまいか。どうも合點のゆかぬ事があるものだ。宣傳

使のお伴をしながら女房を連れて歩く譯にも行かず、困つた事が出来たものだな
ア

花香 『もし貴方は梅さまと言ふ名ぢやございませぬか。いつも夢の中で、梅公さま
梅公さまと言つて交際つてみましたよ』

梅公 『なるほど私の名は梅公だ。さうしてお前さまの名は花香。三千世界一時に
開く梅の花の香りといふ所だなり、ハハハハハ。何だか譯が分らなくなつてきま
したわい』

『あなたは……二人の仲は神の定めた眞の夫婦だ……とお感じになりませぬか』
『まア悠り思案さして下さい。馬上では分りませぬわ。何處かへ下りて悠りと考
へませう。や、幸ひ此處に、好い場所がある。花香さま、貴女はこのまま馬に乗
つてゐて下さい。私は一寸鎮魂をして神勅を伺つて見ませう』

と言ひながら馬をヒラリと飛びおりた。

花香 『もし梅公様、女が馬に乗つてゐるのは、何といふ謎でございませうかな、
ちよつと考へて下さいな』

梅公うめこう「女をんなに馬うま、フン、なるほど、媽かかといふ洒落しやれだな。かかる不思議ふしぎな事ことは開闢かいびやく以來らいたれ誰たれも味あじはうたものはあるまい」
と言いひながら雙手もろてを組みくみ瞑目めいもくして鎮魂ちんこんの行ぎやうに入いつた。花香はなかも馬うまをヒラリと飛とび下おり傍かたはらに同おなじく座ざして鎮魂ちんこんの姿勢しせいを取とつた。無心むしんの馬うまは目めを閉つむつて四邊あたりの草くさをむしつてゐる。暫しばしくあつて梅公うめこうも花香はなかも互たがひに何なんとも言いはず、再ふたび相乘あひのり馬うまにて際限さいげんもなき廣野ひろのをオーラ山さんの峰みねを目めがけて、野嵐のあらしに吹ふかれながら進すすみ行ゆくのであつた。
(大正一三・一二・一七 舊一・二一 於祥雲閣 加藤明子録)

第一七章 縁馬えんばの別わかれ〔一六九九〕

梅公うめこうは花香はなかと共に相乘馬あひのりうまにて、風吹かぜき亘わたる高原かうげんを、オーラ山さんを目め當あてとなして、カツカツと進すすみ行ゆく。
花香はなか「モシ梅公様うめこうさま、あなたは鎮魂ちんこんなさつた際さい、大神様おほかみさまのお告つげがあつたでせう。

私の申し上げたことは御神意に叶つてゐるでせうがな」

梅公「さうイライラと、追求されては堪まりませぬワイ。天機容易に洩らすべからず。先づ先づ後の楽しみとして、記憶帳につけとめておきませう」

「その記憶帳を一寸私に拜見さしてもらへませぬか。私も御神勅によつて概略は存じてをります。そしてまた私も記憶帳にいろいろの神祕を記載しておきました。あなたの記憶帳を一寸ばかりお洩らし下さらば、私の記憶帳もお目にかけますがなア」

「ハハハハあなたもぬかりがありませんな。記憶帳どころか、氣遅れがして、何も申し上げられませぬワイ、ハハハイハイハイ」

と手綱を引締めながら後振り返り、

「花香さま、確り掴まへて下さいよ。これからチツと飛ばしますから」

花香「幾らなつと、お飛ばしなさいませ。後ろから貴郎の腰を心行くばかり、抱き締めますワ。サアお飛ばしなさい」

と息が詰まるほど抱き締めた。

梅公「あ、痛い痛い、モチツとお手柔らかに願ひます。息が切れまますよ。思ふやうに手綱が使へないと、あなたと一緒に落馬しちやすみませぬからな」

花香「ホホホそんな氣遣ひはいりませぬよ。落馬しさうになつたら、私が抱へて、馬の背から飛んで上げますワ。たとへおちて頭をうち絶命したところで、あなたと二人ならば満足ですもの。この馬に乗つて三途の川を渡るのも一興でございませうよ」

「コレコレ花香さま、そんな縁起の悪い事をいふものでない。三途の川どころか、自分は二人の美人を助けたいがために、一途になつて行くのだ」

「二人の美人を助けたいとは、ソリヤ何方の事でございますか」

「何方でも宜しい。後になりや分るでせう。ともかく私は神の使命によりて、目的の人々がオーラ山に捉へられてをるやうな暗示を與へられました。あなたも一緒にオーラ山にお登りになつたらどうですか。お厭なら、お宅まで貴女を送り届け、單騎私が救援隊に向かふつもりですから……」

「私はどこまでも貴郎のお伴を致します。たとへ悪魔の巢窟でも地獄のドン底で

もお伴ともさして下ください。女房にようぼうは夫をつとの附物つきものですからな」

「コレはしたり、花香はなかさま、又またしても夫をつとだの、女房にようぼうだのと、みつともないぢやありませぬか」

「ハイ私わたしはみつともない女をんなでございます。到底たうていあなたのお氣きにはいりません。邪魔あくまの巢窟さうくつまで美人びじんを助けたすに行ゆくと仰おつしや有あるくらゐですもの。どんな立派りっぱな方かたが貴あな方を、待まつてゐらつしやるか知しれませぬもの。しかし私わたしは神様かみさまより夢ゆめの中に許ゆるされた、あなたは夫をつとですもの、私わたしは貴郎あなたの先取權せんしゆけんを握にぎつてますワ。こんな事ことを申まをすと悋氣りんきするやうですが、決けつして悋氣りんきなんか致いたしません。私わたしが貴郎あなたに危ききふ急きふを救すくはれて嬉うれしかつたやうに、あなたの意中いちちゆうの人も、あなたに危ききふ急きふを救すくはれるのは殊更ことさら嬉うれしいでせう。そして貴郎あなたを愛あいする女をんなの方々かたがたは如何いかなる人ひとか、一いっぺん遍べんお顔かほも拜をがみたうございますから、是非ぜひお伴ともをさしていただきたくうございます」

「何なんだか妙めうなところへ、言靈ことたまの矢やが向むきましたな。疑うたがひを晴はらすため、一層いっそうのと、打明うちあけて申まをしませう。實じつは花香はなかさま、お前まへさまの不在るすたくでタライの村むらのタクソンさまに出會であひ、里庄りしやうのジャンクさまが館やかたに行いつたところ、お嬢ぢやうさまのスガコ

姫様が悪者に搔つ攫はれ行方が不明との事で非常な御心配。それにまた許嫁のサ
ンダーさままでが家出をなされ、大變に兩家の御心配、吾々宣傳使として看過す
るわけには行きますまい。折りも折りとて、トルカ王様の勅使來たり、里庄のジャ
ンクさまは義勇軍を組織し一隊を率ゐて、バラモン軍征伐のため、王城守護のた
めに出陣をなさつたのですよ。私もその軍に従つて途中まで参りましたが、どう
しても馬が動かないので、これは……お二人を助けよ……との神様のお示しと直
覺し、駒を立て直し、馬の進むがままに驅け出したところ、折りよくも貴女の危
難を救ふことが出来たのです」

「アア左様でございますか、それを承つて安心をいたしました。スガコさまとサ
ンダーさまは已に許嫁の夫婦でございますから、何卒助けて上げて下さいませ。
しかしオーラ山にゐられるでせうかな」
「ハハハハ、これで貴女も御安心の態とみえますな。チツとばかり妬いてゐまし
たね。オーラ山に居られるか居られぬかといふ事は、私としては判然りとした事
は分らないですが、どうも居られるやうな直覺をするのです」

「毎晩毎晩オーラ山には、お星さまがお降りになるといふ事です。天から救世主がお降りになり、萬民の苦難を救ひ下さるといつて、偉い評判ですが、何だか私は蟲が好かないので一度も参つた事はございませぬ。天から星が降つて救世主の教を聞かれるなんて、そんな事が實際あるものでせうかな」

「さアそれが第一不思議の點だ。……あんな事いたして、賣僧どもが山子してゐるのではなからうか、人の妻女を奪ひ取り、どつかへ隠しておいて、金品を強要し、商賣の種に使うてをるのではなからうか……と、思はれてならないのです。さうでなくては私だつて、オーラ山へ目はつけないのですからな。これからボツボツ参れば丁度酉の刻には麓までは着けるでせう。歌でも唄つて参りませうか、あなたのお優しい聲で旅の憂さを慰めるため、一口聞かしてもらひたいものですな」

「ハイ畏まりました。どうかお笑ひ下さいませぬやうに……」
「上手に面白くお唄ひになれば、自然笑ひますよ。お歌が下手だつたら、畏まつて承りませう」

☐ あなたはキツと笑ふつもりでせう。甘いこと言つて豫防線を張つてゐらつしやるのですもの。

三千世界の梅の花 一度にかをる神の道

梅公さまと花香とは 神の定めし縁にて

名さへ目出たき梅の花 香りを送る春の風

駒のいななき蹄の音も 何とはなしに勇ましく

その鼻息はフーフーと 頭をあげて勇みゐる

今乗る馬は神の馬 吾等が赤繩を結ぶなる

馬頭觀世音の化身ぞや 同じ一つの馬に乗り

人目の關も突破して 心も廣き大野原

進み行くこそ芽出たけれ 私と貴郎は昔から

結びの神の引合せ 生れし國は隔つとも

靈は同じ神の前 神素盞鳴の大神の

御許みゆるしうけて結むすばれし

千代ちよの縁えにしに違ちがひない

悪者わるものどもに取卷とりまかれ

今いまや操みさをを汚けがさむと

責せめさいなまれたる時ときもあれ

天狗てんぐのような高たかい聲こゑ

森もりの中なかより聞きこえ來くる

一いち度は驚おどろき肝きもつぶし

如何いかに吾わが身みはなるかやと

慄ふるひ戦まのきゐたりしが

よくよくみれば汝なが命みこと

花はなの顔か容ん月げつの眉まゆ

水際みぎはに匂におふ梅うめが香かの

花はなにもまがふ背せの君きみに

會あうた嬉うれしさ懐なつかしさ

凡すべての事ことを打忘うちわすれ

たつた一人ひとりの母はは様さまの

淋さびしくお暮くらし遊あそばすを

訪とひまつらむと思おもへども

あなたに心こころ引ひかされて

次つぎになしたる戀こひの暗やみ

憐あはれみ玉たまへ背せの君きみよ

たとへ野のの末山すゑやまのおく

大海原おほうなばらの底そこまでも

吾わが玉たまの緒をのある限かぎり

駒こまの蹄ひづめの續つづくまで

御伴みともに仕つかへまつるべし

天てんにたとへし背せの君きみと

大地にたとへし妻の身のいかで離るる事あらむ

天地の間に人となりまして有情の女子が

如何でか戀を忘るべき山野にすだく蟲の音も

梢に囀る百鳥も戀を歌はぬものはなし

戀し戀しの背の君と魔風戀風面にうけ

魔神の集ふオーラ山勇み進んで出でて行く

吾が魂は奮ひ立ち血汐は躍り魂光る

ああ惟神々々イドムの神よどこまでも

二人が仲を永久に結ばせ玉へ萬世の

國の礎固めむと出で立ちたまふ宣傳使

夫にもちて吾は今魔神の征途に進むなり

ああ惟神々々神かけ祈り奉る

大日は照るとも曇るとも月は盈つとも虧くるとも

魔神の力強くとも神に任せしこの身體

吾が背の君のある限り
いかでひるまむ神の御子
守らせ玉へと願ぎまつる

梅公「アハハハハハ、天晴れ天晴れ、ヤ、モウ梅公、感じ入りました。かやうな名歌を聞かされては怖氣がついて、私は唄ふ事が出来なくなつて來た。どうか御免を蒙りたいものだな」
花香「オホホホホ、ようそんな卑怯な事が仰有られますな。あなた男ぢやありませぬか、サア、どうか歌つて下さいませ」

梅公「大野ヶ原を駒の背に 跨がり進むこのナイス
月雪花か將神か 天女のやうなお姫さま
かをり床しく咲き匂ふ 梅公さまの腰の邊に
白きただむき淡雪の 若やる胸を素だたきつ
大和男の子の雄心を 碎き玉ふぞ果敢なけれ

齋苑いその館やかたを出いでしより

神かみの教をしへを畏かしこみて

ハルナの都みやこの神業しんげふを

成なしとぐるまで夢ゆめにだも

をみなに縁えにしは結むすばじと

思おもひつめしが如何いかにして

かくも弱よわけくなりしぞや

岩いはをも射いぬく桑くはの弓ゆみ

虎狼とらおほかみも恐おそれねど

敵てきしかねたるたよわ女の

細ほそき腕うでには捲まかれけり

ああ惟かむながらかむながら神々々

許ゆるさせ玉たまへ【いそ】の上かみ

古ふるき神代かみよの古いにしへは

天教山てんけうざんの中腹ちうぶくに

諾册なぎなみにそん二尊にそん現あれまして

嫁とつぎの道みちを開ひらきまし

百ももの神々かみがみももびと百人ひゃくにんや

草木くさきの種たねまで生うみ玉たまふ

その古事ふるごとを思召おほしめし

戀こひの罪つみをば許ゆるしませ

心こころの限かぎり身みの限かぎり

戀こひの矢玉やだまを防ふせげども

もはや力ちからも盡つき果はてて

花香はなかの姫ひめに玉たま打うたれ

戀こひの奴やつことなりけり

吾わが師しの君きみがこの様さまを

風かぜの便たよりに聞ききまさは

さぞや怒らせ玉ふらむ

月日も空に照公や

タクソンさまは嘸やさぞ

二人の間の睦言を

聞いた時には呆然と

空を仰いで歎くだらう

日頃こがれしエルソンの

君の心はいかにぞや

花香の姫は梅公の

宿の妻よと知るならば

折角これまで張り詰めし

心の弓はひた曲り

矢さへ楯さへたまるまい

思へば思へば罪深き

吾が身の上と思へども

花香の姫の懇な

切なき戀に責められて

逃れむ由も夏の野邊

馬耳東風と進み行く

許させ玉へ惟神

神の御前に詫びまつる

花香「モシモシ梅公さま、大變に御心配をかけまして濟みませぬな。御迷惑お察し申します。ハルナの都へ大任を帯びてお出で遊ばす途中に、悪い蟲がつかまし

て嘸お困りでございませう。大根の葉にネチがついたやうに思召すでせうが、これも因縁と諦めて、私をどこまでも連れて行つて下さいませ。何ほど厭でも除蟲液などかけないやうにお願い申しますよ、ホホホホ」

梅公「何だか大變な罪惡を犯したやうな氣がしてなりませぬが、私も因果腰を定めました。モウかくなる以上は互ひに力を協せ、世のため道のために、あらむ限りの力を盡しませう」

「ハイ有難う。それを承つて甦りました。どうやら麓の森林へ近づきましたやうです。これから上は險峻で駒も進みますまい。サア、下りませう」

と花香はヒラリと飛び下りた。梅公も次いで飛び降り、駒の首を撫でながら、

「オイ馬さま、御苦勞だつた。サア休んで下さい。お前はジャンクさまの内の馬だから、あまり遠くもないし、道は知つてゐるだらう。御苦勞ながら獨り歸つてくれ。これでお別れする。お前の鬘に手紙をつけておくから、主人は不在でも番頭があるだらう。キツとこれを渡してくれ」

と人に言ふごとく話しながら、

「自分はどうしてもオーラ山に、嬢さまが捉はれてるやうだから、救ひ出しに、危険を冒して上つた。何れ近い内に吉左右を報告する」
と記したまま、駒に別れを告げ、花香と共に、成るべく人通りのない、夕暗の路を大杉の上に輝く光を目當に辿り行く。馬は後ふり返りふり返り、二人に名残を惜しむが如くヒンヒンと高く嘶いて一目散に歸り行く。

(大正一三・一二・一七 舊一一・二一 於祥雲閣 松村眞澄録)

第一八章 魔神の囁「一七〇〇」

玄眞坊はサンダー、スガコの幽閉してある岩窟の中にニコニコしながら入り来たり、

「オイ、サンダー、スガコ兩人、大變待たして濟まなかつた。腹が空つただらうのう。すぐさま捻鉢巻で御馳走を拵へ、お前等を喜ばさうと思つた所、この山に

働く大泥棒シーゴの奴、突然ここへ歸りやがってその御馳走に目をかけ、喉をゴロゴロさせながら、「永い間宣傳に働いたから俺も大分疲れた。お頭分のヨリコ女帝の前でお前と三人御馳走を喰べやうぢやないか」と誅求するものだから、折角お前と三人食ひたいと思つた御馳走を、たうとう女帝の前に提出せざるを得なくなつたのだ。お前も永い間斷食をし、さぞお腹も空いたらうと思ひ、俺は同情心が起り、氣が氣でないのだが、さういふ譯だから打割つていふ譯にもゆかず、第一線をシーゴの親分に占領されてしまつたのだ。それで再びお前達が可愛さうになり御馳走を拵へて來たのだ。決して氣を悪くして呉れな。仲々もつて等閑に附したわけぢやないからう」

サンダー「どうも御親切に有難うございます。しかしながら今承ればこの山に働く親分のシーゴ様だとか、も一つ親分のヨリコだとかおつしやつたが、妾は此處は天地の大神のお降り遊ばす聖場と思ひましたところ、泥棒の親分と御交際があるとは一向に合點が参りませぬ。何ほど戀ひ慕うた貴方でも泥棒に關係があると思へば、三年の戀も一時に醒めるやうでござります。折角の御馳走だけと妾は

頂いたきませぬ。なあスガコさま、あなたどう思おもひますか」

スガコ「本ほん當たうに恐おそろしい方かた々がたですね。ここは天地てんちの生いき神がみ様の御降臨遊ごかうりんあそばす靈場れいちやうだとか、玄真坊げんしんぼうさまは天帝てんていの化身けしんだとか世界せかいの救世主きうせいしゆだとかおつしやいます、つらつらその御行動ごかうどうを考かんがへますと、妾わたしは全まく此世このよを詐いつはる山賊さんぞくの巢窟さうくつとより外思ほかおもひませぬ。ねー玄真坊げんしんぼう様、それに間違まちがひはございますまいね」

玄真坊げんしんぼうは驚おどろいて、「ウツカリと祕密ひみつを喋しゃべつてしまつた。こりや大變たいへんだ。到頭たうとう、内兜うちかぶとを見みすかされたやうだ。何なんとか考かんがへて捻ねぢを戻もとさねばなるまい」と冷汗ひやあせを流ながしながら、ワザと高笑たかわらひ、

「アツハハハハ、嘘うそだ嘘うそだ、ちよつとお前まへの肝玉きもだまを調しらべてみたのだ。こんな所ところに泥棒どろぼうがつてたまらうかい。泥棒どろぼうのゐるやうな山やまへ、どうして神様かみさまがお降くだり遊あそばすものか。そんな恐おそろしい處ところへ、あんな澤山たくさんの老若男女らうじやくなんにょが詣まゐつて來くるものか、みな嘘うそだから安心あんしんしたが宜よからう。まアそんな小ちひさい事ことに氣きをかけず、この御馳走ごちそうを早はやく早はやくお食あがりなさい。私わたしもお相せう伴ばんするから、滅多めつたに毒どくは入はいつてゐないよ」

サンダー「何なんだか恐おそろしくなつて來きました。師しの君様きみさまの御顔おんかほまでも、どこともな

をもらつて威張つてゐるが、あれでも、ヤツパリ贗札を拵へたり、今でも外國紙幣を盛んに贗造してゐるぢやないか。さうだから泥棒を、ようせないやうな男子は、世の中に立つことの出来ないものだ。しかしながら、さういふ悪人に天地の大道を説いて聞かせ心改めしめるのが、救世主の天よりの使命だ。それでこの玄眞坊は泥棒の張本人なる××大臣や伴食××を初め紳士紳商等いふ獸を此處へ集めて、天地の大道を説き聞かせ地獄的精神を改善せしめ、永遠無窮の生命を保つて榮えと喜びに満ちた天國へ救つてやるために救世主として現はれてゐるのだから、馬賊の頭目だつて山賊だつて、自分の教を聞きに来るのは當然だ。あのシーゴーだつて、元は大變な大泥棒の頭目だつたが俺の説教を聞いて悔い改め、今では猫のやうにおとなしくなつてゐるのだよ。さうしてこの玄眞坊の唯一の弟子として神様にお仕へしてゐるのだ。また女帝様は女帝で、あれは女盜賊の大頭目だつたが俺の感化によつて、今はスッキリ悔い改め、天王の社の神司となつて仕へてゐるのだよ。何ほど元は泥棒だつて改心すれば眞人間だ。何も恐ろしい事はない。安心してここに居るがよい。お前も救世主の見出しにあづかり、妻となり妾

となるのは無上の幸福だよ。どうだ分つたかな」

スガコ「女帝様もシーゴー様も貴方のお弟子ならば、折角お拵へ遊ばした御馳走を強壓的に奪られる筈はないぢやありませんか。それを考へますと、どうやら女帝やシーゴーの幕下になつてゐられるやうな心持が致しますがな」

玄眞「アハハハハ、そこが救世主の救世主たるところだ。光を和らげ塵に交はり衆生を濟度するのだから、威張る奴は威張らしておくなり、觀自在天様の働きをしてゐるのだ。觀自在天様は泥棒を改心させやうと思へば泥棒となり、賭博打ちを改心させやうと思へば、自から賭博打ちとおなり遊ばし、或時は非人となり、或は病人となり、また或時は蠚螫となり蚯蚓ともなり、龍となり馬となり、獅子、虎、狼となり、宇宙一切をお救ひ遊ばすのだから、まして天帝の化身たる玄眞坊においてをやだ。そこが神の神たる處、救世主の救世主たる處だ。何と、神様のお慈悲といふものは勿體ないものだらうがなア。到底人心小智の窺知し得るところではない。それで人間は救世主を信じて少しも疑はず怪しまず、維命維従ふ、といふ絶対服従心がなくてはならないよ」

サンダー「ハイ、重ね重ねの御教訓、有難うございます。お蔭様で、根ツから、葉ツから、よく分りました。ホホホホ」

「これこれサンダー、根ツから、葉ツからよく分つた……とは、怪體な言ひ分ぢやないか、一體分つたのか、分らないのか」

「ハイ、分つたやうでもあり、分らぬやうでもございます」

「さうだろさうだろ、神の道は分らぬものだといふ事が分つたら、それが所謂分つたのだ。神様のお心が分つたと言ふものは、何も分つてゐないのだ。マアマアそれくらゐならば上等の部だ。サアサア遠慮は要らぬ、二人とも、この飲食を頂戴するがよい。俺もこれからお交際に毒味かたがたお前の美しい顔を見ながらお招伴するからう」

二人の美人は何分空腹に悩んでゐる事とて已むを得ず箸をとつた。玄眞坊はこれを見てニヤリと笑ひながら、さも愉快氣に、

「ハハハハどうだ、兩人、美味いだらう」

サンダー「ハイ、誠にお加減が宜しうございます」

玄眞「スガコ、お前はどうかだ」

スガコ「ハイ、何とも知れぬお加減のよいお料理でございます」

玄眞「ハハハハ、そら、さうだるて、この玄眞が魂をこめて拵へた馳走だもの。

この料理の中には玄眞の魂が這入つてゐるのだよ。」

サンダー「左様でございますか、何だか存じませぬが言ふに言はれぬ風味がござ

いますわ」

玄眞「飯一つ焚くにしても、釜の下に薪をくべたなり、外の仕事をしてゐるやう

な事ぢや魂が入らない。甘い汁を外へ零さぬやう、釜の下を熏べないやうに、或

時は火力を強め、或時は火の力を弱めたり、一秒時間も御飯の出来るまで心を外

してはいけない。そして途中に鍋蓋をとつては、味がぬけていけない。蓋をとつ

て見て、ポツポツと豆粒のやうな穴があいてをつたら、もはやお飯が加減よく出

来たところだ。しかしその蓋をとつちやいけない。蓋の上から、そのポツポツが

見えるやうに魂が入らぬと、折角焚いた御飯がおいしくないのだ。そのほかの煮

だつて魚だつてさうだ。一秒間だつて外に心移すやうでは何だつて、おいし

料理は出来ないんだからなア。ここまで氣をつけてお前等兩人に、おいしいものを食はしてやらうといふ親切、よもや、無には致すまいのう。どうだ、も一杯食はないか」

サンダー「ハイ、有難うございます、もうこれで充分いただきました」

スガコ「妾も澤山にいただきました、大きに御馳走様」

玄眞「ウン、さうかさうか。みな甘さうに食つてくれたので俺も骨折りがひがあ

つた。折角骨を折つて味ない顔して食はれると、根ツから骨折りがひがないけど

猫が鯉節を見たやうに飛びついて食つたのを見た時は、この玄眞坊も本當に愉快

だつたよ。サア、御膳が濟んだら、これから俺の要求を聞いて貰ふのだ。否この

玄眞坊にお前たち兩人から御馳走を頂くのだ。人に招ばれたらキツと招び返すの

は世間普通の禮儀だからのう」

サンダー「ハイ、何か御馳走を差上げたうございますが、妾としては何も材料が

ありませんから、お禮の返しやうがござりませぬわ」

スガコ「妾だつてお禮を致さねば濟まないのだけど、かやうの處へ閉ぢ込められ

てゐるのだから、何一つ所持品もなし、玄眞坊様にお愛想の仕方がありませんわ。どうか時節をお待ち下さいませ。キツとお禮を申しますから」

玄眞「俺の馳走といふのは、そんなものぢやない。稀代の珍味、しかも、あなたが所持する畑で掘つた×だ。それを、この玄眞坊に一口賞玩させて貰ひたい。その代りに又秋山の名物、常磐の松の精から生れた××の御馳走を進ぜよう。あんまり悪くはあるまい、エへへへへ」

サンダー「オホホホ、御冗談ばかり仰有いまして、あなたは要するに妾に對し、オチコ、ウツトコ、ハテナを御要求なさるのでせう。あなたもよほどオホノ、トルツテですね」

玄眞「オイ、そんな蒙古語を使つても、ネツから分らぬぢやないか。サンスクリットではないか」

サンダー「妾エ、サンスクリット忘れたのよ。あなたのやうなこと仰有いますと、ポホラの又ホが呆れますよ。ポホラからパサヌーですわ。鼬の最後屁、オンクス、アルテチウンヌルテですわ。ホホホホ」

玄眞「エー分らぬ事をいふ女だな。言論よりも實行だ。オイ、スガコ、そこに待
つてをらう。サンダーの方から御馳走をしてやらう」
と言ひながら、アワヤ猥褻なる行爲に出でむとした。二人は……こりや堪らぬと
……一生懸命に、「助けてくれ助けてくれ」と叫んだ。をりから戸の外を通り合
したシーゴーが、妙な聲がすると思ひ、パツと戸を開いて入り來たりこの態を見
て、

「玄眞坊殿、この不仕鱈は何の事でござる。萬民の模範となり、神の福音を宣べ
傳ふる身でゐながら、可憐な女を一室に監禁し、強壓的に醜行を遂げむとなさる
は、貴下にも不似合な事、おたしなみなさい」

玄眞坊は頭をかきながら、
「アイヤー、シーゴー殿、決して御心配下さるな。ツイあなたと最前お酒を呑
で酔がまはり、酒の奴め、つい斯やうなホテテングを致してござる。酒といふ奴
は本當に仕方のない悪魔でござるわい」
シーゴー「これこれ二人のお女中、危ない事でござつたな。ヤアそなたはコマの

村のサンダー姫ぢやないかむら

サンダー「ハイ、あなたは妾の門前むらにおいて、お目にかかった修験者様しゆげんでござい
ましたか」

シーゴー「いかにも左様さやう、よくお詣りなされた。しかし目的の搜索物さうさくぶつは分りまし
たかな」

サンダー「ハイ、お蔭様で分つたでもなし、分らぬでもなし、この岩窟いはやで玄眞坊げんしんぼう
様のお慈悲により、永らく斷食だんじきの行をさせて頂きました。玄眞坊様は見かけによ
らぬ、シトラおに（鬼）でございますな」

玄眞「アハハハハ、何でもかんでも、「シツトル」ワイ。天地の間の事を「シ
ツトラ」いで、萬民を導く事は出来ないからのう」

とサンダーに鬼と言はれし事を少しも知らず鼻高々と嘯うそぶいてゐる。

かくして夜はダンダンと更けわたり、オーラ山の尾の上を渡る松風の音は颯々
と聞こえ來たる。

（大正一三・一二・一七 舊一一・二一 於祥雲閣 北村隆光録）

第一九章 女の度胸（一七〇一）

梅公、花香の兩人は密に大杉の麓に忍び寄り、よくよく調べて見れば、鐵線の梯子がタワタワと木の上から下つてゐる。

梅公「ハハア曲神の奴どもこの梯子を上つて木の上に火を點し、天から星が降るなどと世の中を誑かつてゐるのだらう。ヤ、面白い、曲神の唯一の力と頼むこの光を先づ消してやらう」

と言ひながら花香と共に梯子を傳うて大杉の梢に攀ぢ登り、十六の燈を一個も残らず吹き消して仕舞つた。晝を欺く杉の根本は俄かに闇の幕が下りた。玄眞坊、シーゴーは俄かに火の消えたのに不審を起し樹下に佇んで、

シーゴー「オイ玄眞坊、不思議な事があるものぢやないか。まだ油が斷れる時でもなし、また十六個が十六個とも消えるのは不思議ぢやなア。附近の人民はこの大杉の巨燈を見て天の星と信じ、渴仰憧憬してゐるのに、唯一時でも光が消えたとすれば、信仰の土臺がぐらつくはずだ。さうすれば吾々の目的は到底達せられ

ない。別に強い風が吹いたのででもなし、どうしたのだらうかなア」

玄眞「どうも不思議でございます。こんな事が有らう筈がありません。十分調べ

て油もついでおきましたなり、何かこの山に住む天狗の業ではございますまいか。

何れにしても不思議な事でございます」

と二人しきりに心配をしてみると、木の上から割るるが如き大聲で、

「ウー、ウー、ウー、ウー、ウー、ウー、ウー、ウー」

と連続的に唸り聲が聞こえて来る。その怖ろしさといつたら五臟六腑に浸みわた

り、兩人の身體には體内地震が突發した。又もや樹上より、

「オーラ山に立て籠もり、惡逆無道の企てを致す汝シーゴ、玄眞坊、よツク聞

け。この方は、オーラ山脈一體を昔より住家と致す、眞の玄眞坊大天狗だ。汝不

都合千萬にも吾が名を騙り玄眞坊と稱し、大杉の枝に燈火を點じ、天より星下つ

て汝が説法を聽聞すると佯り、天下萬民を誑惑かし、金錢物品はいふも更なり、

人の妻や娘を誘拐し、金穀を強奪する不届者。もはや汝の天命つきたれば、一時

も早く悔い改め、解散を致さばよし、何時までも惡事を續行するに於ては、玄眞

坊大天狗、汝等の素首を引き抜きぬ。返答はいかに、ウウーウウーウウー」

これを聞くより兩人は顔色をかへ、ビリビリ慄へながら、

シーゴー「オイオイ玄眞、えらい事になつたぢやないか。あんな事を天狗が言ふわい。折角ここまで仕組んだ狂言を中途に止めるのは惜しいけれど、命にや代へられぬぢやないか」

玄眞坊は慄ひながら、

「ソソソそれぢやと言つて、今にはかに止める譯にはゆかず、澤山の乾兒もある事なり、何とか天狗さまにお願い申し、暫くの御猶豫を願はうぢやないか」

シーゴー「ウン、それもさうだ。俺達はどうなつてもよいが、今にはかに解散するとすると澤山の部下が忽ち路頭に迷ふからなア。まア一つお願いして見ようか

い」

玄眞「もしもし、樹上の玄眞坊大天狗様、誠に申譯のない事ではございますが、今にはかに解散いたしましたしては、三千の部下が忽ち路頭に迷ひ、四方八方に散り亂れて、ますます悪を逞しうするかも知れませぬ。さうなれば國民の難儀は層一

層甚しくなるかも知れませぬ。どうか改心いたしますから、部下を取纏め、貴方様の御教訓を篤と言ひ聞かせ郷里に歸しますから、それまで御猶豫を願ひます。私わたくしのみの難儀ではございませぬ、部下三千の難儀でございませぬから」

聲こゑに應じて樹上より、

「ウーウー、ならぬならぬ。一時も早く退散いたせ。三千人の小泥棒が苦しむのは自業自得だ。積悪の酬いだ。汝等は無辜の良民を苦しめ苛責み、良家の婦女を誘拐し岩窟に閉ぢこめおき、肉欲を逞しふせむとする不届き者。この靈山を汚せしにより、これよりレコード破りの山風を起し三千の部下を天空高く捲き上げ、その身體を木ツ端微塵に打ち碎き、懲らしてくれむ」

次に女の優しき聲にて、

「妾は天より下りし、誠の棚機姫命であるぞ。汝玄眞坊、シーゴ坊とやら、よく承れ。今やトルマン國はバラモン軍に攻め悩まされ、バルガン城は十重廿重に圍まれ、國王のトルカは將に捕虜にせられむとする大國難の際なるぞ。その虚に乘じて汝等はあらゆる良民を誑らかし、金錢を奪ひ取り、武備を整へてバルガン

城を圍みトルマン國を占領し、ひいて印度七千餘國を蹂躪せむとする、極惡無道の外道畜生奴。一時も早く悔い改めて神に謝せよ」

シーゴー「ハイ、どうも恐れ入りました。キツと心得ますから、私を初め部下の命だけはお助け下さいませやうに」

樹上より、

「ウハハハハ、恐れ入ったか、往生いたしたか。サア一時も早く解散の實を示せよ」

シーゴー「ハイ唯今、大親分のヨリコ姫女帝に申し上げ直ぐに解散いたします。暫くお待ちを願ひます」

と言ひながら、ヨリコ姫の居間に駆けつけ右の次第を詳細に物語つた。ヨリコ姫は一伍一什を聞き取り、ニツコと笑ひながら、

「あれほど澤山油がさしてあり、風も吹かぬに火の消える道理もなし、また樹の上に天狗がとまつて託宣するのものをかしい。また棚機姫が下つて宣示するとはまます怪しいではないか。さういふ事に騙されるやうでこの大望が成就するもの

か。ちと確しつかりなさい。玄真坊げんしんぼうはどうしてをるのか」

シーゴー「ハイ、玄真げんしんは慄ふるひ戦をのき樹下じゆかに倒たふれてしまひました」

ヨリコ「ホホホホ、何なんとした腰拔こしぬけだらう。天狗てんぐなんか何なにが怖おそろしい。きつと何なに者ものかの悪戯いたづらだらう。よく調しらべて來きなさい」

「ハイ、もうこの上調うへしらべやうはございませぬ。一つ唸うなられやうものなら、五臟六腑ござうろくぶが慄ふるひ戦をのき、立たつても居ゐてもをられなくなります。人間にんげんがどうして、あんな大おほきな聲こゑがでませう。きつと天狗てんぐに間違まちがひはありませぬ」

「これシーゴーさま、お前まへもずゐぶん經驗けいけんを積つんだ悪黨あくたうぢやないか。天狗てんぐがそれほど怖こほいのか。そして天狗てんぐの聲こゑは陰性いんせいだから、決けつして人の體たいに響ひびくものでない。おほかた酒さけにでも酔ようて乾兒こぶんの奴やつどもが口くちに竹筒たけづつでも當あてて、お前まへ達の膽試きもだめしをやつてゐるのかも知しれませぬよ」

「イエイエ、決けつして決けつして竹筒たけづつの聲こゑぢやありませぬ。人間にんげんの聲こゑでもなし、大變たいへんな強がうりき力ちからな聲こゑでございます」

「ハテ、妙めうな事ことを言いふぢやないか。どれ自分じぶんが行いつて調しらべて見みませう」

と落付き拂つた風でボツボツと着衣を整理し、悠然としてシーゴの後ろから、大杉の下へとやつて来た。

ヨリコ「そこに居るのは玄眞坊ぢやないか。何だい、天狗ぐらゐに慄つてゐるのかい」

玄眞「ハイ、女帝様、どうかお助け下さいませ。大變な事が出来て来ました。もう私も年貢の納め時です。身體強直して身動きが出来なくなりました」

ヨリコ「ホホホホ、まアよい腰抜けだこと。どれ、これから妾が樹上の天狗とやらを取つちめてやりませう」

この時樹上より又もや、
「ウーウーウーウー」

と千匹狼が一度に唸り出したやうな怖ろしい聲が聞こえて来た。シーゴ、玄眞は耳をかかへて打ち慄ひ其場に「パタリ」と打ち伏してしまつた。ヨリコは平然として樹上を打ち仰ぎながら、

「オイ、樹上に居る怪物は何物だ。いい加減に悪戯を致しておけ。ヨリコ姫が現

はれた以上は、如何なる汝が奸策も根底より看破してやらうぞや。その方は三五
教の宣傳使の供をいたす木ツ端武者だらう」

この落付き拂つたヨリコの聲を聞いて、さすがの梅公も舌を捲いた。樹上の花
香はヨリコ姫といふ聲を聞き……何となく聞き覚えもあり、もしか三年前に吾が
家を飛び出した姉上ではあるまいか、てもさても不思議な事だなア……と首を傾
けてゐた。樹上より、

「某は實のところは三五教の宣傳使梅公別命である。汝等悪黨どもオーラ山に立
てこもり、よからぬ事をいたすと聞き、神命を奉じ、汝等一同に改心を迫るべく、
その第一着手として汝等が詐術の根元たる樹上の諸燈を吹き消し、大天狗として
訓戒を與へてやつたのだ。どうだ、かく事の「ばれ」たる上はスツカリ改心をい
たすか、是でもまだ繼續して悪事をいたす覺悟か、返答聞かう」

玄眞坊は初めて人間と知り俄かに強くなり、樹上を打ち仰ぎながら、
「アハハハハ、猪口才千萬な三五教の宣傳使の玉子奴、いらざる「ほててんごう」
を致して後悔するな。吾々には三千の部下がある。汝の如き木ツ端武者、たとへ

鬼神きじんを挫ひしぐ勇ゆうあるも寡くわをもつて衆しゅうに敵てきすることは出来できまい。要いらざる【せつかい】
を止やめて樹上じゆじやうを下くだり、一時いちじも早はやく吾わが前まへに謝罪しやざいをいたせせ」

この間あひだにシーゴーは繩梯子なはばしこの縛くくりを解といたから耐たまらない。梅公うめこう、花香はなかの兩人りやうにんは急きふ
轉直下てんちよくかの勢いきほひで、ズルズルズドスンと樹下じゆかに落おちて來きた。ヨリコ姫ひめは手早てばやく女をんな
を引ひつ捉とらへ後手うしろでに縛しばり上げた。梅公うめこうはいささか腰こしを打うつて氣きが遠とほくなつてゐた間ま
にシーゴーの部下ぶかのパンクに高手たかて小手こてに縛しばられ、サンダー、スガコの幽閉いっへいしてあ
る石室いしむろの中なかに男女だんぢよとも投げ込な込まれて了しまつた。

ヨリコ「ホホホホ、いらざる構かまへ立たてをして縛いましめにつくとは情なさけない奴やつだなア。

飛とんで火ひに入る夏なつの蟲むし。ヨリコ女帝にょていの威勢ゐせいには如何いかなる者ものも敵かなうまいがな。これ、

玄眞げんしん、シーゴー確しつりなさらないのか。こんな事ことで肝きもを潰つぶすやうでは、バルガン城じやう
を占領せんりやうし、次ついで印度いんど七千餘國しちせんよこくを掌しやう握あくするやうな事ことは到底たうてい出来できますまいぞやや」

玄眞げんしん「私わたしも人間にんげんと知しれば別べつに驚おどろかないのです。人間にんげんなればたとへ何なん萬まん押おし寄よせて
來くるともビクとも致いたさぬ某それがしですが、中ちゆう有う界かいの魔ま神がみと聞きいては一寸ちよつと面喰めんくらはないで
はゐられませぬ。しかし人間にんげんだと言いうたつてこの山やまは天狗てんぐの巢窟さうくつと聞きいて居ゐます

から、本當の天狗が來たら困るでせう。その時の用意を今から講究しておかねばなりませんまい」

「これ玄眞坊、何を呆けてゐるのだ。たとへ中有界の魔であらうが、天界の鬼神であらうと、地獄の鬼であらうと、獅子、虎、熊、大蛇であらうが、萬物の靈長たる人間と生れて何怖るべき事があらうぞ。人間は萬有を支配するの權能を神から與へられてをるのだ。ちつと確りしなさい」

「ハイハイ確りいたします。何分よろしう願ひ申します。到底かふいふ時には貴女でなければ解決がつかませぬ」

ヨリコ「ホホホホ、天帝の化身様でも眞實ものの天狗には敵ひませぬかな。これシーゴ殿、年にも似合ぬ、お前も随分狼狽へましたね。ちと恥をお知りなさい。何ですか、高が男の一匹や二匹に肝を潰して、こんな事でどうして今後の大望が成就致しますか」

シーゴ「ハイ、面目次第もございませぬ。なにぶん突然の事と言ひ、消ゆべき筈のない火が消え、大木の上から不思議な聲がいたすものだからちよつと面喰ひ

ましたので、日頃沈着のある私も、玄眞坊の狼狽病が傳染いたしました、つい氣
後れ病が突發致しました。女帝様の懇切周到なる外科手術によつて、やつと全快
したやうでございます」

「ホホホホ、まア全快が出来て結構々々、藥禮は幾何出しますかな」

「ハイ、先づさうですな、藥、窮戦窮百九重九怨ばかり差上げませう。アハハハ」

「九死一生の場合を女帝さまに救はれたのだからな、そのくらゐはお出しになつ
てもよろしからう、ホホホホ。しかしながらあの怪しき男と女をよく取調べて後

ほど報告してもらひたい。私はこれから居間に歸つて暫く休息するから」

「ハイ、承知いたしました。玄眞坊と相談いたし、とつくと實否を調べ、改めて
御報告申し上げます。どうか明朝まで御猶豫を願ひます」

ヨリコはニコニコしながら打ちうなづき、足早に歸り行く。

（大正一三・一二・一七 舊一一・二一 於祥雲閣 加藤明子録）

第二〇章 眞鬼姉妹（一七〇二）

サンダー、スガコの二人は玄眞坊の強壓的戀の請求に手古摺つてゐた處へ、ま
たもや二人の男女が投げ込まれて來たのを見て、サンダーは思はず知らず「アツ
と叫んだ。女もまたサンダーやスガコの面を見て、「マアマア」と言つたきり、
口を噤んだ。

梅公は洒蛙洒蛙然として平氣に笑ひながら、

「たうとう猿も木から落ちるの喩、オーラ山の大天狗も芝居のやり損ひをやつて、
舞臺から墜落し、名もない奴にふん縛られ、かやうな女護の島へ落ち込んで來た。
何とマア不思議な事もあればあるものだ。人間萬事塞翁の馬の糞とはよく言つた
ものだ。揃ひも揃うて絶世の美人、しかし吾が妻君は例外として……お二人の姫
御前、貴女は何の理由あつて、かやうな所へ鎮座ましますのですかなア」
サンダー「ハイ私はコマの村のサンダーと申す者でございます。この方は、タラ
イの村のジャンクさまの娘でスガコ姫様でございます。悪者に拐かされ、日々苦

しい目に會はされてゐるのです。あなたは又どうしてこんな所へお越しになりましたか」

梅公はタライの村のサンヨに話を聞いて、花香を救はむとの決心を起したことも、ジャングの家に泊つて、スガコ姫の行方不明になつたこと、サンダーの失踪したことなどを聞き、義勇軍に従ひながら、どうしてもこの三人を救ひ出したいといふ真心から、師匠に別れて、ひそかにオーラ山へ向かつて駒に鞭うち駆けこむ途中、花香の危難を救ひ、相伴うて當山に登り、大杉に攀ぢ、彼等が魔術の奥の手たる燈火を吹き消し、天狗の聲色を使ひ、化が現はれて、取つ捉へられた事などを、逐一話し聞かせた。サンダー、スガコの兩人はこの話を聞いて、感謝の涙に袖をしぼりながら、

サンダー「見ず知らずの貴方様が、それほどまで吾々を助けやうと思召し、御苦勞下さいました事は、何ともお禮の申上げやうがございませぬ。實は私は、お聞及びでもございませうが、女に化けてゐますが、男でございませぬ。これなるスガコと夫婦となるべく、兩親の許嫁でございませぬが、スガコの行方を尋ねむために

當山へ參拜いたし、今日まで玄眞坊のために閉ぢ込められてをつたのでござい
す。なにとぞ御推量下さいませ」

と力なげにいふ。

梅公「ヤ、それで何もかも判りました。ナア二心配いりませぬ。こんな岩窟ぐら
ゐ、叩きわるかつて、朝飯前ですワ。モシモシ スガコさまとやら、必ず心配な
されますな。キツと私が救ひ出して上げますよ」

スガコ「ハイ有難うございます。不運な身の上でございますから、貴方のお助け
を頂かねば到底遁れる道はございませんせぬ」

花香「モシ、お嬢様、私はサンヨの娘花香でございます。お嬢様が何者にか攫は
れ、お行方が分らぬと言うて、村中の大騒動でございましたが、少時すると、バ
ラモンの軍人が参りまして、私を搔つ攫へ、母に手疵を負はせ、ホラが丘の森林
へ連れ込み、其所邊中を引きまはし、操を破らむと致しましたなれど、神様のお
蔭によつて、漸くその難を免れ、最後に至つて今や辱められむとする所へ、この
お方がお出で下されましてお助け下さつたのでございます。因縁と申すものは妙

なものでございますなア。私には一人の姉がございましたが、ある夜のこと修験者と手に手を取つて、家を脱け出し、もはや三年にもなりますが、どうしてゐる事やら、皆目行方が分らぬのです。それに不思議な事には、あの玄眞坊といふ男、何處かに見覚えがあるやうに思へてなりませぬ。暗がりでもハッキリ分りませぬが、身體の恰好といひ、聲といひ、どうも彼奴ぢやないかと思ふのでございます。梅公「あーあ、話が理におちて氣が鬱いで仕方がない。どうです皆さま、二男二女がよつてこの岩窟が割れるやうな聲で歌でも唄つてやりませうか。私が……何なら歌ひますから手を拍つて囃して下さい」

サンダー「どうかお願い致します」

梅公はヤケクソになり、大聲を出して唄ひ出した。

歌へよ歌へよく唄へ
岩戸の唐戸の割れるまで

玄眞坊は言ふも更
シーゴーとかいふ親玉も

これに従ふ三千の
泥棒の頭が割れるまで

歌へよ唄へよく唄へ
歌うて器量は下りやせぬ

美人のまします岩の中
ここは龍宮か天國か

丹花の唇月の眉
月日に等しき目の光

こんなナイスと一夜さの
宴をするのも面白い

酒はなけれど美人さへ
前にゐませば満足だ

玄眞坊奴が涎くり
何だかんだと朝夕に

口説き立てたがザマを見よ
肱鐵砲や後足の

砂の礫を浴びせられ
口アングリと悄氣返り

又もや天狗に肝潰し
弱腰抜かした可笑しさよ

この大將といふ奴は
たしかにヨリコと言ひよつた

もしや姉ではあるまいか
花香の姉も又ヨリコ

同じ名前は世の中に
澤山あれ共どこやらに

彼奴の聲がよく似てる
アア面白い面白い

神の仕組でこの岩窟
やつて來たのは天地の

かみがみさま
神々様の御心だ
早くこの戸を開けてくれ

げんしんぼう
玄眞坊よシーゴーよ
一つの祕密を言うてやる

なに
何ほど心を砕きつつ
天下を狙つて見たとこで

まへ
お前の知恵では及ばない
肝心要の救世主

ここ
此處にござるを知らないか
玄眞坊やシーゴーの

こしぬ
腰抜け身魂ぢや駄目だぞよ
俺のいふこと分らねば

によてい
女帝のヨリコを招んで来い
女帝であらうが何だろが

わ
吾が言靈の一節に
言向和して見せてやる

かみ
神は吾等と俱にあり
吾等は神の子神の宮

まが
いかなる曲の健びさへ
おめず恐れぬ神司

みちが
見違へするな早あけよ
スガコの姫や吾がワイフ

をんな
女に化けたサンダーさま
揃ひも揃うて美しい

つきゆきはな
月雪花が待つてゐる
俺は梅公宣傳使

こと
どんな事でも聞いてやる
安全無事の神の教

こんな悪事が何時までも
續くと思つちや間違ひだ

早く改心するがよい
女帝のヨリコを始めとし

何奴も此奴もやつて来て
吾が御前にひれ伏せよ

吾は救ひの神なるぞ
天教山にあれませる

木花姫のみことのり
神素盞鳴大神の

教を畏み月の國
ハルナの都に出向かふ

尊き神の珍柱
早くも迎へ奉れ

開けよ開けよ早開けよ
開けるが厭ならぶち割るか

吾が言靈の神力に
オーラの山も野つ原も

忽ちガタガタ
ビシヤビシヤと
顛覆させるは夢の間だ

俺の力が解つたら
一時も早く開けに來い

もはや夜明に近づいた
あけて嬉しい玉手箱

龍宮海の乙姫が
三人ここにまつて居る

お面が拜みたうないのかい
唐變木にも程がある

ああ惟神々々かむながらかむながら

叶はぬからあけてくれかな

アツハハハハハ オツホホホホア

と魔神の岩窟まがみ いはやに閉ぢ込められたのを知らずし面に笑つてゐる。がほ わら

玄眞坊は戸口にソツと耳を當て、様子を考へてゐたが……、

梅公の歌の中に、どうやら今やつて来た女は女帝の妹らしい。コリヤうつかり

しては居れない。また二人の女は女帝の妹が昵懇な奴と見える。あの天狗のマネ

をして失敗つた男は、妹の婿らしいぞ。何とかして大切に扱はねば、姉妹の對面

が事實になつたならば、その時は俺もサツパリ、ワヤ苦茶だ。忠義を盡すは今の

時だ。旗色のよい方へつく方が當世だ。シーゴーとは俺の方が、どうやら旗色が

悪くなつたやうだ。今の内に勢力のある方へ加擔するのが最善の行方だ……」

と獨語ちながら吾が居間へ歸り、酒や煙草や珍しき果物などを持ち出し來たり、

面色を和らげて、

「ハア、これはこれはお客様方、山奥の茅屋へよくも御入來下さいました。何か

差上げたいたのでございますけれど、御存じの通り不便の土地。これが私の力一杯の御馳走です。どうか精一杯おあがり下さいませ。私もヨリコ女帝様の御厄介になつてるツマらぬ男ですから、どうか、末永く可愛がつて頂きたうございます」
梅公「ハイ有難う。思召しは受けますが、今はお肚が膨れてをりますから頂戴いたしませぬ」

玄真「何かお腹立でもございませうかなれど、御機嫌を直して、私の心をおあがり下さいませ。メツタに天然の果然に毒などは入つてをりませぬから……」

「それでも餘り、氣の【毒】だから、御遠慮いたしませう」

「滅相もない。【キ】が毒になりましたら、箸で飯はくへませぬ。どうか、キの毒とか灰の毒とか言はず、キようおあがり下さいませ。あなた方は水入らずの間柄と思ひますから」

「水入らず……ではなくて、猫入らずかも知れませぬぞ、アハハハハ。澤山な鼠賊が横行して居りますから。チツた猫入らずも當家には買ひ込んでございませうね」

花香「ア、お前さまは、三年前に吾が家に泊り、姐さまを拐かしていんだ修験者
ぢやありませんか。マアマアマアよく似てること……」
玄眞「ハハハハ、ヤ、實のところは其時にお前の内に泊つたのは私だ。何とマア
大きくなつたね。どこともなくヨリコさまに似てるワイ。お母アさまも随分面立
のよい人だつたが、お前さまも姉さまに劣らぬ美人だ。これも何かの因縁だらう。
マアよう来て下さつた。お前さまが御姉妹と分つた以上、女帝さまに黙つてる譯
にも行かぬ。これから一つ女帝様に申上げて来る。また何か御馳走をして下さる
だらうから」
花香「一寸、玄眞坊さまにお断へ致しておきますが、この凜々しい男らしい方は
三五教の梅公別さまと言つて宣傳使ですよ。そして私の大事の大事の夫でござい
ますから、大切に扱つて下さいや。私が姉さまの姉妹とあれば、ここの女帝さま
の弟ですから、粗略な扱ひは出来ません、ホホホホ」
と稍顔を赤くし、袖に隠す。

玄眞坊は倉皇として女帝の居間に駆けつけ、聲まであわただしく、

「女帝様に申し上げます。夕々大變なお悦びが出来ました」

ヨリコ「大變なお悦びとは、どんな事が出来たのだえ」

玄眞「ハイ、あなたのお妹御の花香さまが、お婿さまを連れてお出でになったのですよ。あの杉の上から落ちて来た二人の男女が其の方です。何と驚くぢやありませんか」

「オホホホ、あのマア玄眞坊殿の慌て方ワイの。妾は杉の木から落ちた時、已に妹だと看破してゐたのだ。仕様もない者がやつて来て、折角の仕組が破れはせぬかと心配してるのだ。しかし妹と分つては手にかける譯にもいかず、同じ母の體内から出た、同じ血筋だから、何とかしてやらねばなるまい。そしてあの男は妹の婿らしいが、中々あれはシーゴーやお前のやうな弱蟲ではない。グズグズしてゐると岩窟退治をやられるか知れませぬよ。しかし打やつておく譯にもゆくまいから、女帝自ら出馬して、姉妹の名乗をしてやりませう、ホホホホ」

玄眞「サ、お伴いたしませう。エ、シーゴーの奴どこへ行きやがつたのだらう。右守司ばかり居つても、左守が居らなくぢや、女帝様の權式が上らない。どつか

へ潛伏してゐるだらう」

と呟いてゐる。シーゴは次の間から又一ツと面を出し、

「アハハハ、オイ玄眞、何を慌ててゐるのだ。もうかうなりや、毒を以て毒を制する法を講じなくちや仕方がないよ。うまく宣傳使を抱き込んで吾々の味方となし、女帝様の謀師と仰ぎ、俺達や一段下へさがつて、日頃の大望を成就すること

に努めねばなるまいぞ。女帝様に餘り口を叩かしちや權威がおちるから、そこはよく心得てをるのだ。しかし貴様は肝心の時になると、慌てるから、すぐに内兜を見透かされる。この談判の衝にはシーゴが當るから、むしろお前は沈黙を守つてる方が奥床しくてよからう。そしてサンダーといふお前の戀してゐた女は、コマの村の里庄の息子だ、一人は彼の許嫁のスガコ姫だ。主ある花を手折らうと思つたつて到底駄目だから今の中にスツパリ思ひ切つておくがよからう。妙な目遣ひをしてもらうと俺たちの面にかかる。第一女帝様の權威にかかはる。エエか、心得たか」

玄眞坊はスツカリ戀の夢も醒め、豆狸が小便壺へおちたやうな面をして膨れて

ある。この時一天を包みし黒雲は、折りから吹き来る山嵐に晴れ、大空は梨地色に星光燦爛として輝き初めて来た。ああ惟神靈幸倍坐世。

(大正一三・一二・一七 舊一一・二一 松村眞澄録)

(昭和一〇・六・一七 王仁校正)

あとがき

一、本巻は序文にもある通り御口述の順序よりすれば第六十八卷(山河草木未之巻)に當ります。然し御都合にて第六十六卷(高砂島に於ける國依別の子國照別の物語)第六十七卷(聖師様の蒙古入物語)に先んじて本巻を第六十六卷として發行さるることとなりました。右二巻はいづれも獨立した物語であります。

一、本巻は昨春金澤にて發行さるる『北國夕刊新聞』に『月の出潮』として連載されたものであります。

大正十五年六月十五日

編輯者識

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

靈界物語 第六六卷 山河草木 巳の巻

終り